

本文篇

## 凡 例

一 本文として今鏡の畠山本を用ゐる。

一 畠山本は、松村博司先生『歴史物語』（塙書房）に、「現存本中おそらく金沢文庫断簡に次いで古く、鎌倉中期頃と鑑定されている」とあり、現存する今鏡の完本の中では、最古の本文を有する。

一 畠山本を翻刻したものに、和田英松氏『今鏡 畠山本』（和田本）と、『新訂増補国史大系 今鏡』（国史大系本）とがある。本文篇は両書に拠り畠山本の本文を定めた。校訂に当り、次のやうな方針を採つた。

1 和田本と国史大系本とが相違する場合、普通和田本に拠るが、和田本が誤と思はれるところは国史大系本に拠る。上記を判断するに当り、蓬左文庫本などの他本も参照する。

2 畠山本である和田本と国史大系本とが一致しても、蓬左文庫本に比べると畠山本に誤脱があると認められる場合は、蓬左文庫本で補ふことがある。蓬左文庫本以外の板本などで補ふことは、最少限にとゞめた。

3 読み易くするため、畠山本の仮名に適宜漢字を宛てた。但しこの場合、畠山本の仮名はそのまま振仮名として残し、直ちに畠山本の原文に復元出来るやうにした。

4 仮名遣は改めず、そのままにした。

5 畠山本の行間に註せられた記載は、（原本傍書）として示した。「唐タウの太宗タイソウ」の如く片仮名で振仮名がある場合、そのまま示した。

- 6 漢字は印刷の便宜上略字体とした。「共養」「たまふ覧」「さい将」などは改めることをせず、そのまま示した。
- 7 畠山本では段落を分けてゐないが、本書では理解し易くするため、改行して段落を設けた。
- 8 句読点、濁点は新たに付け直した。語の清濁は最近の研究に基づくやうにとめた。会話、引用文の「」も新たに付け直した。

一 畠山本の本文を遺漏なく示すため、和田本と国史大系本とが相違する箇所は、漢字仮名の相違を含めて全て頭註に掲げるやうにとめた。但し

- 1 和田本で「む」とあり、国史大系本で「ん」とあるもの
  - 2 和田本で「こゝ」とあり、国史大系本で「ここ」とあるもの
  - 3 和田本で「申ゝ」「殿ゝ」とあり、国史大系本で「申し」「殿の」とあるもの
  - 4 和田本で「所ゝ」「人ゝ」とあり、国史大系本で「所々」「人々」とあるもの
- などは、頭註に掲げるのを略した。

一 和田本と国史大系本とが相違する場合、和田本に従ふ際は他本を挙げず、国史大系本に従ふ場合は他本も挙げるのを原則とした。

一 畠山本を蓬左文庫本などの他本で校訂した場合は、全て頭註に掲げた。

一 頭註の略称として左のやうにした。

和本 和田本（畠山本）

国本 国史大系本（畠山本）

蓬本 蓬左文庫本

前本 前田本（尊経閣文庫本）

金本 金沢文庫本 今鏡断簡

東本 東京大学蔵伝二条為定自筆本

長本 東京大学蔵長沢伴雄校本

板本 慶安三年刊板本

一 人名は誰を指すか明らかにするため、（ ）を付けて行間に註記した。

新世継卷第一

すべらぎの上 第一

一 雲井 子日

二 はつ春 ほしあひ もち月

三 きくの宴 こがねのみのり

四 つかさめし

すべらぎの中 第二

四のならばたむけ みのりのし

五 もみちのみかり つりせぬうらく

六 たまづさ ところぐのみてら

七 白河の花宴 鳥羽の御賀

八 春のしらべ やへのしほぢ

すべらぎの下 第三

九 おとこ山 むしのね

十 おほうちわたり 内宴

十一 をとめのすがた ひなのわかれ

十二 はなぞのゝにほひ

十三 ふた葉の松

ふぢなみの上 第四

十四 ふぢなみ むめのにほひ

十五 ふしみの雪のあした

十六 雲のかへし しら河のわたり はちすの露 をのゝみゆき

十七 うす花ざくら なみのうへのさかづき 宇治のかはせ

ふぢなみの中 第五

一  
む。ゆめー和本、国本「かめ」。本文に拠り改む。

十八 みかきのまつ きくのつゆ ふぢのはつ花

十九 はまちどり つかひあはせ

廿 かざりたち こけのころも

廿一 花のやま みづぐき ふるさとの花の色高松とも  
関院とも

# ふぢなみの下 第六

廿二 えあはせの哥 から人のあそび

廿三 たびねのここ ゆみのね かりがね

廿四 ますみのかけ

廿五 たけのよ むめのこのもと

廿六 花ちる庭のおも みやぎ野 しがのみそぎ

# むらかみの源氏 第七

廿七 うたゝね ほりかはのながれ ゆめのかよひぢ

廿八 ねあはせ ありすがは

廿九 むらさきのゆかり にあまくら むさしのゝ草 もしほのけぶり

みこたち 第八

卅 源氏のみやす所 花のあるじ宮大將とも  
源氏大將とも ふしゝば

月のかくるゝ山のは

卅一 はらゝのみこ

むかしがたり 第九

卅二 あしたづうすなみとも  
そめがみとも いのるしるし からうた まことのみち

かしこきみちゝ

うちぎゝ 第十

卅三 しきしまのうちぎゝ ならのみよ つくり物がたりのゆくゑ



一 序―和本、国本なし。補ふ。

## 序―

二 ぬ―国本「ぬぬ」

三 さて―和本「さまで」。国本、蓬本に拠り改む。

弥生の十日あまりのころ、同じ心なる友だちあまたいざなひて、初瀬に詣で侍しつゝ、よきたよりに寺めぐりせむとて、大和の方に旅ありき日ごろするに、道遠くて日も暑ければ、木陰に立ち寄りて、休むとて群れる程に、みづわさしたる女の杖にかゝりたるが、女の童の花がたみにさわらび折り入れて、臂にかけたる一人具して、その木の下にいたりぬ。「遠き程にはあらねど、苦しくなりてはべれば、おはしあへる所はゞからしけれど、宮この方よりものし給にや。昔も恋しければ、しばしもなづさひたてまつらむ」といふけしきも、口すげみわなくやうなれど、年寄りたる程よりも、昔おぼえてにくげもせず。「このわたりにおはするにや」など問へば、「もとは都に百年あまり侍て、その後、山城の伯のわたりに五十年ばかり侍き。さて後、思ひかけぬ草のゆかりに、春日野わたりに住み侍なり。すみかのとなりかくなりし侍もあはれに」といふに、年のつもり聞く程に、みな驚きてあさましくなりぬ。

「昔だにさほどの齢はありがたきに、いかなる人にかおはすらむ。まことなら

—  
けるに—国本「けり」

ば、ありがたき人見たてまつりつ」といへば、うち笑ひて、「つくも髪はまだおろし侍らねど、仏の五々のいむ事を受けて侍れば、いかゞ浮きたる事は申さむ。祖父に侍しものも、二百年に及ぶまで侍き。親に侍しも、そればかりこそ侍らざりしかども、百年にあまりてみまかりにき。嫗もその齢を伝へ侍にや、いまくと待ち侍しかど、今はおもなれて、常にかくてあらむずるやうに、念仏などもをこたりのみなるも、あはれになむ」といへば、「さていかにをはしけるつゞきにか。あさましくも、長くもをはしける齢どもかな。唐の書読む人の語りしは、三千代へたる人もありけるに、百年を七かへりすぐせるもありければ、この世にもかゝる人のおはするかな」と、この友だちの中にいふめれば、「祖父はむげにいやしきものに侍りき。後の宮になむつかへまつり侍ける。名は世継と申き。をのづからも聞かせ給らむ。口にまかせて申ける物語とゞまりて侍めり。親に侍しは、なま学生にて大学に侍き。この女をも若くては宮仕などせさせはべりて、唐の哥、大和哥など、よく作り詠み侍しが、越の国の司におはせし御女に、式部の君と申し、人の、上東門院の后宮と申し、時、御母の鷹司殿にさぶらひ給ひし局に、あやめと申して、まうで侍しを、『五月に生れたるか』と問ひ給しかば、『五日になむ生れて侍ける。母の志賀の方にまかれりけるに、舟にて生れ侍ける』と申すに、『さては五月五日、舟の中、波の上にこそあなれ。午の時にや生れたる』と

侍しかば、「しかほどに侍けるとぞ親は申侍し」など申せば、「百度鍊りたるあかゞねなゝりとて、古をかゞみ、今をかゞみるなどいふ事にてあるに、古もあまりなり。今鏡とやいはまし。まだおさゞしげなるほどよりも、年も積らずみめもさゝやかなるに、小鏡とやつけまし」など語れば、「世に人の見興すること語り出されたる人の孫にこそおはすなれ。いとあはれにはづかしこそ侍れ。式部君誰がことにか」と問へば、「紫式部とぞ世には申なるべし」といふに、「それは名高くおはする人ぞかし。源氏といふめでたき物語作り出して、世に類なき人におはすれば、いかばかりの事どもか、聞ゝもち給へ覧。うれしき道にも逢ひきこえるかな。昔の風も吹き伝へ給ふ覧。しかるべき言の葉をも伝へ給へ」といへば、「かたぐうけたまはる事多かりしかども、物語どもにみな侍らむ」といへば、「その後の事こそゆかしけれ」といふに、「近き世の事も、をのづから伝へ聞ゝ侍れば、おろ／＼年の積りに申侍らむ。若く侍し昔は、しかるべき人の子など三四人うみて侍しかど、この身のあやしさにや、みな法師になしつゝ、あるは山踏しありきて、あとも留めはべらざりき。あるは山籠りにて、おほかた見る世も侍らず。たゞ養ひて侍五節命婦とて侍し、うちわたりの事も語り、世の事もくからず申て、琴のつま鳴らしなどして聞かせ侍るも、齡のおる心地し侍し、早くかくれ侍て。又主殿のみやつこなる男の侍も、初冠せさせ侍しまで養ひ立て

— みつぎ—国本「みつぎ」

「この春日の里にも忘れずまうで来るが、朝浄め御垣の内につかうまつるにつけて、この世の事も聞ゝ侍。源を知りぬれば、末の流れ聞くに、心汲まれはべり。世継が申をける万寿二年より、今年は嘉応二年庚寅なれば、年は百年あまり四十の春秋に、三年ばかりや過ぎ侍ぬらむ。代は十つぎあまり三つぎにやならせ給覽とぞおぼえ侍。その折、万寿二年に今年なると申たれば、かの後一条の帝、世を保たせ給事廿年おはしましゝかば、万寿二年の後、いま十かへりの春秋は、残り侍覽。神武天皇より六十八代に当らせ給へり。その御代より申侍覽」とて。

一すべらぎの上第一―和本、国本なし。目録に拠り補ふ。

## すべらぎの上第一

くも井

二き―国本「にき」

井もく9

後一条のみかどは、前一条院の第二の皇子におはします。御母上東門院、中宮彰子と申き。入道前太政大臣道長のおとゞの第一の御むすめなり。このみかど寛弘五年長月の十日あまり一日の日生れさせ給へり。同年の十月十六日にぞ親王の宣旨聞えさせ給ひし。同八年六月十三日東宮に立させ給。御年四つにおはしませき。一条院位去らせ給て、御いとこの三条院東宮におはしませ給へり。譲り申させ給しかば、その御かはりの東宮に立させ給へりき。かの三条院位におはします事は、五とせばかり過ぎ給て、長和五年睦月の廿九日に、位をこのみかどに譲り申させ給ひき。御年九にぞおはしませ給。さて東宮には、かの三条院の式部卿の御子を立て申させ給へりき。摂政は、やがて御祖父の入道おとゞ左大臣とて、前のみかどの関白におはしませ給て、ひき続かせ給て、次の年の三月に、御子の宇治

一 一に「国本」には一

二 如く「国本」ごとく

三 雪井「国本」「登る」

四 みかうし「和本」みかうし。国本に拠り改む。

のおとゞ大将と聞えさせ給しに、譲り申させ給にき。その日やがて内大臣にもならせ給ふと、聞えさせ給ひき。

その八月九日東宮<sup>(敦明)</sup>わが御心とのかせ給き。三条院も卯月<sup>うづき</sup>に御ぐしおろさせ給。

五月にかくれさせ給ひぬるにも、世の中さうぐしくおもほしめすにや、御病な

ど聞えて、かくさらせ給ぬれば、御かどの御をとうとの第三親王<sup>(後朱雀)</sup>をこのかはりに

立て申させ給。廿五日にぞ前の東宮<sup>(敦明)</sup>に院号聞えさせ給て、小一条院と申。年毎の

つかさくらゐ、もとの如く<sup>二</sup>給はらせ給。御隨身など聞え給き。堀河<sup>ほりかは</sup>の女御<sup>(定子)</sup>の「見

えし思ひの」など詠み給へる、古き物語に待めれば、こまかにも申はべらず。

寛仁二年正月には、上の御年<sup>うへ</sup>十にあまらせ給ひて、三日御元服させ給へれば、

きびはにおはしますに、御かうぶり奉りて、大人にならせ給へる御姿もうつくし

う、いとめづらかなる雪井<sup>三</sup>の春になむはべりける。卯月の廿八日には、大内やう

く造り出してわたらせ給。白金<sup>しろかね</sup>の台、玉の御階<sup>みはし</sup>、磨き立てられたる有様いとき

よらにて、明らけき御代の曇りなきも、いとあらはれはべるなるべし。御格子<sup>四</sup>

も、御簾も、新しくかけわたされたるに、雲の上人の夏衣<sup>なつころも</sup>、ごたちの装など、い

とゞ涼しげになむはべりける。大宮も入らせ給。春宮もわたらせ給て、梅壺<sup>うめつば</sup>にぞ

おはします。入道おとゞの四のきみは、威子の内侍のかみと聞え給し、今宵女御<sup>こよひ</sup>

に参り給て、藤壺<sup>ふじつば</sup>におはします。神無月の十日あまりの頃、后に立させ給ふ。国<sup>こ</sup>

一 大宮—國本「大宮」  
高陽院行幸—國本「高陽院の行幸」

母(威子)も后(威子)も、姉妹におはしませば、いと類(たぐひ)なき御(み)采(さい)えなるべし。

廿二日(威子)に上東門院に行幸ありて、桂(かつら)を折(お)る試(こころ)みせさせ給。題(だい)、「霜(しも)を経て菊(きく)の性(せい)を知る」、又「翠(みどり)の松色(いろ)を改(あらた)むることなし」などぞ聞(きこ)え侍(し)し。(道長)太政大臣奉(たてまつ)らせ給へるとなむ。八月廿八日、東宮(後朱雀)御元服させ給。御年十一(とし)にぞおはしまし、。

九月廿九日(道長)に入道おとと、東大寺にて御戒受(かいう)けさせ給き。同四年庚申三月廿二日(威子)に、無量寿院造り出させ給て、供養(くやう)せさせ給。后(威子)みどころ行啓(けい)せさせ給ふ。御有様(ありさま)ども、古き物語にこまかに侍(は)れば、さのみ同じ事をや申重(まか)ね侍べき。十月には、入道のおとと比叡(ひゑ)に登り給て、恵心とかいひて、御戒重(かいかさ)ねて受けさせ給。

治安二年 壬戌七月十四日(威子)法成寺に行幸せさせ給き。入道おとと金堂供養せさせ給しかば、東宮も、后(威子)たちも、皆行啓(けい)せさせ給き。罪(つみ)ある者(もの)ども、皆許(みなゆる)されはべりにけり。三年正月に、太皇太后宮に朝觀の行幸せさせ給ひき。春宮も同じやうに行啓(けい)せさせ給ける。二人の御子おはしませば、いと類(たぐひ)なき宮のうちなるべし。十月十三日上東門院の御母(威子)鷹司殿、六十の御賀せさせ給。その御有様昔の物語に侍(は)れば、この中にも御覽せさせ給へる人もおはしますらむ。

万寿元年九月十九日、関白殿(賴通)の高陽院に行幸ありて、競馬御覽(くらひ)せさせ給べきにて、太皇太后宮、まづ十四日にわたりゐさせ給てぞ、待ちたてまつらせ給ける。かくて廿一日(威子)に大宮は内へ入らせ給き。高陽院行幸には、かの家の司加階(つかかゐ)などし

一 おとこ宮―国本「おとみ宮」

はべりけり。村上（むらかみ）の中務（なかつくさ）の宮の御子源氏（みなもとのうぢ）の中将を、入道おとこの御やしなひ子と聞え給。この度（たび）三位中將になり給き。

二年八月三日春宮（はるのみや）の御息所（みやす）嬉子（うれし）、男宮（おとこ）うみたてまつり給て、五日かくれさせ給き。入道おとこの六君（むぎみ）におはする。御さいはひの中に、あさましく悲しと申もをろかにはべれど、後冷泉院をうみをきたてまつり給へれば、いとやむ事なくおはします。その折（せ）の悲しさは、類（たぐひ）なく侍しかども、生きて后（きさき）に立ち給へる御姉（あね）たち（御子）よりも、おはしまさぬあとのめでたさは、こよなくこそはべめれ。

## 子 日

二 選子内親王―国本「選子内親」

三年の正月十九日、太皇太后宮御様（みまか）変へさせ給き。后（きさき）の御名もとめさせ給て、上東門院と申き。四十にだにまだ満（みみ）たせ給はぬに、いと心かしこく世をのがれさせ給。めでたくもあはれにも聞えさせ給ひき。大斎院と申しは、選子内親王と聞えさせ給し、この御事を聞かせ給て、詠（よ）みて奉（たてまつ）らせ給へる御歌、

君（きみ）はしもまことの道（みち）に入りぬなりひとりや長（なが）き闇（やみ）にまどはむ

この斎院は、村上（むらかみ）の皇后宮（みくら）のうみをきたてまつらせ給へりしぞかし。東三条殿（東三条殿）の



一 御すまゐ—国本「御すまひ」

二 ことば—国本「こと葉」

御いもうとなれば、この入道殿には御をばに当らせ給ぞかし。長月には、中宮御産と聞えさせ給て、姫宮うみたてまつらせ給。左兵衛督兼隆と聞え給しが家をぞ、御産屋にはせさせ給へりし。男宮におはしまさぬはくちおしけれど、御産養など、心ことにいとめでたく、ことはりと申ながら聞え侍りき。この姫宮は、後冷泉院の後二条院と申し御事なり。東宮にはじめて参らせ給ける頃、出羽の弁見たてまつりて、

春毎の子日は多く過ぎぬれどかゝる二葉の松は見ざりき

とぞ詠めりける。

同四年正月には、上東門院に年の初のみゆきありて、朝観の御拝せさせ給き。

常の所よりも、御すまゐ有様いとほえくしく、唐絵などのやうに、山の色、水のみどり、木立、立石など、いとおもしろきに、位にしたがへるいろくの衣の袖、近衛司の平胡篲、平緒など、目もあやなるに、きぬの色まじはれるうちより、唐の舞、高麗の舞人、左右かたぐ袖振るほどなど、所にはえて、おもしろしなども、言葉も及ばずなむ侍りける。

霜月には、入道太政大臣御病重らせ給て、千人の度者とかやいひて、法師になるべき人の数のふみ賜らせ給と聞え侍き。法成寺におはしませば、その御寺に行幸ありて、とぶらひたてまつらせ給。御誦経、御布施などさまゝ聞え侍りき。

一  
は「国本」ぞ二  
侍り―国本「侍」

(後朱雀) 東宮にも行啓せさせ給。御孫、内、東宮におはしませば、御病の折節につけても、御栄へのめでたさ、昔もかゝる類やは侍りけむ。師走の四日には、入道殿かくれさせ給ぬれば、年もかはりて春の初の節会などもとまりて、位など賜はする事も、程過ぎてぞ侍りける。長元二年如月の二日、中宮又姫宮うみたてまつらせ給へり。この姫宮は、後三条院の后におはします。二人の姫宮たち、二代の帝の后におはします。いとかわひくしき御有様なり。

六年霜月に、應司殿、七十の御賀せさせ給とて、女院、中宮、関白殿、内の大<sup>(教通)</sup>臣、かたぐ、當ませ給き。童舞などいとうつくしくて、まだいはけなき御齡<sup>(教通)</sup>どもに、唐人の袖振り給有様、いとらうありて、いかばかりか侍りけむ。又の日内に召して、昨日の舞ども御覧せさせ給へり。舞人雪の上許さるゝ人く聞え侍りき。10 舞の師も、つかさ賜りて、近衛のまつり事人など加へさせ給けりとなむ。かの御賀の屏風に、臨時客の所を赤染の衛門が詠める。

むらさきの袖をつらねて来たるかな春立つことはこれぞうれしき  
又子曰かきたる所詠める哥も、優に聞え侍りき。

万代のはじめに君が引かるれば子の日の松もうらやみやせむ  
同じき九年弥生の十日あまりの程より、上の御悩みと聞えさせ給て、神く  
みてぐら奉らせ給へる、さまぐの御祈り聞え侍りき。殿上人御使にて、左右の

一の和本なし。

二色一和本「也」。国本、蓬本に拠り改む。

御馬など引かれ侍りけり。御年三十にだにいま一つ足らせ給はぬいとあたらし。されど廿年保たせ給、末の世にありがたく聞えさせ給き。まだおはします有様に、御おとうとの東宮に、位譲り申させ給さまりけり。後の御ことのよそおしかるべきによりて、位おりさせ給心なるべし。男御子のおはしまさぬぞうちおしき。いづれの秋にか侍りけむ。「菊の花星に似たり」といふ題の御製、唐の御言の葉聞え侍りき。

司天記取葩稀色 分野望看露冷光

とか人のかたり侍し。御才もかしこくおはしましけるにや。菩提樹院にこの帝の御影おはしましけるを、出羽の弁が詠めりける。

いかにしてうつしとめけむ雲井にてあかずかくれし月の光を

かの菩提樹院は、二条院の御堂なれば、御ころざしのあまりに、父の帝の御姿をかき留めて、置きたてまつらせ給ひけるなるべし。思ひやりまいらするも、いとあはれに悲しくこそ侍れ。

三 はつ春一和本、国本なし。目錄に拠り補ふ。

は三 つ 春

一 おはします―国本「をします」  
と―和本、国本「成」。蓬本に拠り改む。

三 とて―国本「て」。

四 御あに―和本、国本「御あね」。蓬本に拠り改む。

五 御はら―和本「御は」。国本、蓬本に拠り改む。

六 御だう―国本「みだう」  
七 むまこ―和本、国本「むこ」。蓬本に拠り補ふ。

八 きさき―和本、国本「さき」。蓬本に拠り補ふ。

後朱雀院と申すは、先<sup>さき</sup>の一条院の第三の王子、御母上東門<sup>(彰子)</sup>の院、先帝<sup>(後一条)</sup>と同じ御はらからにおはします。この帝寛弘六年己酉<sup>つうと</sup>と申<sup>と</sup>、年の霜月の廿五日に生れさせ給へり。七年正月十六日に、親王と聞<sup>き</sup>ゑさせ給。寛仁元年八月九日東宮に立<sup>た</sup>せ給。御年九と聞<sup>き</sup>へさせ給き。長元九年四月十二日位に即<sup>くらゐ</sup>かせ給。御年廿八。

その年、御即位、大嘗会など過<sup>ぎ</sup>ぎて、年もかはりぬれば、いつしか睦月<sup>むつき</sup>の七日の日、関白左の大臣<sup>みち</sup>とて、宇治<sup>(相通)</sup>の太政大臣<sup>おほき</sup>をはし、女御<sup>(順子)</sup>奉らせ給。御門の御兄<sup>四</sup>にをはし、故式部卿<sup>(敦基)</sup>のみこの女君<sup>をむねみ</sup>の、村上<sup>(良平)</sup>の中務<sup>(隆徳)</sup>の宮の女の御はらにを

はせしを、関白殿の御子にしたてまつりて、女御に奉り給えるなり。一条院の皇后宮<sup>(定子)</sup>の、うみたてまつり給へりし一の御子にをはしませば、東宮にも立<sup>た</sup>給へかりしを、御後見<sup>うしろみ</sup>をはしませずとて、二の御子にて先帝<sup>(後一条)</sup>、三の御子にてこの御門、

二人御堂<sup>ふたりごどう</sup>の孫、関白の御甥<sup>(相通)</sup>にをはしませば、うち続<sup>つづ</sup>き即<sup>つづ</sup>かせ給へるなり。

かの一条院の皇后宮は、御せうとの内<sup>(伊勢)</sup>の大臣<sup>をみ</sup>の、筑紫<sup>(敦基)</sup>にをはし、事<sup>こと</sup>もに思<sup>おも</sup>ひなさせ給て、御様<sup>さま</sup>かへさせ給へりし後に、その式部卿のみこは、うみたてまつらせ給るなり、唐国<sup>から</sup>の則天皇后<sup>(太宗)</sup>の御髪<sup>みけ</sup>をろし給て後に、王子うみ給けむやうにこそおぼえ侍しか。されば彼は<sup>かれ</sup>は前の御門<sup>(太宗)</sup>の女御にて、かの御門かくれさせ給にければ、世<sup>よ</sup>を背<sup>そむ</sup>きて、感業寺といふ寺<sup>てら</sup>に住<sup>す</sup>み給けるを、前の御門の御子位<sup>(高宗)</sup>に即<sup>くらゐ</sup>き給て、かの寺にをはして見給<sup>み</sup>へりけるに、御心や寄<sup>よ</sup>り給けむ、さらに后<sup>ハミ</sup>に立<sup>た</sup>て給へ

一 ことに「和本、国本」こと。蓮本に拠り補ふ。  
二 うけ給「和本、国本」う給。蓮本に拠り補ふ。

三 申さ「和本、国本」申さ。蓮本に拠り改む。

四 かけ「和本」かれ。国本、蓮本、後拾遺集に拠り改む。

りけるを、これは同じ御世の元の後なれば、いたくかはり給はぬ様にて、なのめなる様に付き。かしこき御世の御事申侍もかたじけなく。かの皇后宮の女房、肥後守元輔と申が女清小納言とて、ことに情ある人に侍しかば、常にまかり通ひなとして、かの宮の事もうけ給なれ付き。その式部卿のみこの御女にはしませば、帝には姪に当らせ給へり。かくて弥生の朔日に、后に立ゝせ給ぬ。御年廿二にぞをはしまし。

元の後（皇子）は皇后宮にならせ給き。その元の後（皇子）は、東宮にをはしまし、時より参り給へりき。三条院の姫宮にをはします。それは御年廿五になり給へり。陽明門院と申はこの御事なり。御髪（三条）のうつくしさを、故院え見まいらせぬ、くちをしくとて、さぐり申させ給けむも思やられて。同じ后と申せど、やむごとなくをはします。久しく内へ参らせ給はざりける頃、内より、

あやめ草（四）かけし袂のねをたえてさらに恋ちにまどふ頃かな

と侍けむ。御返は忘れ侍にけり。東宮にをはしまし、時の御息所に、この御堂の六の君参り給て、内侍督と聞へ給し、後冷泉院の今の東宮にをはしまし、うみ置きたてまつりて失せ給にしかば、この宮は、其後参り給へるなり、故内侍督の御もとにも、「霞のうちに思ふ心を」と詠ませ給ける御歌、給給ひけると聞侍しものを。

- 一 よばふ—国本「よそふ」
- 二 すまし—和本、国本「ますさし」。蓮本に  
抛り改む。
- 三 まちとり—和本「まちとりて」。国本、蓮  
本に抛り改む。
- 四 うちつゞき—国本「うちつき」
- 五 ゆげいのすけ—国本「げいのすけ」
- 六 御よそひ—和本、国本「御よにひ」。蓮本  
に抛り改む。
- 七 こと—和本、国本「こと」。蓮本に抛り  
改む。
- 八 みかき—国本「みうき」

長暦元年神無月廿三日、関白殿高陽院に、上東門院わたらせ給て行幸ありて、  
君達、院司など、加階どもし給き。かくて年も明けぬれば、又正月二日、上東門  
院に朝覲のみゆきありて、いつもと申ながら、猶この院のけしき有様、山の嵐よ  
ろづを呼ばふ声をつたへ、池水も千歳の影をすまして、待ちとりたてまつり給き。  
先帝かくれさせ給へれども、かくうち統きてをはします。二代国母と申もやむご  
となく。

又三日は、東宮の朝覲の行啓とて、内に参らせ給。御門みゆきよりも、事しげ  
からぬものから、はなやかにめづらしく、鞆負の佐一員など、ひきつくろいたる  
けしき、心ことなるべし、すべらぎの御よそひ、みこの宮の御袖の色かはりてめ  
づらしく、御拝の有様など、袖ふり給も、立居の御よそいうつくしくて、喜びの  
涙も押へがたくなむありける。つらなれる紫の袖も、事にしたがへるあけもみど  
りも、はなやかなる御垣の内の春なりけるとなむ聞え侍し。

ほしあひ

中宮は去年より、いつしかただならずならせ給て、霜月の十三日、左の大臣の

一 なほ一國本「なを」

二 しげき一和本、國本「しげ」。蓬本に拠り補ふ。

三 まいるにも一和本「まいるも」。國本に拠り改む。  
四 しめりたる一和本、國本「しめたる」。蓬本に拠り補ふ。

高倉殿に出でさせ給へりしが、次の年の四月一日、女（孫子）みこうみたてまつり給て、又うちつゞき又の年（孫子）も、同じやうにまかり出で給て、丹波守行任のぬしの家にて、長暦三年八月十九日、なほ女（孫子）みこうみたてまつり給て、同じき廿八日失せさせ給にき。御年廿四。あさましくあはれなる事かぎりなし。いと秋のあはれそひて、有明の月の影も、心をいたましむる色、夕の露のしげきも、涙をもよをすつまなるべし。

かくて九月九日、内より故中宮（孫子）の御ために、七寺に御誦經させ給。御門御服（後朱雀）率りて、廃朝とて、清涼殿の御簾をもをろしこめられて、昼の御膳参るにも声立て、奏しなどすること（四）もせず。よろづしめりたるまゝには、夕の螢をもあはれとながめさせ給て、秋のとしびもかゝげつくさせ給つゝ、心苦しき折節なりけるに、廿日ぞ解陣とかいひて、よろづ例（例）ざまにて、御殿の御簾なども巻きあげられ、すこし晴るゝけしきなれど、なを御けしきは、尽きせず見えさせ給ける。神無月も過ぎぬれば、御忌も末になりて、かの失せさせ給し宮にて御法事あり。梢の色も、風のけしきも、思知りがほなる様なり。くれなる（はら）ぬ昔のあとも、法の庭とて、清めらるゝにつけても、事にふれてあはれ尽きせざりける。

霜月の七日の日ぞ、内には始めてまつりごとさせ給。南殿に出でさせ給ひて、官奏などあるべし。後一条の中宮（孫子）に侍ける出雲のごといふが、この宮に侍し伊賀

一 きみ—国本「君」

少将がもとに、

いかばかり君歎くらむ数ならぬ身だにしぐれし秋のあはれを

と詠めりける。秋の宮うち続き、秋失せさせ給つるに、いとらうありて思やられけるも、あはれにこそ聞え侍にしか。又の年の七月七日、関白殿に、内より御消息ありて、

去年の今日別れし星もあひにけりなどたくひなき我が身なるらむ

と詠ませ給て侍けむこそ、いとかたじけなく、情多くをはしましける御時かなと、うけ給しか。楊貴妃のちぎりも思出でられて、星合の空、いかにながめあかさせ給けむといとあはれに、「尋ね行くまぼろしもがな」とや、おぼしめしけむと、をしはかられてこそ伝へ聞へ侍しか。詩なども、をかしく作らせ給けるとこそ聞へ侍しか。「秋のかげいづち帰らむとす」となどいふことを、

路山水にあらざれば、誰かとむるにたへむ

跡乾坤にまかせたれば、尋ぬる事えむや

など作らせ給へりけるとこそうけ給しか。乾坤といふは、天地といふことにぞ侍るなる。

二 長元二年—和 본「長久二年」。国本に拠り改む。  
三 のやよひのころ—和 본、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

長元二年三月四日、花の宴せさせ給て、「歌の師は鶯にしかず」とかいふ題賜びて、桂折る心みありと聞え侍き。次の年の弥生のころ、堀河の右大臣、その時



一 申し、國本「申し」  
二 をとり國本「おとり」

三 式部卿大ゆう國本「式部卿大ゆう」

四 またー和本「まさ」。國本に拠り改む。

五 おらー和本、國本「侍ら」。蓬本に拠り改む。

六 ともし火ー和本、國本「とをしみ」、蓬本に拠り改む。

七 ー國本なし。

八 ながくにー和本、國本「なりくに」。蓬本、扶桑略記、百鍊抄に拠り改む。

九 生行ー和本、國本「長行」。蓬本、扶桑略記、百鍊抄に拠り改む。  
一〇 くにー國本「くそ」

東宮大夫と申し、女御奉り給き。帥(伊周)の内の大臣の御女の御腹なり。をとゞたちにも劣り給はず、いとめでたく侍き。神無月の頃、大二条殿の内大臣と聞え給し、  
二の君内侍督になりて参り給て、かたぐはなやかにをはしき。

十一月には、二の宮御書始(後三条みや)とて式部卿大輔(後三条みや)平周と聞えし博士、御注孝經といふ

書、教へたてまつりて、藏人実政、また尚復とて、それも御師なるべし。同じ四

年の三月にも、佐国、孝言、時綱、国綱といふものども試みさせ給き。弓場殿に

てぞ作りて奉りける。もと桂を折りたるは、博士をのぞみ、いまだ折らぬものは、

ともし火のゝぞみなむありける。句毎にもろこしの博士の名ゝど置きければ、作

りかなふる人かたくなむありける。

寛徳元年八月に、大隅守長国但馬介になり、民部丞生行同じ国の掾になし給て、  
高麗人のかの國ゝ着きたる、とぶらはせ給き。御なやみとて、あくる年正月十六

日、位去らせ給。御髪をろさせ給。御年三十七になむをはしまし。世を保たせ

給こと九年なりき。まだ若くをはします様、惜しみたてまつらずといふ人なし。

先帝は廿九にをはしましき。これはされど八年の春過ぎさせ給へり。母后のあま

り長くをはしますに、かくのみをはしませば、御幸いの中にも、御歎きたえざる

べし。なを御孫の一のみこは御門、二のみこは東宮にをはしませば、いとやむご

となき御有様なるべし。

## もちづき

一 ばー和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

世継も、帝の御ついでに国母の御事申侍れば、この御門の御母后の御事、このついでに申侍べし。御年廿一二にをはしまし、時、後一条院、御朱雀院うち続きうみたてまつらせ給へり。土御門殿にて、後一条院うみたてまつらせ給へりし七夜のおほみ遊びに、御簾のうちより出され侍りける杯にそへられ侍し歌は、昔の御局の詠み給へりし、

二 もちー和本、国本「もと」。蓬本、後拾遺集、紫式部日記、紫式部集に拠り改む。

めづらしき光さしそふ杯はもちながらこそ千世は廻らめ  
とぞおぼえ侍。

三 伊勢大輔―国本「い勢大輔」

その女院は十三より后にをはしましき。一条院かくれさせ給て、後一条院幼くをはしましけるに、撫子の花をとらせ給ければ、御母后、  
見るまゝに露ぞこぼるゝをくれにし心も知らぬ撫子の花  
五節の頃、昔を思出で、殿上人参りけるに、伊勢大輔、

四 御とし廿五ときこえさせ給き―和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

はやくみし山井の水の薄氷うちとけざまはかはらざりけり  
とぞ詠みて出し侍ける。寛弘九年二月に、皇太后宮にあがりゐさせ給き。御年廿

一 御な―和本、国本「御な」。蓬本に拠り改む。

二 なほ―国本「なを」

三 の―国本なし。

五と聞えさせ給き。後一条院の帝、位に即かせ給て、寛仁二年正月に、大皇太后宮にならせ給き。万寿三年正月十九日、御様かへさせ給。御年三十九、御名は清浄覺と申けり。後の御名とゞめさせ給て、女院と聞えさせ給。年ごとのつかさくらる給らせ給ことは、同じやうにかはり侍ざりけり。長暦三年五月七日、御髪をろさせ給。頭基の入道中納言、

世をすてゝ宿を出でにし身なれどもなほ恋しきは昔なりけり

と詠みて、この女院に奉り給へる御かへし、

つかの間も恋しきことの慰まばふたゝび世をばそむかざらまし

と詠ませ給へる。初は御髪そらせ給て、後に皆をろさせ給心なるべし。中納言、後一条院のおぼえの人にをはしけるに、御忌にをはして、御殿油も奉らず侍りければ、「いかに」と尋ね給けるに、「女官ども内に参りて、かきともしする人もなし」など聞ゝ給に、いと悲しくて、御門のかくれさせ給て、六日といふに頭をろして、山深く籠り給へりけり。年三十七になむをはしける。聞く人涙を流さずといふ事なくなむ侍りける。花山の僧正の、深草の御門の御忌に御髪をろし給けむにも、をくれぬ御心なるべし。なを尽きせずおぼしけるにこそと悲しく、御かへしもいとあはれに、御母后さこそはおぼしめしけめとをばえて。

この東北院は、この院の御願にて、父をとゞの御堂、法成寺のかたはらに造ら

一 侍り―国本「侍」

二 よも―和本「も」。国本、蓬本に拠り補ふ。

三 しをにいろ―国本「し侍にいろ」

四 御堂―国本「御だう」

五 に―和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

六 待賢門院―国本「待賢門」

七 あきたかの―和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

八 ける―和本「る」。国本、蓬本に拠り補ふ。

せ給へり。山の形、池の姿もなべてならず、松のかげ、花のこずゑも、外にはすぐれてなむ見え侍る。九月十三日夜より、望月のかげまで、仏の御顔も光そへられ給へり。御念仏始まる程に、上達部、殿上人参り集まり給へるに、宇治の太政大臣の、朗詠侍なむと勤めさせ給ければ、斉信の民部卿、年たけたる上達部にて、「極楽の尊を念じたてまつること一夜」と、うち出し給へりけむ、折節如何にめでたく侍りけむ。斉名といふ博士の作りたりけるが、生ける世に、如何にいみじくおぼえ侍けむ。この世ならば、今の人の作りたる事よも出し侍ざらまし。殿上人紫苑色の指貫、この御念仏よりこそ着始め給しか。

この御堂の土御門の末にあたて、上東門院と申なり、この後、代々の女院の院号には、門の名聞え侍めり。陽明門も、近衛にあたれたれば、この例によりてつかせ給えり。郁芳門、待賢門などは、大炊の御門、中の御門に御所をはしまさねど、なぞらへてつかせ給えるとぞ聞え侍る。待賢門院の院号の定め侍りけるに、「なぞらへてつかせ給ならば、などさしこゑて郁芳門とは、つけたてまつりけるにか」など聞えければ、顕隆の中納言といひし人の、「この御料に残し置かれけるにこそ侍めれ」とさく、れけるとかや。さてぞつかせ給にけるとなむ。御門の御前などにては、土御門、近衛などは申さで、「上東門の大路よりはいづかた、陽明門の大路よりはそなた」などぞ奏なる。されば、一条、二条など申にも同じ心

一 は一和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。

二 きくの宴一和本、国本なし。目録に拠り補ふ。

三 贈皇太后宮嬪子一和本、国本「贈皇太后嬪子」。蓬本に拠り補ふ。

四 申しゝ国本「申し」

五 能因法師一和本、国本「能圓法師」。蓬本に拠り改む。

なるべし。この上東門院は、御年<sup>とし</sup>は八十七までをはしましき。

## きく の 宴

この次の帝<sup>みかど</sup>は、後冷泉院と申き。後朱雀院の第一の皇子、御母<sup>おはは</sup>内侍かみ、贈皇太后宮嬪子と聞<sup>きこ</sup>えき。入道<sup>いんどう</sup>太政大臣の第六の御女<sup>みづめ</sup>なり。上東門院の同御はらからにをはします。この帝<sup>みかど</sup>、万寿二年乙丑歳八月三日生れさせ給えり。長暦元年七月二日御元服<sup>おほむ</sup>。やがて三品の御位<sup>くわい</sup>たまはらせ給。八月十七日東宮に立<sup>た</sup>せ給き。寛徳二年正月十六日位に即<sup>つ</sup>かせ給。御年<sup>とし</sup>廿一にぞをはしましし。

永承元年弥生<sup>やよひ</sup>の頃、いつきたちをのゝ定めさせ給。七月十日中宮立<sup>なかつう</sup>せ給き。東宮の御時より、御息所<sup>みやすどころ</sup>にてをはしましゝ、後一条院の姫宮<sup>ひめみや</sup>なり。神無月も過ぎて、帝<sup>みかど</sup>今年<sup>ことし</sup>ぞ豊<sup>とよ</sup>の御禊<sup>みそぎ</sup>させ給。正月十六日御忌<sup>いみ</sup>の月とて、踏歌<sup>たうか</sup>の節会もなし。十月に関白殿の御をととの右<sup>みぎ</sup>の大臣<sup>おとぎ</sup>、女御<sup>みむすめ</sup>たてまつり給。大二条殿と申<sup>まう</sup>しゝ御ことなり。

同四年十一月に、殿上の調合せさせ給き、村上<sup>むらかみ</sup>の御時、花山院などの後<sup>あと</sup>、めづらしく侍に、いとやさしくをはしましゝにこそ。能因法師<sup>よへい</sup>の「いはねの松も君が

## 一の「国本」之

ため」と一番の哥に詠みて侍る、この道の好き物、時にあひて侍き、「龍田の川の錦なりけり」といふ哥も、この度詠みて侍ぞかし。四年師走、関白殿（頼通）の御女、女御に参り給。これ四条宮と申、御事也。六年二月十日后に立ち給えり。皇后宮と申き。元の後（もとご）は、皇太后宮にあがり給き。

五月の五日、殿上のあやめの根合（ねあはせ）とさせ給き。その哥ども哥合の中に侍らむ。后の宮里（みやうり）にをはしましける時、良暹法師、「もみぢ葉のこがれて見ゆる御舟かな」といふ連哥、殿上人のえつけざりけるをも、帝の御恥（みぢ）におほしめしけるなど、いと情多くをはしましけるにこそ、九月九日、菊の宴（えん）させ給て、「菊開けて水の岸かうばし」といふ題、作らせ給けるとぞ聞（きこ）侍し。七年神無月の比、釣殿（つりど）にておほみ遊あり。文作らせ給けりとぞ聞（きこ）侍し。か様のおほみ遊常の事なるべし。10

## 金のみのり

## 二「和本」して。国本、蓬本に拠り改む。

いづれの年にか侍けむ、九月十三夜、高陽院の内裏（ないり）にをはしましけるに、滝の水音涼（みづおとすず）しくて、岩間（いはま）の水に月やどして、御覽（みかん）せさせ給て読せ給ける、岩間より流るゝ水ははやけれどもつれる月のかげぞのどけき

とぞ聞え侍りし。

一 せらる—国本「せちな」  
治暦元年九月廿五日、高陽院にて黄金の文字の御経、帝御手づから書ゝせ給て、御八講行はせ給き。村上の御代の水茎のあとを、流れ汲ませ給なるべし。はじめの御導師は、勝範座主の、まだ僧都など聞えし折ぞせらると聞え侍りし。一の問

とかいひて、論議の事のよしなども、かの村上の御時のをぞ、塵ばかり引きかへ

たるやうなかりけるとぞ、聴聞しける人伝えかたり侍りし。五巻の日は、宮々、

二 からふね—和本、国本「かてつね」。蓬本に擬り改む。

上達部、殿上人、みな捧げ物奉りて、龍鳥の唐船池に浮めて、水の上にこゑく調べあひて、仏の御国うつし給へり。紅葉の錦水のあや、所も折もかなへる御法

時の庭なるべし。

三年十月十五日には、宇治の平等院に行幸ありて、太政大臣二三年かれにのみ

をはしましゝかば、わざと行幸侍て、見たてまつらせ給とぞうけ給りし。宇治橋

のはるかなるに、船より衆人参りむかひて、宇治川に船浮べて、漕ぎのぼり侍り

ける程、唐国もかくやとぞ見けると、人は語り侍りし。御堂の有様、川の上に錦

の飯屋造りて、池の上にも、唐船に笛の音さまゝ調べて、御前の物などは、金

三 たまども—国本「たまじん」

銀いろいろの玉どもなむ、つらぬき飾られたりける。十六日かへらせ給べきに、

雨にとゞまらせ給て、十七日文など作らせ給。その度の帝の御製とてうけ給はりし、

一 させー和本、国本「させ」。蓮本に拠り改む。

二 かんだちめのわかぎみたち、をのくまひ給きー和本、国本なし。蓮本に拠り補ふ。

三 内大臣「和本」内左臣。国本、蓮本に拠り改む。

#### 四 孔雀明王「国本」「孔雀明王」

たちまちに鳥瑟の三明のかけをみて、しばらく鸞輿の一日のあとをとゞむとかや作らせ給へること、ほのかにおぼえ侍。折にあひて、おほし寄せ給けむほど、いとめでたき事と、知りたる人申ける。その度ぞ、准三宮の宣旨は宇治殿かうぶらせ給けると、聞えさせ給し。

その頃にてや侍りけむ。内裏にて童舞御覽せさせ給き。上達部の若君たち、をのく舞ひ給き。衆人殿上人、さまぐの吹き物、弾き物などせさせ給。その中に、六条の右の大臣の中納言と聞え給し折、その若君、胡飲酒舞ひ給。御前に召して、御衣賜ふに、祖父の内大臣とてをはせし、座を立ちて拝し給けるは、土御門のおとゞとぞ聞え給し。舞ひ給しは、太上の大臣とや申けむ。かくて師走の十二日、廿二社にみてぐら立てさせ給き。帝の御なやみの事とて。

次の年正月の朔日の日は、日蝕なりしかば、廃朝とて御簾もをろし、世のまつりごととも侍らざりき。前の太政大臣も御病ひとて、如月の頃、皇后宮も里に出でさせ給。内には孔雀明王の法行はせ給て、大御室とてをはしまし、仁和寺の宮、御弟子僧綱になり、我御身も牛車などかうぶり給き。帝御心地をこたらせ給ふなるべし。四月には、金銀綾錦などのみてぐら、神々の社に奉らせ給き。

かゝる程なれど、左の大臣の御女の女御、皇后宮に立ち給き。父大臣も関白になり給き。内にも、御なやみをこたらせ給はず。太政大臣もよろづのがれ給て、



一のー和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。  
二給へれどー国本「給つれど」

譲り申給なるべし。(後冷泉)御門世を保たせ給ふ事、廿三年なりき、御年四十に四年ばかり、あまらせ給へりけるなるべし。男にても、女にても、みこのをはしまさぬぞくちをし。御母内侍の督、御年十九にて、この御門うみたてまつり給て、かくれさせ給にき。寛徳二年八月十一日、皇后宮贈りたてまつられき。国忌にてその日はよろづのまつりごととも侍らず。昔は后に立ち給はで失せさせ給へれど、帝の御母なれば、後にはやむごときなき御名とまり給えり。

5

## つかさめし

この次の御門は、後三条院にぞをはしまし。まだみこにはしまし、時、父の帝後朱雀院、さきの年の冬よりわづらはせ給て、睦月の十日あまりの頃、位去らせ給て、(後冷泉)みこの宮に譲り申させ給事ばかりにて、東宮立たせ給事は、ともかくも聞えざりけるを、能信と聞え給し大納言は、宇治殿などの御をとうとの高松の御腹におはせしが、御前に参りて、(後三条)「二の宮をば、いづれの僧にかつたてまつり侍べき」と聞え給けるに、「坊にこそは立てめ。僧にはいかゞつけむ。(頼通)」  
『東宮の事はしづかに』といへば、後にこそは」と仰せられけるを、「今日立た

10

一  
に―國本なし。

せ給はずは、かなふまじきことに侍り」と申給ければ、「さは今日」とてなむ、東宮には立ゝせ給ける。やがて大夫には、その能信の大納言なり給き。君の御ため、たはみなくすゝめたてまつり給えりけむ、いとありがたし。されば白川の院は、まことにや、「大夫殿」とぞ仰せられるけるとぞ、人は申侍りし。二ノ宮とは、後三条の院の御事なり。この帝、後朱雀院の第二の王子にをはします。御母太皇太后宮禎子の内親王と申す。陽明門院この御事也。

帝、寛徳二年正月十六日、東宮に立ゝせ給。御年十二。治暦四年四月十九日、位に即かせ給。御年三十五。大極殿もいまだ造られねば、太政官の庁にてぞ御即位侍りける。世を治めさせ給事、昔かしこき御世にも恥ぢずをはしましき。御身の才は、やむごとなき博士にもまさらせ給へりけり。東宮にをはしましける時、中納言匡房まだ下臈に侍けるに、世を恨みて、「山の中に入りて、世にもまじら

10

二  
み―國本「身」

じ」など申ければ、経任と聞えし中納言の、「われはやむごとなかるべき人也。しかあらば、世のため身のため、くちをしかるべし」と諫めければ、宇治の太政大臣心得ずおもほしたりけれど、東宮に参り給ければ、宮も喜ばせ給て、やがて殿上して、人の装など借りてぞ、簡にもつきける。さて夜昼、文の道の御友になむ侍ける。位に即かせ給初に、つかさもなくて、五位の藏人になりたりければ、藏人の式部大夫とてなむ。空きたるに従ひて、中務の少輔にぞなり侍ける。

15

三  
せふ―和本「ふ」。國本、蓬本に拠り補ふ。

一 させー和本、国本「さ」を。蓬本に拠り改む。

二 とー和本、国本「に」。蓬本に拠り改む。

三 つかせ給てー和本「つかせて給」。国本、蓬本に拠り改む。

四 なくー国本「なき」

大式実政は、東宮の御時の学士にて侍しを、時なくをはしませば、かまえてま  
いりよらぬ事にならむと思けるに、さすがいたはしくて、甲斐守に侍ければ、か  
の国よりのほりて参るまじき心構えしけるに、くだりける餞せさせ給とて、

州の民縦ひ甘堂の詠をなすとも、忘るゝ事莫れ多くの年の風月の遊

と作らせ給へりけるになむ、え忘れまいらせざりける。甘棠の詠とは、唐国に、  
国の司なりける人の宿れりける所に、山梨の木の生いたりけるを、その人の宮こ  
へ返のぼりて後、まつりごとうるはしく、しのばしかりければ、「この梨の木伐  
ることなかれ。かの人の宿れりし所なり」といふ歌をうたひけるになむ。

さてみこ位に即かせ給て後に、「左中弁に加へさせ給へ」と申ければ、「露許  
もことはりなくもおぼすまじきに、いかでかゝることは申ぞ。正左中弁にはじめ

てならむ事、あるまじき」よし仰せられければ、蔵人頭にて中納言資仲侍ける、  
重ねて申けるは、「実政申ことなむ侍。木津の渡のことを、一日にても思知り侍  
らむ」と奏しければ、その折覧しゝづめさせ給て、はからはせ給御けしきなりけ  
る。昔実政は、春宮の春日の使にまかりくだりけり。隆方は弁にてまかりけるに、  
実政まづ船など設けて、渡らむとしけるを、隆方をし妨げて、「待ちさいはひす  
る物、何ゝ急ぐぞ」など、ないがしろに申侍ければ、からく思て、かくなむと申  
たりけるを、おもほし出して、この事ばかり天照御神に申うけむとて、左中弁に

一 は「国本なし」。

二 なき「和本」なく。国本、蓬本に拠り改む。

三 に「和本、国本」き。蓬本に拠り改む。

一 は加へさせ給てけり。

隆方<sup>たかた</sup>は、かりなき心<sup>二</sup>ばへにて、殿上<sup>つかさ</sup>に司召<sup>つかさ</sup>のふみ出<sup>い</sup>されたりけるを、上達部<sup>かみだちべ</sup>たち、かつぐ見給<sup>みたま</sup>ひて、「何<sup>なに</sup>なり<sup>三</sup>にけり。かれになりたり」などのたまはせけるを、「隆方<sup>たかた</sup>つかうまつりて侍らむ」など、得たりがほにいひけるを、「さもあらず物のかみに加<sup>く</sup>りたるぞ」など、人く侍ければ、うちしめりて出<sup>い</sup>でにけり。次の朝<sup>あした</sup>の陪膳<sup>はいぜん</sup>は、隆方<sup>たかた</sup>が番にて侍けるを、「よも参らじ。異人<sup>こと</sup>をもよをせ」と仰<sup>おほ</sup>せられける程<sup>ほど</sup>に、午の時よりさきに、隆方<sup>たかた</sup>参り侍りければ、御門<sup>ごもん</sup>さすがにおもほしめして、日頃<sup>ひごろ</sup>は御ゆする召<sup>め</sup>して、うるはしく御餐<sup>ごはん</sup>かゝせ給て、たしかにつかせ給御心に、今日<sup>けふ</sup>は待ちけれど、程過<sup>ほど</sup>ぎて出<sup>い</sup>でさせ給えりけるに、陪膳<sup>はいぜん</sup>つかまつりて、弁も辞し申て、籠<sup>こも</sup>り侍にけりとなむ。

四 も「国本」ん。  
五 すくよかに「和本、国本」すくよりに。  
蓬本に拠り改む。

代<sup>かた</sup>のひじめつ方<sup>かた</sup>のことにや侍りけむ。内裏<sup>うち</sup>焼亡<sup>やうむつ</sup>の侍けるに、殿上人<sup>かみだち</sup>、上達部<sup>かみだちべ</sup>なども侍<sup>四</sup>ひあはぬ程にて、南殿<sup>なんだん</sup>に出<sup>い</sup>でさせ給へりけるに、御覧<sup>みらん</sup>じも知らぬ物<sup>五</sup>の、すくよかに走りめぐりて、内侍所<sup>うちせしよ</sup>出<sup>い</sup>したてまつり、右近<sup>みぎきん</sup>の陣<sup>み</sup>に御興<sup>みこし</sup>尋<sup>もと</sup>ね出<sup>い</sup>して、御階<sup>みか</sup>に寄<sup>よ</sup>せて、載<sup>の</sup>せまいらせなどしければ、「をのれは誰<sup>たれ</sup>ぞ」と問<sup>と</sup>はせ給けるに、

「左小弁<sup>ささへん</sup>正家<sup>せいけ</sup>」と申ければ、「弁官<sup>へんくわん</sup>ならば、近く侍<sup>きよ</sup>へ」と仰<sup>おほ</sup>せられける。正家<sup>せいけ</sup>、匡房<sup>きやうぼう</sup>とて、時にすぐれたる一つがひの博士<sup>はかせ</sup>なるに、匡房<sup>きやうぼう</sup>は、朝夕<sup>あさゆふ</sup>侍<sup>きよ</sup>ひけり。これは御覧<sup>みらん</sup>じも知られまいらせざりけるにこそ。つかさをさへ具<sup>ぐ</sup>して、名対面<sup>なたいめん</sup>申けむ、

— などなる「和本」なる。国本」などなる  
も」。蓬本「などなる」に拠り補ふ。

折節につけて、いとかどある心ばへなるべし。さてぞ、これかれの殿上人、上達  
部、束帯なるも、直衣、狩衣などなる人ども、とりもあへずさまぐに、参りあ  
つまりけるとなむ聞え侍りし。

一 すべらぎの中第二―和本、国本なし。目録に拠り補ふ。

二 も―国本「ん」

## すべらぎの中 第二

たむけ 又宮はしらとも

(後三卷)  
この御門世をしらせ給て後、世中みな治まりて、今にいたるまでそのなごりになむ侍ける。たけき御心もをはししながら、又情多くぞをはししける。石清水の放生会に、かみ、宰将、諸衛のすけなど立てさせ給事も、この御時よりはじまり、仏の道もさまぐそれよりぞまことしき道は、おこりける事多く侍なる。円宗寺の二会の講師置かせ給て、山、三井寺の才高き僧など、位高くのほり、深き道もひろまり侍なり。

又日吉の行幸はじめてせさせ給て、法花經を重く崇めさせ給。かの道ひろまる所を、重くせさせ給こそは、まことに御法をもてなさせ給には侍なれ。日吉の明神は、法花經を守り給神にをはす。深き御法をまぶり給神にをはすれば、動きなく守り給はむがために、世の中人をもひろく恵み、しるしをもきはだかに施し給

一 物みぐるまー国本「ものみぐるま」

二 侍しー国本「侍りし」  
三 にー和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。

四 事ー国本「こと」

五 又たかき聲のうへにて、よのこともおぼつかなく、ふかきみやのうちは、世をおさめさせ給もわづらひおほくて、いますこしおりゐのみかどって、御心のまゝにとやおぼしめしけんー和本なし。蓬本に拠り補ふ。

六 をはしますー和本「をります」。国本、蓬本に拠り改む。

なるべし。石清水の行幸はじめてせさせ給けるに、物見車の外金物打ちたるを、御興とゞめさせ給て、抜かせさせ給へける。その中に御乳母子の車より、「いかでか我君のみゆきに、この車ばかりは許され侍らざらむ」と聞えければ、その由をや奏しけむ、それは抜かれざりけるとかや。賀茂のみゆきには、金物抜きたるあとある車どもぞ、立ちならびて侍ける。

大極殿、さきの帝の御時、火の事侍し後、十年に過ぐるまで侍しに、位に即かせ給て、いつしか造りはじめさせ給て、四年といふに、造り建てさせ給にしかば、わたらせ給て、慶びの詩など作られ侍りけり。よろづの事、昔にも恥ぢず行はせ給て、山の嵐、枝も鳴らさぬ世なれば、雲井にて千世も過させ給べかりしを、世中さだまりて、心やすくやをもほしめしけむ、又高き雲の上にて、世の事もおぼつかなく、深き宮の中は、世を治めさせ給もわづらひ多くて、今少しおりゐの帝ゝて、御心のまゝにとやおぼしめしけん、位にをはします事四年ありて、白川の帝の東宮にをはしましゝに、位譲り申させ給き。

御母女院、御女の一品の宮など具したてまつらせ給て、住吉にまうでさせ給て、

住吉の神はうれしと思らむなしき船をさしてきたれば  
と詠ませ給える、帝の御哥とおぼえて、いとゞをもしろくも聞え侍御製なるべし。

一 ども一國本「どん」

二 おもほしめし一國本「おもほしめし」

をりぬの帝にて、久しくもをはしまさば、いかばかりめでたくも侍べかりしに、次の年かくれさせ給にし。世のくちをしきとは申せども、位の御時よろづしたゝめをかせ給て、東宮に位譲り申させ給て、かくれさせ給ぬれば、今はかくてと、おもほしめしけるなるべし。

ある人の夢に、異國のそこなはれたるを直さむとて、この國をば去らせ給へる  
と見たることも侍けり。又嵯峨に世をのがれて籠りあたる人の夢に、樂の声空に  
聞えて、紫の雲のたなびきたりけるを、何事ぞと尋ねければ、院の仏の御國へ生  
れさせ給と見たりけるに、院かくれさせ給ぬと、世の中聞えけるにぞ、まさしき  
夢とたのみ侍りけるとなむ。

## みのりのし

三 しろしめせりけり一國本「しろしめとり  
けり」

昔みこの宮にをはしましゝ時より、法の道をも深くしろしめせりけり。勝範座  
主といふ人参り給えりけるに、「真言、止観かね学びたらむ僧の、俗の書も心得  
たらむ一人奉れ。さるべき僧の、おのづからたのみたるがなきに」と仰せられけ  
れば、頭蜜かねたるは、常の事にてあまた侍り。唐の書の心知りたる物こそあり



一 かけ侍らず―国本「えかけ侍らず」

二 おだやかに―国本「をだやかに」

がたく侍つれ。さるにても、尋ねて申侍らむ」とて、返りのぼりて、葉智といふ僧をこそ、奉られけるに、わざと取りつくろゐて、車などをも貸されざりけるにや、狩袴に馬に乗りたる僧の、「座主の房より」とて、参りたりければ、召しよせて、御簾ごしに対面せさせ給えりけるに、蒔絵したる硯の箱の蓋に、止観の一卷を置きて、さし出させ給て、読ませて問はせ給ければ、あきらかに説き聞かせまいらせけり。真言の事は、書はなくてたゞ問はせ給ければ、事の有様、又申のべなどしけり。その後、俗の書の事仰せられければ、法文にあはせつゝ、それもあへしらひ申けり。末つ方に、「極楽に兜率といづれをか願ふ」とのたまはせければ、「いづれをものぞみかけ侍らず。たゞ日毎に法花經一部、両界など行ひ侍を、をこたらで弥勒の世までしはべらばやと思給えて、大鬼王の命長きぞと、行ひこの定にしつゝ侍らむとぞ願ひ侍」と申ける。須弥山のほとりに、しかある鬼の行ひなどするあり、と見ゆる経の侍るとぞ、後に誰とか申され侍ける。鬼は化生の物なれば、生れて程なく行ひなどしづかにて、おこたるまじき心に申けるとぞ。

さて又仰られけるは、「御祈など、ゝりわきてせむこともかなひがたければ、さしたる事も仰られつけず、たゞ心にかけて、行いのついでに祈りて、おだやかに保たむ事を、心にかくべき也」とぞの給はせける。位に即かせ給て、尋ねさせ

一 法師をぞ僧綱になさせ給ける―和本、国本なし。長本に抛り補ふ。

二 をはしましける―和本「をしましける」。国本、蓬本に抛り補ふ。

三 も―国本「を」

四 に―和本「も」。国本、蓬本に抛り改む。

給ければ、葉智はみまかりにけり。弟子なりける法師をぞ僧綱になさせ給ける。おほうへの法橋とかいひけるとなむ。

東宮にをはしましける時、世のへだて多くをはしましければ、危くおもほしめしけるに、檢非違使の別当にて、経成といひし人、直衣に柏夾して、白羽の胡縵負ひて参て、中門の廊にゐたりける日は、いかなる事の出来ぬぞと、宮の中、女房よりはじめて、かくれ騒ぎけるとかや。をはします所、二条東洞院なりければ、そのわたりも、いくさのうち廻りて、つゝみたりければ、「かゝる事こそ侍れ」など申あへりける程に、別当の参りたりければ、東宮も御直衣奉りなどして、御用意ありけるに、別当の檢非違使召て、「犯しの物は召とりたりや」と問はれければ、「すでに召して侍り」といひければこそ、ともかくも申さでまかり出でられにけれ。重くあやまちたる物の、をはします近きあたりに籠りたりければ、うちつゝみたりけるに、若東宮に逃げ入る事やあるとて、参たりけるなりけり。か様にのみあやぶませ給て、東宮をも捨てられやせさせ給はむずらむとおもほしけるに、殿上人にて、衛門権佐行親と聞えし、人の相よくするおぼえありて、いかにも天の下しろしめすべきよし申けるかひありて、かくならびなくぞをはしましける。

この御門の御母陽明門院と申は、三条院の御女なり。後朱雀院、東宮の御時よ

一 ども—国本「どん」

二 もみぢのみかり—和本、国本なし。目錄に拠り補ふ。

り御息所みやすどころにをはしまして、この帝みかどをば、廿二にてうみたてまつらせ給へり。長元十年二月三日皇后宮に立ち給。御年とし卅五（原本卅四）。その時、江侍えさむらい従立たせ給へしと聞きて、紫の雲のよそなる身みなれどもたつと聞きくこそうれしかりけれとなむ詠よめりける。寛徳二年七月廿一日、御髪ごぐみおろさせ給。治暦二年二月陽明門の院いんと聞きえさせ給。御哥みかなどこそ、いとやさしく見え侍めれ。後朱雀院たてまつに奉らせ給、

今はたゞ雲井いまいの月をながめつゝめぐりあふべき程ほども知られずなど詠よませ給える。昔に恥はぢぬ御哥みかにこそ侍めれ。こ女院の御母、皇太后宮妍子みづなと申は、御堂みだうの入道殿（通称）、第二の御女みづめなり。

## 二 もみぢのみかり

白河院は、後三条院の一の御子にをはしましき。その御母は、贈皇后宮茂子（原本勢子）と申。権大納言能信よしのぶと申、御女とて、後三条院の春宮にをはしまし、御息所に参まゐり給たまひき。まことには閑院の左兵衛督公成きんすけと申、中納言（原本御母）の女むすめなり。この中納言の御いもうとは、能信よしのぶの大納言の北の方なり。この御門、天喜元年あづのとし癸みづのとしの巳みの年六月廿

一 一に―国本なし。

日生れさせ給えり。延久元年四月廿八日東宮に立たせ給。御年十七。同四年十二月八日に位に即かせ給。御年廿にやをはしましけむ。位譲りたてまつらせ給て、次の年の五月に、後三条院かくれさせ給しかば、国のまつり事、廿一の御年よりみづからしらせ給て、位にをはします事十四年なりしに、卅四にて位をりさせ給て後、七十七までおはしましゝかば、五十六年国のまつり事をせさせ給へりき。延喜の御門は、三十三年保たせ給へりしかども、位の御かぎりなり。陽成院は、八十一までをはしましゝかども、院の後久しくて、世をばしらせ給ざりき。

この院は、父の太上天皇世をしらせ給し事、いくばくもをはしまさず。さきの御なごりにて、一の人の我まゝに行ひ給もをはせねば、若くより世をしらせ給て、院の後のちは、堀川院、鳥羽院、讃岐院（崇徳）、御子、孫、ひゝ子、うちつゞき三代の御門の御世、みな法皇の御まつり事也。久しく世をしらせ給、昔も類なき御有様也。  
（節通）後の二条のをとゞこそ、「おりみの御門の門に、車立二つるやうやはある」などのたまはせけれ。  
（節通）それかくれ給て後は、少しも息音立つる人やは侍し。

この御門、坎日に生れさせ給たるとぞ聞へさせ給し。又まことにやありけむ、御乳母の二位も、坎日に参りそめられたりけるとかや。されど、末の栄え給事、この頃までいやまさりにをはずめり。あしき日参られたりとも聞へざりし。今ひとりの御乳母の、知綱のぬし御母にていますがりしは、日野（宣長）三位の女にて、世

三 ノー和本なし。国本に拠り補ふ。

二 など―国本「なんと」  
三 にて―国本「に」  
四 二院―国本「二院」

一 こちたく―国本「こちたくも」

おほえもことのほかに聞へ給しかども、御門の五にをはしまし、年、かの乳母かくれられにしかば、二位のみならびなくおはすめり。宿世かしければ、あしき日もさはりなかるべし。しかあらざらむ人は、いかゞその真似はせむ。従二位親子の草子合とて、人々よき哥とて詠みて侍も、いとやさしくこそ聞へ侍しか。

この御門は御心ばへ、たけくもやさしくもをはしましけるさまは、後三条院に似たてまつらせ給へりけり。これはゆゝしく事づくしきさまにぞ、好ませ給ける。白河の御寺もすぐれておほきに、八面このこしの御塔など建てさせ給。百体の御仏なども、つねの共養をさせ給。百体の御あかしを、一度に程なく供ふる風流をほしめしよりて、前裁のかくれに、物々具隠し置きて、あづかり百人召して、一度に奉らせ給けるに、事を行ひける人、心得で少くかつく松ともしたりけるをも、むつからせ給て、さらに一度にともされなどせられけり。

鳥羽などを広くこめて、さまぐ池山などこちたくせさせ給へり。後三条院は、五壇の御修法行はせ給ても、「国やそこなはれぬらむ」など仰せられ、円宗寺をも、こちたく造らせ給はず。漢の文帝の露台造らむとし給て、「国たへじ」とてとゞめ給ひ、女御には裾もひかせず、御丁のかたびらも、あやなきをせられる御心なるべし。をのゝ時に従ふべきにやあらむ。白河の院、御弓なども上手にてをはしましけるにや、池の鳥を射たりしかば、「故院のむつからせ給し」

一 より一國本なし。

二 せさせ給て一和本、させ給て。國本、蓬本に拠り補ふ。

三 給ひ一國本「給」

四 して一和本「にして」。國本、蓬本に拠り改む。

五 うたびととも一國本「うたびとんも」

六 よき一國本「よに」

七 が一國本「に」

なむど仰せられけるとかや、まだ東宮の若宮など申ける時よりなるべし。

よろづの事道重くせさせ給て、位にても、後拾遺あつめさせ給。院後も、今葉集撰ばせ給へり。いづれにも御制ども多く侍るめり。今葉集といふ名こそ、撰者の撰べるにや、かたぶく人侍るとかや。承保三年十月廿四日、大堰河にみゆきさせ給て、嵯峨野に遊ばせ給ひ、御狩なむどせさせ給ふ。その度の御哥、

大堰河古き流を尋ねきてあらしの山の紅葉をぞ見る

なむ詠ませ給へる、昔の心地して、いとやさしくをはしましき。

承暦二年四月廿八日、殿上の哥合せさせ給ふ。判者六条右の大臣、皇后宮の大<sup>(顯房)</sup>夫と聞へ給ひし時せさせ給き。歌人ども時にあひ、よき歌も多く侍なり。哥よしあしはさる事にて、事ざまのかど、えもいはぬが事には、天徳の歌合、承暦の歌合をこそは、むねとある哥合と、世の未まで思ひて侍るなれ。

又唐國の哥をもてあそばせ給へり。朗詠集に入りたる詩の残りの句を、四韻ながらたづね具せさせ給ふ事もおぼしめしよりて、匡房の中納言なむ集められ侍りける。その中に、「五月の蟬の声は、なにの秋を送る」とかいふ詩の、残りの句をえ尋ね出さるりける程に、ある人これなむとて、奉りたりければ、江師見給へて、「これこそこの残りともおぼえ侍らね」と奏しける。後仁和寺の宮なりける手本の中に、まことの詩、出で来たりけるなむとぞ聞え侍し。又本朝秀句と申

すなる文の後し継<sup>つ</sup>がせ給とて、法性寺の入道をとらに撰<sup>えら</sup>ばせたまつらせ給とて聞<sup>き</sup>へ侍りき。その書の名は、続本朝秀句といひて、三巻、情多く撰<sup>えら</sup>ばせ給へる文も侍るなり。

五十の御賀こそ、めでたく侍りけれ。康和四年三月十八日、堀川の帝、鳥羽に行幸せさせ給て、父<sup>ちち</sup>の法皇の五十の御齡よろこび給なり、舞人<sup>まひ</sup>楽人は、殿上人中少将、さまざま左<sup>ひだり</sup>右<sup>みぎ</sup>の調し給き。童舞三人、胡飲酒、陵王、落<sup>らく</sup>蹲<sup>とん</sup>なむ侍ける。其中に、胡飲酒は、源氏<sup>げんじ</sup>の若君なむ舞ひ給ひし。袖振<sup>そでふ</sup>り給さま、天童くだりたるやうにて、この世の人のしわざとはなく、目もあやになむ侍りける。御衣<sup>ぎえ</sup>かづかり給へるをば、御親の大納言とて、大上大臣殿をせしぞ、取りて拝<sup>はい</sup>し給ける。其若君は、中の院の大將と聞<sup>き</sup>へ給しなるべし。

## つりせぬうらうら

此御時ぞ、昔<sup>むかし</sup>のあとを興<sup>きこ</sup>させ給ことは多く侍りし。人のつかさなむどなさせ給よしありて、たはやすくもなさせ給はざりけり。六条の修理大夫頭季といひし人、世におぼえにてをせしに、敦光<sup>あきみつ</sup>といひし博士の、「など殿<sup>ふみ</sup>は宰相にはならせ給

一 いたら―国本「えたら」

はぬぞ。宰相になる道は七つ侍る。中に三位にをはすめり。又五国治めたる人も、なるとこそは見えはべれ」といひければ、「顕季も、さ思ひて御気色とりたりしかば、『それも物書くうへの事なり』と仰せられしかば、申にいたらでやみにき」とぞいはれ侍りける。又顕隆と聞へし中納言、世には夜の関白など聞えしも、又下臈におはしける時、弁になさむとおほしめすに、「詩作らではいかゞなむ。四韻の文作るものこそ、弁にはなれ」と仰せられければ、驚きて好みなむどせられけるとかや。

ことにあきらかにをはしまして、はかなき事をも、はえくしく感ぜさせ給。

二 なかるべし―和本、国本「なるべし」。蓬本に廻り補ふ。

やすきをも、きびしくなむをはしましてける。いづれの山とか、御祈りの賞行はむとおぼせりけるに、たゞ御布施ばかりもねむごろにおぼしめす本意なかるべし。阿闍梨寄せ置かむことかひあるべきに、さすがさせる事なくて、たはやすかるべしとおぼしわづらはせ給えりけるを、顕隆の中納言、「しかはべらば、たゞこの度ばかり、阿闍梨の宣旨を下させ給て、ながく寄せらるゝ事なくて、侍へかし」と申されければ、「まことにしからずあるべかりけれ。をのれなからましかば、われいかゞせまし」などぞ、かひくしく感ぜさせ給ける。その子の顕頼と聞えし中納言をも、「夢に手を引かれて行くと見たりしもの」など仰せられて、ことのほかにをもほしめせりける人にて、書の函などひきさげなどすることも、下臈



—  
あま—国本「あまの」

など召して持たせさせ給。重くおぼしめせりけるに、五位の藏人にて、除目の目録とか奏せられけるに、御覧じてあらゝかに巻かせ給て、返し給ければ、何事にかと恐れ思ひて罷出て、後其父の中納言参りたりけるにぞ、「大外記師達は、摂津の国の公文もまだ勘へぬものをば、いかで目録に入れてたてまつりたるぞ」など仰せられて、さやうの事も、かくなむをはしましける。

法門などをも、まことしくならはせ給ひけるにこそ。良真座主に、六十巻といひて、法花經の心とける書うけさせ給へりけるに、西の京に籠り給て、比叡の山の大衆の許さゞりければ、さてゐ給へりけるところ、とぶらはせ給けりとなむ。

西院の仏拝ませ給ついでとてぞ、御幸ありける。御法のためも、人のためも、面目ありけりとなむ聞へはべりし。金泥の一切經書させ給へるも、唐土にも類すくなくやと聞へし。その後こそ、この国も、あまた聞へ侍れ。この院のしはじめさせ給へる也。

又生きとし生けるもの、命をすくはせ給て、かくれさせ給までをはしましき。

五月のさ山に、ともしする賤の男もなく、秋の夕暮浦に釣するあま絶へにき。をのづから網など持ちたるあまの苦屋もあれば、取り出してたくなはの残るもなく、煙となりぬ。持たる主はいひしらぬめども見て、罪をかぶる事かずなし。神の御厨などばかりぞ許さりて、形のやうに供へて、その外は、殿上の台盤なども、六

齋にかはる事なかりけり。

位にをはしましゝ時は、中宮の御事歎かせ給て、多くの御堂ども造らせ給き。

院の後は、その御女の郁芳門の院かくれさせ給へりしこそ、かぎりなく歎かせ給て、御髪もをろさせ給しぞかし。四十五六の御年のほどにやをはしけむ。御なきのあまりに、世をばのがれさせ給へりしかども、御受戒なむどは聞へ給はで、仏の道の御名ゝども、をはしまさゞりけるにや。教王房と聞へし山の座主、御祈りの祭文に、御名のこと申されけるにも、「まだつかぬぞ」と仰せられければ、  
「その心を得待てこそは、申侍らめ」とぞ、申されけるとかや。

- 一 ける―和本「ける」。国本、蓬本に拠り改む。
- 二 て侍き―和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。
- 三 つたへき―和本「き」。国本、蓬本に拠り補ふ。

四 御ぞども―国本「御ぞどん」

その後久しく世を治めさせ給し程に、七月七日にはかに御心地そこなはせ給て、御霍乱など聞へし程に、月日も経させ給て、やがてかくれさせ給にしかば、空のけしきも常にもかはりて、雨風おどろくしく、日を重ねて世のなげきもうち添へたる心地して侍き。あさましき心の中にも、すぎぐしかりし人にて、平氏の刑部卿といひし、その折何の守とか申けむ。その歌とて伝へ聞はべりし、

またも来む秋を待つべき七夕の別るゝだにもいかゞ悲しき

とかや。鳥羽院、花菫のをとゞ、少将殿、若き御すがたに、御衣ども染めさせ給て、御忌の程、仏の道の事、とぶらい申させ給ふ。いづれの程に、誰か詠ませ給へりけるとかや、

一 け—国本「き」  
二 に—国本「の」

三 白川の院—和本、国本「白川河の院」。蓬  
本に擬り改む。

四 て—国本なし。

五 かのとのみ—国本「かのとの井」。蓬本「つ  
ちのとのひつじ」

いかにしてけにし秋の白露をはちすの上に玉とみがゝむ  
といふ歌を侍りけるとなむ。こまかにも聞ゝ給はざりき。鳥羽殿は此法皇の造ら  
せ給へれば、さやうにや申さむと、人思へりしかども、白川にも、かたがた御所  
ども侍しかば、白川の院とぞ定めまいらせられはべりける。

この帝の御母、東宮の御息所として失せさせ給へり。延久三年五月十八日、從二  
位贈りたてまつり給ふなど、位に即かせ給ひて、同じ五年五月六日、皇后宮贈り  
たてまつらせ給。国君さゝぎなど置かれて侍。同じ日、能信の大納言殿、太政大  
臣、正一位贈れ給。御息所の御母藤原の社子と聞え給も、おほきひとつの位贈り  
申させ給ふ。これは吉備の中の司知光の主の女の也。

# た ま づ さ

堀川の御門は、白河の法皇の第二のみこにをはしましき。その御母、贈太皇太  
后宮賢子の中宮なり。関白左大臣師実のをとゞの御女、まことには、右大臣源の  
頭房のおとゞの御女なり。この御門は、承暦三年辛の亥二月十日生れさせ給へり。  
応徳三年十一月廿六日位に即かせ給。御年八。

一 などとも「和本、国本」なも。蓬本に拠り補ふ。

この御門、御心ばへあてにやさしくおはしましけり。その中に笛をすぐれて吹かせ給て、朝夕に御遊あれば、滝口の名対面など申すも、調子高うとて、あか月になる折もありけり。その御時、笛吹き給殿上人も、笛の師なども、みな「かの御時給はりたる笛なり」などいひて、末の世まで持ちあはれ侍なる。時元といふ笙の笛吹き、御おぼえにて、夏は御厨子所に氷召して賜い、をのづから氷なき折ありけるには、すゞしき御扇なりとて、給はせなどせさせ給けり。宗輔の太政大臣、近衛のすけにおはしける程など、夜もすがら御笛吹かせ給てぞあかさせ給ける。

二 ひとづも「国本」「ひとくも」  
三 き伊「国本」「記伊」

和哥を類なく好ませ給て、五月の頃、つれづれにをばしめしけるにや、哥詠む男女、詠みかはさせてなむ御覧じける。大納言公実、中納言国信などよりははじめ、俊頼なむといふ人づも、さまぐの薄様に書きてやり給けり。女は周防の内侍、四条の宮の筑前、高倉の一の宮の紀伊、前の斎宮の百合花、皇后宮の肥後、摂津の君などいふ所ぐの女房、我もくと返しあえり。女うらみたる哥詠みて、男のがりやりなどしたる、堀川院のけさうぶみあはせとて、末の世までとゞまりて、よき哥は多く撰集などに入れるべし。二間にてぞ、講じてきこしめしける。

又時の哥よみ十四人に、百首の哥をのく奉らせ給けり。男、女、僧など、哥人みな名あらはれたる人ぐなり。題は匡房中納言を奉りける。この世の人、哥

一 さも一 国本「せも」

二 なども一 和本「とも」。国本に拠り改む。  
蓬本「など」。

詠む中だてにては、それなむせらるなる。尊勝寺造られ侍ける頃、殿上人花まむあてられ侍りけるに、俊頼哥人にておはしけるに、百首哥案ぜむとすれば、五文字には「花まむの」とのみ置かるゝといふと聞かせ給て、ふびむの事かなとて、のぞかせ給けるとぞ聞へ侍し。

またいづれの頃にかありけむ。南殿か、仁寿殿かにて、御覧じつかはしけるに、  
誰にかありけむ、殿上人の参りて、殿上にのぼりてゐたりければ、

雲の上に雲の上人のぼりゐて

と仰せられけるに、俊頼の君、

しもさぶらひに侍へかしな

とつけられたりけるを、詞とぞこほりたりと聞ゆれど、心はさもある事と聞ゆめり。歌の風情ゝたづらに失する事なりとて、連哥はおほかたせられざりけりと聞へ侍りしに、金葉集にぞ、いとしもなき多く集められ侍める。いたづらに出来たるを、惜しまれ侍りけるなるべし。

基俊の君連哥は、「つき草のうつしものとのくつは虫」などしたる、優なり。

又「唐門やこの御門とも叩くかな」なども侍りけり。木工の頭も、高陽院の、大殿姫君と聞え給し時、作りて奉り給たるとかや聞ゆる、和哥詠むべきやう、連哥など侍文には、道信中将の哥、伊勢大輔が、「こはえもいはぬ花の色かな」と

一 にてぞ一國本「きてぞ」

二 侍る一國本「侍」

三 御とき一和本、國本「御」。蓬本に拠り補ふ。

四 させ一國本なし。

五 ころ一和本、國本「ころ」。蓬本に拠り改む。

六 宰相一和本、國本空白。蓬本に拠り補ふ。  
七 季仲一和本、國本空白。蓬本に拠り補ふ。

つけたる事など、いと優なる事にこそ侍なれば、連哥をも、うけぬ事、ひとへにし給ふとも聞えず。おほかたは、見るもの聞く事につけてなむ、詠みまうけれ侍りける。当座に詠む事はすくなき、擬作とかにてぞ侍りける。さて侍にや、家の集には、聞くと聞ゝ給へりける事とおぼゆる事、詠み集められ侍り。これは連哥のついでに、うけ給はりし事を申侍るになむ。

さてこの御時に、宮す所は、これかれ定められ侍りけれども、御をばの前きさきの齋院さいえんぞ女御に参り給て、中宮に立ち給し。ことのほかの御齡なれど、をさなくより類なくみとりたてまつらせ給て、たゞ四の宮をとかや、おもほせりけるにや侍りけむ。参らせ給ける夜も、いとあはぬ事にて、御車にも奉らざりければ、あか月あきづき近くなるまでぞ、心もとなく侍りける。鳥羽の御門の御母の女御殿（女御）も参り給て、院もてなしきこへ給へば、はなやかにをはしましゝかども、中宮は尽きせぬ心ざしになむ聞えさせ給し。女御失せさせ給ての頃、

あづさゆみ春の山べのかすみこそ恋しき人のかたまなりけれ  
と詠ませ給けるこそ、あはれに御情多く聞へ侍りしか。

末の世の御門、二十一年まで保たせ給、いとありがたき事なり。時の人をも得させ給へる、まことにさかりなりけり。「一のかみにて、堀河の左の大（左大臣）臣、もの書く宰相にて匡房、通俊、藏人の頭にて季仲ある、昔に恥ぢぬ世なり」などぞ仰

一 ないし和本、国本空白。蓬本に拠り補ふ。

二 応徳元和本、国本空白。蓬本に拠り補ふ。

三 一國本なし。

せられける。みちくの博士も、すぐれたる人多かる世になむ侍りし。この御門、三十にだに満たせ給はぬ、世の惜しみたてまつる事、かぎりなかるべし。その御有様、ないしのすけ讃岐とか聞え給し、こまかに書かれたる文侍りとかや。人の読まれしを、ひとかへりは聞侍りし。この中にも、御覽じてやおはしますらむ。

### 所々の御寺

この御門の御母、権中納言高としの女の腹に、六条の右の大臣の女にをはしましを、大殿、御子にしたてまつりて、延久三年三月九日、御年十五にて、白河院東宮にをはしまし、御息所に参らせ給へりき。同じき五年七月廿三日、女御と聞へ給て、四位の御位給はり給。承保元年六月廿日后に立ち給。御年十八にをはしましき。十二月廿六日、前坊うみたてまつり給。三年四月五日、郁芳門院むまれさせ給て、その後二条の宮うみたてまつらせ給へり。御年廿三にて、この御門はうみたてまつり給へり。応徳元年九月廿三日、三条内裏にてかくれさせ給き。御年廿八とぞ聞え給ひし。村上の御母梨壺にて失せ給て後、内にて后かくれ給う事、これぞをはしける、廿四日に、備後の守経成のぬしの四条高蔵の家にいだし

一 御をばえー和本、国本「御をばち」。蓬本に拠り改む。

二 ござー和本、国本「うざ」。蓬本「御さ」に拠り改む。

三 まさふさー和本、国本「まさの」。蓬本に拠り改む。

四 ふかきー国本「ふるき」

五 させ給きー和本、国本「給き」。蓬本に拠り補ふ。

六 給ふー和本「ふ」。国本なし。蓬本に拠り補ふ。

七 むねー和本、国本「ね」。蓬本に拠り補ふ。

八 あるべきー和本、国本「あかつき」。蓬本に拠り改む。

九 寛治元年ー和本、国本「寛徳元年」。蓬本に拠り改む。

一〇 皇太后宮ー国本「皇太后宮」

たてまつりて、神無月の一<sup>いち</sup>日ぞ、鳥辺野<sup>とりべの</sup>に送りたてまつりて、煙<sup>けむり</sup>とのほり給にし。悲<sup>かな</sup>しさたとうべき方<sup>かた</sup>なし。まだ三十にだにならせ給はぬに、多<sup>おほ</sup>くのみにこたうちみ置<sup>き</sup>きたてまつり給ひて、上<sup>うへ</sup>の御<sup>み</sup>をばえ類<sup>るい</sup>もをはしまさぬに、はかなくかくれさせ給ひぬれば、世中かきくらしたるやうなり。

白川の御門、位の御時なれば、廃朝<sup>はいしやう</sup>とて、三日は日<sup>ひ</sup>の御座<sup>みざ</sup>の御簾<sup>みす</sup>もをろされ、世<sup>よ</sup>のまつりごともし。歎<sup>なげ</sup>かせ給ふこと、唐国<sup>からくに</sup>の李夫人、楊貴妃なむどの類<sup>るい</sup>になむ聞<sup>き</sup>え侍りし。御なげきのあまりにて、多<sup>おほ</sup>く御堂御仏をぞ造<sup>つく</sup>りて、とぶらひたてまつらせ給へりし。比叡<sup>ひゑ</sup>の薨<sup>ふし</sup>に、円徳院と聞<sup>きこ</sup>ゆる御堂の御願文に、匡房<sup>きやうぼう</sup>中納言の、「七夕<sup>しちふせ</sup>の深<sup>ふか</sup>き契<sup>ちぎ</sup>によりて、驪山<sup>りしやん</sup>の雲に悵望することなかれ」とこそ書<sup>か</sup>きて侍るなれ。飯室<sup>いひむろ</sup>には、勝樂院とて御堂造<sup>つく</sup>りて、又<sup>また</sup>の年の如月<sup>きさづき</sup>に、供養<sup>くやう</sup>せさせ給き。八月には法勝寺の内に常行堂造<sup>つく</sup>らせ給ひて、仁和寺の入道の宮して供養<sup>くやう</sup>せさせ給ふ。同日<sup>どうじつ</sup>醍醐<sup>だいご</sup>にて、円光院とて供養<sup>くやう</sup>せさせ給へり。九月十五日、白川の御寺にて、御法事<sup>ほふじ</sup>せさせ給ふ。廿二日御正日に、同御寺にて行<sup>こな</sup>はせ給ふ。事<sup>こと</sup>にふれて悲<sup>かな</sup>しきこと、見たてまつる人まで、胸<sup>むね</sup>あかぬ時になむあるべき。朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なの御心地、御垣<sup>みかき</sup>の柳<sup>やなぎ</sup>も、池<sup>いけ</sup>のはちすも、昔<sup>むかし</sup>を恋<sup>こ</sup>ふるつまとぞなり侍りける。寛治元年師走<sup>しゅうさ</sup>の頃<sup>ころ</sup>、皇太后宮贈<sup>きやう</sup>りたてまつり給。いにしへも今<sup>いま</sup>も、かゝる類<sup>るい</sup>なむをはしましける。



## 白 河 花 宴

一 贈皇太后宮一國本「贈皇太后」

二 ゆづりませせ給き一和本、國本「ませせ給き」。蓬本に廻り補ふ。

三 たるに一和本、國本「たまく」。蓬本に廻り改む。

鳥羽院は、堀川の先帝の第一の王子、御母贈皇太后宮以子と申き。実季の大納言の御女なり。此御門、康和五年癸未の年、正月十六日生れさせ給へり。八月十七日、東宮に立させ給ひて、嘉承二年七月十九日、位に即かせ給ふ。天永四年正月一日、御元服させ給き。十六年位にをはしまして、一のみこに譲り申させ給き。白河の法皇のをはしましゝかぎりは、世中の御まゝなりしに、かの院失せ給て後は、ひとへに世をしらせ給て、廿八年ぞをはしましゝ。白川の院をはしましゝ程は、本院、新院とて、一つ院に御かたゝくにて、三条室町殿にぞをはしましゝ。待賢門の院、又女院の御かたとて、三院のかた、いとはなやかにて、若宮、姫宮たち、みな一つにをはしましき。本院、新院、常は一つ御車にて、みゆきさせ給へば、法皇の御車なれど、御雑色に御隨身具せさせ給へりき。

保案五年にや侍けむ、如月に閏月侍し年、白河の花御覽せさせ給ふとて、みゆき侍りしこそ、世に類なき事にて侍しか。法皇も此院も、一つ車に奉りて、御隨身、錦縫ひものをいろゝくにたち重ねたるに、上達部、殿上人、狩衣さまゝに

色をつくして、われもくと言葉も及ばず。久我の大政の大臣も御馬にて、それは直衣にてかうぶりしてつかうまつり給へり。

院御車の後に、待賢門の院ひき続きてをはします。女房のいだし車のうちいで、白金、黄金にしかへされたり。女院の御車のしりには、みな紅の十をばかり重りたるを出されて、紅の打衣、桜萌黄のうはぎ、赤色の唐衣に、白金、黄金をのべて、窠の紋置かれて、地摺の裳にも、かねをのべて、洲浜鶴龜をしたるに、裳の腰も白金をのべて、うはぎは、玉をつらぬきてぞ飾られ侍りける。吉田の斎宮の御母や、乗り給へりけむとぞ聞え侍りし。

又いだし車十両なれば、四十人の女房、おもひくに装ども心をつくされて、今日ばかりは制も破れてぞ侍りける。あるは出でにほひて、紫、紅、萌黄、山吹、蘇芳、廿五重ねたるに、打衣、うはぎ、裳、唐衣、みなかねをのべて、文に置かれはべりけり。あるは柳、桜をまぜ重ねて、上は織物、裏は打物にして、裳の腰は、錦に玉をつらぬきて、「玉にもぬける春の柳か」といふ歌、「柳、桜をこきまぜて」といふ歌の心也。裳は葡萄染を地にて、海賦を結びて、月の宿りたるやうに鏡を下にすかして、「花のかゞみとなる水は」と織られたり。唐衣、打衣は日を出して、「たゞ春の日をまかせたらなむ」といふ歌の心なり。あるは唐衣に錦をして、桜の花おつけて、薄き綿をあさぎに染めて、上にひきて、「野辺の霞はつゝめど

一 いふ一和木、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

二 からぎぬ一 国本「からぎぬに」

三 つゝめども一 国本「つめどん」

一 など一和本「などと」。国本に拠り改む。  
二 ゆらゆらと一和本、国本「ゆうゆうと」。  
蓬本に拠り改む。

三 めぐりて一和本「めぐりて」。国本、蓬  
本に拠り改む。

も」といふ歌の心なり。袴も打袴にて、花をつけたりけり。このこぼれてにほふ  
は、七の宮など申御母の装とぞ聞へ侍し。

御車副の、狩衣袴なども、いろ／＼の文押しなどして、かゝやきあえるに、や  
り縄などいふものも、あしつ緒なむどにやよりあはせたる、いろ／＼まじはれる  
に、御簾の掛け緒などのやうに、かな物房なむど、ゆらくと飾りて、何事も常  
なくかゝやきあえり。摂政殿も御車にて、御隨身などきらめかせ給へりしさま、  
申もをろかなり。法勝寺にわたらせ給ひて、花御覧じめぐりて、白河殿にわたら  
せ給ひて、おほみ遊ありて、上達部の座に、御かはらけたびくすゝめさせ給て、  
をの／＼哥奉られ侍ける。序は花園をとゞぞ書き給ひけるとなむうけ給し。新  
院御制など集に入り侍とかや。女房の歌なむど、さまざまに侍りけりとぞ聞へ侍  
し。

よろず代のためしと見ゆる花の色をうつしとゞめよ白河の水  
なむどぞ、詠まれ侍りけると聞へ侍し。

御寺の花、雪の朝などのやうに、咲きつらなりたる上に、わぎとかねて外のを  
もちらして、庭にしかれたりけるにや。牛の爪もかくれ、車のあとも入る程に、  
花つもりたるに、梢の花も雪さかりに降るやうにぞ侍りけると、伝へうけ給した  
に、思ひやられ侍き。まして見給へりけむ人こそ思やられ侍れ。

一 たる「和本、国本」「たま」「たま」は「たる」の誤と見て改む。蓬本は「たる」なし。  
二 めづらしく「和本、国本」「めづらく」。蓬本に拠り補ふ。

三 をほく「和本、国本」をく。蓬本に拠り補ふ。

四 御心ばへ「和本、国本」「御ばへ」。蓬本に拠り補ふ。

五 せさせ給ひき「和本」「させ給ひき」。国本、蓬本に拠り補ふ。

六 こころ「和本、国本」「ころ」。蓬本に拠り補ふ。

その後、いづれの年にか侍りけむ、雪の御幸せさせ給ひしに、たびく晴れつゝ、今日くと聞へける程に、にはかに侍けるに、西山、船岡の方、御覧じめぐりて、法皇も院も、都の内は一つ御車に奉りて、新院御直衣に紅の打ちたる御衣いださせ給て、御馬に奉りけるこそ、いとめづらしく、絵にもかまほしく侍りけれ。二条の大宮の女房、いだし車に、菊紅葉のいろくなるもいだしたるに、上下に白き衣を重ね、縫ひあはせたれば、ほころびは多く、縫ひ目はすくなくて、厚衣の綿なむどのやうにて、こぼれ出でたるが、菊紅葉の上に、雪の降り置けるやうにて、五車立て続け侍けるこそ、いと見所多く侍けれ。

この帝、御心ばへはいといたく好かせ給ふ事はおはしまさで、御心ばへはうるはしくて、御みめもきよらかに、功德の道導師も、御祈りをのみせさせ給ひき。御笛をえならず吹かせ給て、堀川の院にも劣らずやははしましけむ。楽なむども、うつくしく知らせ給ひ、御笛の音もあいづかはしく、涼しきやうにぞをはしましける。公教、公能など申し大臣殿、伊夷、成親など申中納言など、皆御弟子也とぞ聞へはべりし。例ならぬ御心地、久しくならせ給ひて、世など心細くおぼしめしけるにや、得大寺の左の大臣にや、花折りて賜はすとて、御歌侍ける。

心あらばにはひを添へよ桜花のちの春をばいつか見るべきと詠ませ給ひけり。

## 鳥羽御賀

一 北の陣―国本「北の陣」

二 やがて―和本、国本「やかた」。蓬本に拠り改む。

彼院世<sup>(鳥羽)</sup>をしらせ給ひて、久をはしましゝに、よろづの御まつりごとを御心のまゝなるに、中院<sup>(蓬定)</sup>のをとゞの大将になり給し度、人々争ひて、讃岐<sup>(宗茂)</sup>之院位にをはしましゝが、しぶらせ給しにこそ。近衛<sup>(公兼)</sup>の帝、東宮にて真魚召しける夜、にはかに内へ御幸とて、殿上人少くかぶりして、夜に入りて、北の陣に御車立てさせ給て、「権大納言<sup>(源定)</sup>大将にまかりならむ事、わざと申うけに参りたる」と申入れさせ給へりしかば、さてこそ、やがてその夜なり給ひにけれ。

実能<sup>(善能)</sup>の大将、下臈なれども、もとよりなり給へれば、「かみには加へじ」と抑へ申給ふ。実行<sup>(善行)</sup>の大納言、「われこそ上臈なればならめ」といひて、下臈二人に越えられむ事、内を二人してかたぐし申給へば、御をぢの事さがたくて、抑へさせ給なり。院には、前に越して、下臈をなさせ給しかども、なほいとをしみ出で来て、なさむとおぼしめして、かためたるに、内の抑へさせ給へば、年来はかゝる事もなきに、いと心よからずおぼしめして、みゆきあるなりけり。とかく申させ給ひ、召して仰せくだされなどする程、御車にて、「春の夜明けなむと

す」といふ朗詠、又「十方仏土の中に」などいふ文を詠ぜさせ給て、仏の御名たびく唱へさせ給ける。聞く人、みな涙ぐましくぞ思ひあへりける、となむ聞え侍し。

かくて、次の年御髪をろさせ給き。御年四十にだにまだ満たせ給はねど、又御つゝしみの年にて、年来は御隨身など留めさせ給て、具せさせ給はねど、白川の  
大炊ノ御門殿、向ひに、御堂造らせ給て、供養せさせ給に、兵仗返し給はせ給て、めづらしく太上天皇の御ふるまひなり。うち続き八幡、賀茂なむど御幸ありて、三月十日ぞ、鳥羽殿にて御髪をろさせ給。すこしも御なやみもなくて、かくをぼしめし立つ事を、世の人涙ぐましくて思ひあへる。御名は空覺とぞ聞えさせ給。五十日御仏事とてせさせ給程に、大路にありく犬や、木積みてありく車の牛なむどまで養はせ給。御堂の池どもの魚にも、庭の雀、鳥など飼はせ給。山々寺々僧に湯浴し、御布施なむどはいひ知らず、たゞの折も、かやうの御功德は、常の御いとなみなり。人の奉るもの、多くは僧の布施なむありける。をはしますすあたり、あまたの御所どもには、いひ知らず綾錦、唐綾、唐絹、さまぐのたからもの、所なきまで置き満てられ侍りけるを、御布施にせさせ給へば、来む世の御功德いかばかりか侍けむ。

白川院は、をはします所きらくと掃きのごはせて、たゞうちの見参とて、紙

四 からあや一和本、国本「からや」。蓬本に  
 四 掘り補ふ。  
 五 をきみてられ一和本「をきてめでられ」。  
 国本、蓬本に掘り改む。

一 うちせさせ給て―国本「うちせさせさせ給て」

二 まいりあへりける―和本「まいりあへける。国本に拠り補ふ。

三 もまき―国本「もまき」

四 まひ人―和本、国本「まひ人」。蓬本に拠り改む。

五 なほ―国本「なを」

六 胡飲酒―和本、国本「胡領酒」。蓬本に拠り改む。

屋紙に書きたる文の、日毎に参らするばかりを、御厨子に取り置かせ給て、さらぬものは、御あたりに見ゆるものなかりけり。まして裁縫はぬものなどは、御まへに取りいださるゝ事なくて、かたしはぶきうちせさせ給て、ただ一所をはしまして、近習の上臈下臈など、をりく召し使はせ給つゝぞをはしました。また暁をどろかせ給へば、燈ともしなどしてぞ人は参りあへりける。此院は日だけてをどろかせ給へば、ほのくの御あるき紛はせ給てなむ聞え侍し。

仁平二年三月七日、近衛の帝、鳥羽の院にみゆきせさせ給て、法皇の五十の御賀せさせ給き。等身の御仏、寿命経百卷、玉の形を磨き、黄金の文字になむありける。僧は六十の数ひきつらなりて、仏をほめたてまつり、舞人は近きまものつかさ、雲の上人、青色の腋開に、柳桜の下襲、平胡籙の水精の笥の光にかゝやきあへり。次の日もなほ留まらせ給て、法皇拝みたてまつらせ給ふ。さまぐの供へども、庭はも狭にもちつらねて、奉らせ給。

池の船、春の調とゝのへて、汀に漕ぎ寄せて、各降りて左右舞の袖振るに、青海波は左の大臣の御子、右の大将の孫の中将の君達舞ひ給。果には、左の大将の御子とて、胡飲酒、童舞し給ふ。古きあと、家の事なれば、かづかり給御衣、父のをとゞ取りて、袖振り給て、庭に降りて、よころび申のやうに更に押し給き。夕日のかげに紅の色かゝやきあへり。その若君、まことには御童名くま君とて、

一 もろなか―和本、国本、もろなり。蓬本に拠り改む。

前の中納言師仲の子を、大将殿子にし給へるとぞ。其若君の母は、鳥羽の院のこたち、うみたてまつられたる人とぞ聞ゝたてまつりし。かやうにはなやかに侍し程に、なか二年ばかりや隔て侍りけむ。近衛の帝かくれさせ給ひにしかば、おぼしめし歎きて、鳥羽に籠りゐさせ給て、年のはじめにも、門廊なむどさして、人も参らざりき。御年五十四までぞをはしめしける。

御母は贈皇太后宮は、承德二年十一月に内に参り給て、康和五年正月に此御門うみ置きたてまつり給て、かくれ給にしかば、如月をくりたてまつり給へり。

### はるのしらべ

仁和寺の女院の御腹の一のみこは、位降りさせ給て、新院と聞へさせ給し。後に讃岐におはしましゝかば、讃岐の帝こそは聞へさせ給らめな。御母女院は中宮暲子と申き、公実の大納言の第三の女。鳥羽の院の位におはしましゝ時、法皇の御女とて、参り給へりき。この帝、元永二年己亥五月十八日に生れさせ給へり。

保安四年正月廿八日、位に即かせ給。大治四年御元服させ給。御年十一。

法性寺の太政大臣の御女、女御に参り給て、中宮に立ち給し。皇嘉門の院と申



一 ゆるさりて一和本「ゆるされて」。国本、蓬本に拠り改む。

二 このまゝ国本「この衛」

三 一國本なし。

四 はなのえ一國本「はなの会」

五 ゆるさりて一和本「ゆるされて」。国本、蓬本に拠り改む。

御事なり。時の摂政の御女、后の宮にをはします。白川の院、鳥羽の院、親祖父にておはします。御母女院ならぶ人なくしておはしましゝかば、御せうとの侍従の中納言実隆、左衛門の督通季、衛門の督実行、左兵衛の督実能など申て、帝の御をぢにて、直衣許さりて、常に参り給。その君達近衛のすけにて、朝夕侍ひ給。帝の御心ばへ、絶へたることをつぎ、古きあとを興さむとおぼしめせり。幼くおはしましけるより、歌を好ませ給て、朝夕に侍ふ人く、隠し題詠ませ、紙燭の歌、金篋打ちて、「響きのうちに詠め」などさへ仰せられて、常は和歌の会ぞせさせ給ける。さのみうちくにはたとて、花の宴せさせ給けるに、「松はるかなる齡を契る」といふ題にて、上達部東帯にて、殿よりはじめて、参り給けり。まづおほみ遊ありて、関白殿琴弾き給。花園、おとゝその時右の大臣とて、琵琶弾き給。中院の大納言笙の笛、衛門の佐季兼、にはかに殿上許さりて、篳篥つかうまつり侍けり。拍子の中御門の大納言。笛は成道、実衡なむどの程にやおはしけむ。季成の中將、和琴なむどぞ聞へ侍りし。序は堀川の大納言ぞ書き給ける。講師は左大弁実光、御製のは誰にか侍けむ。常の御歌どもは、朝夕のことなりしに、常は御製など聞へ侍しに、めづらしくありがたき御歌ども、多く聞へ侍き。「遠く山の花をたづぬ」といふ事を、

たづねつる花のあたりにけり匂ふにしるし春の山風

一の「国本」は

など詠よませ給へりしは、世よの末すえありがたくとぞ、人の申侍ける。まだ幼をこなくおはし  
ましゝ時、

こゝをこそ雲の上うへとは思ひつれ高くも月の澄みすのぼるかな

なむど詠ませ給へりしより、かやうの御歌のみぞ多く侍なる。これらをのづから  
傳へ聞へ侍にこそあれ。

天承二年三月にや侍けむ。臨時衆せさせ給き、臨時の祭の試案の様なむ侍けける。清涼殿の御簾をろして、孫廂に御椅子立て、帝御直衣にておはします。北

百首の歌なむど、人ひとに詠よませさせ給たまへり。また撰集などせさせ給たまへと聞きこへ侍さむらひき。かばかり好このませ給たまへに、歌合うたあひせの侍さむらひべらざりけるこそ、くちをしく侍さむらひしか。古ふるき

一 このゑ—國本「この衛」

二 皇大弟—和本、國本「皇大弟」。蓬本に擬り改む。

ことゞも興さむの御こゝろざしはおはししながら、世お御心にえまかせさせ給はで、院(鳥羽)の御まゝなれば、やすき事こともかなはせ給はずなむおはししける。歌詠うたよませ給につけても、朝夕侍はれける修理の權大夫行宗、三位せさせむとて、徳大寺のをとゞにつけて、院に見せまいらせよとて、

我宿やどにひとと立てる翁草あはれといかゞ思はざるべき  
と詠ませ給へりけるとぞ聞へ侍りし。

### やゑのしほぢ

(皇子、太子)もとの女院ふたところも、かたゞ輕からぬさまにをはしますに、今の女院と  
きめかせ給て、近衛(このゑ)の帝うみたてまつらせ給へる、内(崇徳)のみこになしたてまつらせ給。東宮に立てくまつり、位譲りたてまつらせ給。その日辰の時より、上達部(かむだちめ)さまゞのつかさ参集まいりあつまつれるに、内(崇徳)より院(鳥羽)にたびく御使ありて、藏人の中務(師能)の少輔とかいふ人、かへるく参り、又六位の藏人、御書捧げつゝ参る程に、日暮方がたにぞ、神璽宝劔など、東宮の御所昭陽舎へ、上達部ひきつけて渡り給ける。帝の御養やしなひ子こ、例なきことにて、皇大弟とぞ宣命には載せられ侍ける、その沙汰に、

「今日延ぶべし」など、内より申させ給けれど、「事はじまりていかでか」とてなむ、その日侍けるとぞ聞へ侍りし。今の内には、職事、殿上人など抑せくだされ、あるべき事もありて、新院は、九日ぞ三条西の洞院へ渡らせ給。太上天皇の御尊号奉らせ給。

かくて年経させ給程に、近衛の帝かくれさせ給ぬれば、今の(後白河)一院の、今宮とおはします。位に即かせ給にき。さる程に、鳥羽の院御心地重らせ給て、七月二日失せさせ給ぬれば、帝の御代にてさだまりぬるを、院のおはしまし、折より、聞ゆることゝもありて、御垣のうち、きびしく固められけるに、嵯峨の帝の御時、兄の院と争はせ給けるやうなること出で来て、新院御髪おろさせ給て、御をとうとの仁和寺の宮におはしましければ、しばしはさやうに聞へし程に、八重の潮路を分けて、遠くおはしまして、上達部、殿上人ひとり参るもなく、一宮の御母兵衛の佐と聞へ給し、さらぬ女房、ひとりふたりばかりにて、男もなき御旅住みも、いかに心細く朝夕にをぼしめしけむ、親しく召し使ひし人ども、みなうらくに都別れて、おのづからとまれるも、世の恐しさに、あからさまに参ることだになかるべし。皇嘉門の院よりも、仁和寺の宮よりも、しのびたる御とぶらひなどばかりやありけむ、たとふる方なき御すまゐ也。

あさましき鄙のあたりに、九年ばかりおはしまして、憂き世のあまりにや、御

一 おそろしさ「国本」をそろしさ

二 も「和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

病も年に添えて重らせ給ければ、都へ帰らせ給こともなくて、秋八月二十六日に、かの国へ失せさせ給にけりとなむ。白峯の聖といひて、かの国へ流されたる阿闍梨とて、昔ありけるが、この院に生れさせ給へるとぞ、人の夢に見たりける。その墓のかたはらに、よき方当りたりければとてぞおはしますなる。八重の潮路をかき分けて、はる／＼とおはしましけむ、いと悲しく、心地よきだにあはれなるべき道を、人もなくて、いかばかりの御心地させ給けむ。

この帝の御母后十九と申し御年、うみたてまつらせ給て、王子位に即かせ給て後、後の位廿三の御年去らせ給て、待賢門の院と申。同じ国母と申せども、白河の院御女とて、養ひ申させ給たれば、ならびなく栄へさせ給き。まして院号のはじめなどは、いかばかりか、もてなしきこへさせ給し。多くの宮／＼うみたてまつらせ給。今の一院の御母におはしませば、いとやむごとなくおはします。仁和寺に御堂造らせ給。黄金の一切経など書させ給て、康治二年御髪おろさせ給。御名は真如法とつかせ給とぞ。久安元年八月廿二日、かくれさせ給にき。

又の年の正月二日、かの院の女房の中より、高倉の内の大臣の御もとへ、

みな人は今日のみゆきと急ぎつゝ消へにしあとはとふ人もなし

頭仲の伯の女、堀河の君の歌とぞ聞へ侍し。この女院の御母、但馬守隆方の弁の女なり。従二位光子とて、ならびなく世にあひ給へりし人におはす。

一 すべらぎの下第三―和本、国本なし。目錄に廻り補ふ。

# すべらぎの下 第三

をとこやま

鳥羽の帝、位の御時より参り給へりし後は、みこたちあまたうみたてまつりて、位をりさせ給しかば、女院(待賢門院)と申ておはしましき。法皇(白河)の養ひたてまつりて、かしづき給しに、法皇おはしまさで後、宇治(高陽院)の後参り給て、御かたぐいどましげなれども、院(鳥羽)はいづかたにも、うときやうにてのみおはしましに、忍びて参り給へる御方(かた美福門院)おはして、いづこにも離れ給はず。や、朝(あき)まつりごとをこたらせ給さまにて、夜がれさせ給ことなかるべし。

いとやむことなき際にはあらねど、中納言(長吏)にて御親はおはしけるに、母北の方(かた)は、源氏の堀河(ほりかは)のをとゞの御女(むすめ)におはしける上に、類(たぐひ)なくかしづきこへて、たゞ人にはへ許さじと、もてあつかひてなむ。中納言かくれられ侍ける後、院にもとよりやおぼしめしつゝや過(す)しけむ、かの父(ちち)の御忌(いみ)など過ぎけるまゝに、忍びて

一にて一和木、国本にて。蓬本に拠り補ふ。

御消息ありて、隠れつゝ参り給ける程に、日に添へて類なき御こゝろざしにて、ときめき給程に、たゞならぬ事さへをはしければ、御祈りおどろくしきまで、かたぐせさせ給程に、叡子内親王女宮、うみたてまつり給つれば、めづらしきをば喜びながら、男にをはしまさぬおぞ、くちをしくおぼしめしたるに、暁子内親王又うみたてまつり給へるも、同じさまなれば、まめやかにくちをしくおぼしめしたれど、さすがにいかゞはせむにて、おはしますなるべし。

姉の宮をば、宇治の後御子おはしまさぬにあはせて、親の前の太政大臣など、御心とゞむなどにや、かの宮に迎へ申させ給て、養ひ申させ給。後に生れさせ給へるは、院にみづから養ひ申させ給。御母后、しばしはあの御方など申ておはしましゝ程に、三位の位添へさせ給て、この御事をのみ、類なき御もてなしなれば、世の人ならびなく見たてまつるに、又たゞならぬ事おはしませば、この度さへうち続かせ給はむも、くちをしき上に、おぼしめしはからふ事やあらむ、男宮うみたてまつり給べき御祈り、いひ知らず當ませ給。

石清水に般若会などいひて、山、三井寺などの、やむごとなき智慧深き僧ども参りゐて、日頃法門の底をきはめて、行はせ給。師の中納言などいふ人、御うしろみにて、宮この事も大事なれども、かの宮に日頃籠りて、御代りにや、日毎に束帯にて、御講もよをし行はれける。われもくと御法説きて、祈り申ける中に、

忠春とか聞へしが、「鼈海の西にはうみの宮、御産平安たのみあり。鳳城の南には男山、王子誕生うたがひなし」としたりけるとなむ聞ゝ侍し。奈良の済円といひし僧都の、先の日この心をしたりけるに、めでたしなど聞へけるを、山に忠春已講といひしが、後の日、かやうに結びなしていひける。とりくへもいはずなむ聞へ侍ける。果の日は、上達部引き連れて参り給。御布施とり、御神楽などせらる。上達部、歌も笛も、をのく心をつくして、清暑堂の御神楽などのやうなり。

5

一 まかりいで―和本「まかいで」。国本に廻り補ふ。

二 みなみおもて―和本、国本「みのみおもて」。蓬本に廻り改む。

かやういひ知らぬ御祈りどもある程に、保延五年にや侍けむ、己の末の年五月の十八日に、世になくきよらなる、玉の男宮生れさせ給ぬれば、院のうちはさなり、世の中も動くまで喜びあへる様、いはむ方なし。未の時ばかりなれば、御祈りの僧、御前に参りゐたるに、をのく御馬ひき、女房の装など給はす。仁和寺の法親王、山の座主など僧綱給はり、さまぐの賞どもありて、まかり出で給ぬ。御うぶやしなひ、七夜など、閑白よりはじめて参り給て、おほみ遊どもあり。御湯殿南面<sup>二</sup>にしつらひて、弦打五位六位、白襲に立ち並めり。男宮におはしませば、書読式部大輔、左中弁などいふ博士、大外記などいふ物、明経博士とて、つるばみの衣、あけの衣、袖をつらねて、うちかはりつゝ、日毎に読むけしき、いはむ方なくめでたし。皇子の御祈りはじめさせ給。七瀬の御祓に、弁、靱負の佐、

15

10



一 も―国本「母」

二 給―和本、国本「つ」。蓬本に拠り改む。

三 くら人―和本、国本「くらむ」。蓬本に拠り改む。

四 まいらせ給て―和本「まいり給て」。国本、蓬本に拠り改む。

五 ぞ―国本なし。

五位の蔵人などいふ時にあへる七人、御衣ころもほこ宮取りて立つ程ほどなど、おぼろけの上達部かみたちなむども、あふべくもなかりけり。御乳母めのとには、二条（師通）の関白の御子こに、宰将さいざうの中將といひし人の女むすめ、内蔵（清隆）の頭男かみおとこにてあれば、ゑらばれて養やしなひたてまつるなるべし。

日に添そへて、めづらかなるちこの御かたちなるにつけても、いかですがやかに、5  
みこの宮（くらみ）にも、位くらみにもとおぼせども、后腹きさきばらにみこたちあまたおはしますを、さしこゆべきにもあらねば、おぼしめしわづらふ程ほどに、当帝たうだいのみこになしたてまつり給二こと出いで来て、水無月の廿六日、王子内みづなづへ入いらせ給。御供ごともに上達部かみたちめ、殿上人とのうしろゑらびて、常つねのみゆきにも心こころとなり。都みやこのうち、車くるまさりあへず、見るもの所ところもなき程ほどになむ侍はたらける。内うちへ参まゐらせ給に、轎車こしやの宣旨せじなど、蔵人くらみ仰おほせて、すでに参まゐらせ給て、中宮（皇門院）を御母ははにて、まだみこも生うませ給はねば、めづらしく養やしなひ申まさせ給。  
后きさきの親おやにて、関白殿（忠通）をはしませば、王子の祖父おほぢにて、かたぐ帝みかども后きさきも、みこをはしまさぬに、院（鳥羽）も御心ごこころゆかせ給て、いとこゝろよきこと出いで来て、いつしか八月十七日、東宮（師通）に立たせ給。昭陽舎（五）に御しつらひありて渡わたらせ給。大夫には堀河ほりがわの大納言おほののりぞなり給。御母ははのをちにおはしまして、ことに選あばせ給へるなり。御母はは、女御の宣旨せじかうぶらせ給。願ねがひの御まゝなり。男宮おとみのうれしさも、いふばかりなき上うえに、御みめも、御心ごこころはへも、いとうつくしく、この世よの物にもあらず。

さかしくをとなくして、日の御座に事ある毎に、大夫の抱きたてまつり給へるにも、泣きなどもし給はず。いさせ給程なむどには、御褥の上に、ひとりいさせ給て、おとなのやうにをはしませば、かひなく見たてまつる人も、喜びの涙をさへがたかりけり。

かくて同じ七年十二月七日、御年三つにて、位譲り申させ給。近くは五などにてぞ即かせ給へども、心もとなさにや、すがやかにあさせ給ぬ。御母女御殿は、皇后宮に立させ給。御年廿五。御即位、大嘗会など、心ことに世もなびきてなむ見え侍ける。をとにならせ給まゝに、御有様しかるべき前の世の御契りと見へ給へり。摂政殿、御をとうとの左の大臣、女御奉給て、皇后宮に立ち給ぬ。なを足らずやおぼしめすらむ、院より沙汰せさせ給て、大宮の大納言の女、関白殿御子とて、北の政所のせうとの女なれば、御子にしたてまつり給。御かたぐはなぐと、いどみ顔なるべし。

二 あにをとうと一 国本「あにをとうとの

三 ば一 和本、国本なし。蓬本に擬り補ふ。

殿の兄をとうと、御仲よくもおはしませねば、宮もいと隔て多かるに、関白殿は、内のひとつにて、ひとへに中宮のみのぼらせ給て、皇后宮の御方は、うとさきまに妨げ申させ給とぞ聞へ侍りし。かくて年経る程に、御母后院号ありて、女院とておはしませば、院の後の女院三所おはします。内には后ふたり立ち給て、いとかたぐ多くおはします頃なるべし。

## む しのね

一 御目一國本「御め」

二 一に和本、國本なし。蓬本に拠り稍ふ。

(近衛) この帝、御みめも御心ばへも、いとなつかしくおはしましけるに、末になりて、御目を御覧せざりければ、かたぐ御祈りも御業も、しかるべきにや、かひなく、末ざまには、年のはじめの行幸なども、せさせ給はずなりにければ、摂政殿類なく思たてまつらせ給。帝も、をろかならず思かはさせ給て、殿のおとうとにこめられさせ給て、藤氏の長者なども、のかせ給たるなどを、幼き御心に歎かせ給。殿も、帝の例ならぬ御事を歎かせ給程に、十七にやおはしましけむ、初秋の末にも、日頃例ならぬ事おはしまして、かくれさせ給ぬれば、世中は、闇に迷へる心地しあへるなるべし。さりとてあるべきにあらねば、鳥羽の院には次の帝定め申させ給に、まことにや侍けむ、女院の御事のいたはしさにや、姫宮を女帝にやあるべきなどさへ計らはせ給。又仁和寺の若宮をやなど定めさせ給けれど、ことはりなくて一日は過ぎて、世の中をもほしめし倦みにたる御有様なるべし。たゞおはしまさむおだに、おしかるべきを、歌をも幼くおはします程に、すぐれて詠ませ給。法文なども、しかるべき人にやおはしましけむ。御心にしめて、

一 ぞー国本なし。

二 などー国本「などぞ」

三 のー国本なし。

経などをも訓によませて、それにつけても、御歌など廿八品など詠ませ給。同じ歌と申せども、この頃のうちある様にもあらず、昔の上手などのやうにぞ、詠ませ給ける中に、世も心細くやおぼしめしけむ、

虫の音の弱るのみかは過ぐる秋ヲ惜しむ我身ぞまづ消へぬべき  
など詠ませ給へりける。いとあはれに悲しく、又から萩などいふことお隠し題とて、

二 つらからば岸辺の松の浪をいたみねにあらはれて泣かむとぞ思  
など、多く聞ゝ給へしかども、おぼえはべらず。位におはしますこと、十四年なりき。

御業の夜、さねしげといひしが、昔蔵人にて侍けることを、思ひ出でゝ詠める。<sup>10</sup>  
思ひきや虫の音しげき浅茅生に君を見すてゝ帰るべしとは

(忠通) 殿の御子の大僧正と聞へ給、帝の植へさせ給へりける菊を見給て、  
齢をば君に譲らで白菊のひとりをくれて露けかるらむ

と詠まれ侍けるこそ、あはれに聞へ侍しか。備前のごとて侍けるが、帝おはしまさで後、昔思ひ出でけるに、しのばしき事、多くをばえければ、星合の頃、内侍土佐、かの帝の御事の悲しみにたへで、頭をろして、籠りゐ侍けるもとに、いひつかはしける、

一 よめりける—国本「よめける」

一 天の川星合の空はかはらねど馴れし雲の秋ぞ恋しき  
と詠めりけるこそ、いと情多く聞ゝ侍りしか。

この帝の御母、贈左大臣長実の中納言の御女なり。皇后宮得子と聞へ給。美福門の院と申き。この御有様、先にも申侍ぬ。かつは近き世の事なれば、誰も聞かせ給けむ。されども事の続きに申侍になむ。なをあさましくおはしまし、御宿世ぞかし。御親おはせずなりにしかば、いかゞなり給はむずらむと見え給しに、忍びて参りはじめ給て、みこたちうみたてまつり給。女御、后、帝の御母におはしますのみにあらず、行末までの御有様、申もをろかなり。はじめ高陽院の養ひ申させ給しは、叡子の内親王と聞へさせ給し、失せさせ給にき。

二 其の次の姫宮は暲子の内親王、八条の院と申なるべし。院にやがて養ひ申させ給て、朝夕の御慰めなるべし。幼くて、ものなどうつくしく仰せられて、「若宮は東宮になりたり。我は東宮の姉になりたり」など仰せられければ、院は、「さるつかさやはある」など、興じ申させ給けりなどぞ聞え侍りし。この宮保延三年丁の巳の年生れさせ給て、保元三年六月に、御髪をろさせ給。御年廿一とぞ聞へさせ給し。応保元年十二月に、院号聞へさせ給き。二条の帝の御母とて、后にも立ゝせ給はねども、女院と申なるべし。小一条の院、東宮より院と申し、やうなるべし。

三 けり—国本「り」

一 このゑ—国本—の衛—

近衛の帝<sup>このみかど</sup>生れさせ給て後、永治元年霜月にや侍けむ、辛の酉の年また姫宮六条殿にてうみたてまつり給へりし。二条の帝、東宮と聞へさせ給し時、保元ゝ年の頃、宮すどころと聞へ給て、帝位に即かせ給しかば、平治元年二月廿六日、中宮と聞ゑさせ給しに、永暦元年八月十九日、御なやみとて、御髪をろさせ給。御年廿とぞ聞へさせ給し。いと類なく侍き。応保二年二月十三日、院号ありて、高松の院と申。

(天福門院)

その宮の御母、その時国母にておはしまし、程に、近衛の帝かくれさせ給て、歎かせ給し程に、次の年、鳥羽の院失せさせ給し時は、北面に侍ひと侍ふ下臈どもかきたて、院おはしまさゝらむには、たしかに女院に侍へ、とて渡され侍けり。女院は法王の御病のむしろに、御髪をろさせ給へりき。三滝の聖とか聞へしぞ、御戒の師と聞へ侍し。よろづ世におぼしすてたる御有様にやあらむ。と羽(原本傍世)ばなむとおも、よろづ女院の御まゝとのみ、沙汰し置かせ給へれど、後の世の事を、おぼし掟てさせ給上に、心かしこく、何事ものがれさせ給へり。

姫宮たち御母おはしまし、折、みな御髪をろさせ給てしこそ、いとあはれに聞へさせ給しか。昔の仏のやたりの王子、十六の沙弥などの御有様なるべし。中にも当時の后の宮にて、仏の道に入らせ給、世に類なく。この世を強くおぼしめしとりて、わが御身も、姫宮たちも、すゝめなしたてまつりて、つとめさせ給し程

一 わづらはせおはします御ことありて、応保元年十一月廿三日にかくれさせおはしましにき。和本 国本なし。蓬本に拠り補ふ。

二 まいらせける。国本「まいせける」

三 「かの」以下、十一行「おもひきえなば」まで和本 国本なし。「蓬本に拠り補ふ」

四 おほうちわたり。和本、国本なし。目錄に拠り補ふ。

五 とほき。国本「とをき」

に、わづらはせおはします御事ありて、応保元年十一月廿三日にかくれさせおはしましにき。紫の雲たなびきて、ゐながらこそかくれさせ給けれ。かねて高野の山に、忍びて御堂建てさせ給て、それにぞ御舍利をば、送りまいらせけるとなむ聞へさせ給なる。

三 かの御供には、さもあるべき人、をのゝ御さはりありて、贈左大臣の末の子時通の備後守と聞えし、後には法師になられたりけるに、年頃も契置かせ給へりけるとて、其人ばかりぞ、首にかけまいらせて、たゞ一人参られければ、若狭守にてたかのおと申侍、むげに年若き人、幼くよりなれつかうまつりて、御なごりの忍びがたさに、事にのぞみて、したひまいりけるに、御山へ入らせ給日、雪いたく降りければ、詠み侍ける。

誰か又今日のみゆきを送りをかんわれさへかくて思ひきえなば

#### 四 おほうちわたり

過ぎたる方の事は、遠きも近きも、見及び聞及ぶほどの事申侍ぬるを、今の世の事は、はゞかり多かる上に、誰かはおぼつかなくおぼされむ。しかあれども、

一  
し—国本「侍」

事の続きなれば、申侍になむ。當時(後白河)の一院は、鳥羽の院の第四の御子、御母待賢門の院、大治二年丁(ひのと)の未(ひつじ)の年うみたてまつらせ給へりしにやをはしますらむ。多くの宮たちの御中に、天(あめ)の下伝(したつた)へ保たせ給、いとやむ事なき御栄へ也。保延二年十二月、御書始に、式部の大輔敦光といひし博士(はかせ)ぞ、御侍読に参らるとうけ給し。上達部、殿上人参りて、詩など奉られけり。近くはさることも聞え侍らぬに、この御書始にしも、しか侍けむ、よき例にこそ、せられ侍べらむずらめ。同五年十二月廿日、御元服せさせ給しは、十三の御年にこそをはしましたけめ。

久寿二年七月廿五日、位に即かせ給き、御年廿九にをはしましたき。唐(タウ)の太宗の位に即かせ給御年とか聞え侍しものとめでたく。院の仰事にて、内(うち)の大臣とて、(実能)徳大寺のおとゝをはせし、具したてまつりて、まづ高松殿に渡り給。夜に入て、上達部引き連れて参りて、近衛の内裏より、道に長く筵道敷かれ侍けり。

十月廿六日、御即位ありて、東宮立させ給。大嘗会など過ぎて年もかはりぬれば、院の姫宮東宮の女御に参り給。高松院と申、御事也。前斎院とて、今の上西門院をはしましゝを、御母にしたてまつらせ給とぞうけ給はりし。母后美福門院をはしませば、別の御母なくとも、おはしますべけれども、今少しねむごろなる御心にや侍けむ。

五月の末に、故院の御なやみまさらせ給て、七月に失せさせ給。世に聞ゆる事



一 給しかば―国本「たまひしかば」

ありて、いひ知らぬ軍の事々も出で来て、御門（後白河）の御方勝たせ給しかば、賞ども行はせ給き。こまかにも申つくしがたく、みな人聞かせ給けむ。世を治めさせ給事、昔にはちず、記録所として、後三条院の例にて、かみは左大将公教、弁三人、寄人などいふものあまた置かれ侍て、世の事をしたゝめさせ給。次の年も、諒闇にて、三月にぞつかさめしなどせさせ給。

十月に大内造り出して渡らせ給。殿や門などの額は、関白殿書させ給。宮造りたる国司など七十二人とか、位給けり。中頃かばかりのまつり事なきを、千代に一度澄める水なるべし、とぞ思あえる。上には、清涼殿、藤壺かけてをはします。女房は登花殿の続きに局しつゝ侍ふ。中宮（所子）は承香殿にをはします。その女房は麗景殿に局あり。内（公卿）の大臣の奉らせ給へる女御は、梅壺にをはす。その女房は襲芳舍に局給へりき。神鳴の壺なるべし。東宮は桐壺にをはします。女房はその北の舍に局しつゝ侍ふ。東宮の宮す所は梨壺なれば、女房はその北に局給へり。関白殿は、宣耀殿を御宿直所にせさせ給へり。近き世には、里内裏にてのみありしかば、かやうの御すまゐもなきに、いといまめかしく、めづらかなるべし。弓矢などいふ物、あらはに持ちたるものやはありし。物に入れ隠しなどしてぞ、大路を歩きける。宮この大路などもなどは、鏡のごとくみがき立てゝ、つゆきたなげなる所もなかりけり。末の世ともなく、かくおさまれる世中、いとめでたかるべし。

二 のみありしかば―和本、国本なし。蓬本に廻り補ふ。

一  
し―国本「侍」

内 宴

かくて年もかはりぬれば、朝觀の行幸、美福門院にせさせ給。まことの御子にをはしまさねども、近衛の御門をはしまさぬ世にも、国母になぞらへられてをします。いとかしこき御栄へ也。又東宮行啓ありて、姫宮御母にて拝したてまつらせ給。その姫宮と申は、八条院と申なるべし。廿日内宴行はせ給。百年あまり絶へたる事を行はせ給、世にめでたし。題は「春は生る聖化のうち」とかぞ聞へ侍し。関白殿など、上達部七人詩作りて参り給ける。青色の衣、春のおほみ遊にあひて、めづらかなる色なるべし。舞姫十人、綾綺殿にて袖振るけしき、漢女を見る心地なりけり。今年にはかにて、まことの女かなはねば、童をぞ、仁和寺の法親王奉り給ける。書をば仁寿殿にてぞ講ぜられける。尺八といひて、吹き絶へたる笛、はじめてこの度吹き出したるとうけ給はりしこそ、いとめづらしき事なれ。

六月すまひの節行はせ給。これもひさしう絶へて、年頃行はれぬ事也。十七番なむありける。古き事どものあらまほしきを、かく行はせ給、ありがたき事也。

一 たかのむすめ大藏卿もろー和本、国本なし。蓬本に拠り補ひ、蓬本の「かた」を尊卑分脈により「たか」と改む。

かつは君の御宿世<sup>すくせ</sup>もかしこくおはします上に、少納言通則といひしが、法師になりたりしが、鳥羽院にも朝夕つかうまつり、この御時には、ひとへに世中をとり行ひて、古きあとをもおこし、新しきまつり事をも、すみやかに計らひ行ひけるとぞ聞ゝ侍し。

この御門、御乳母は、修理大夫基隆の女、大藏卿師隆の女など、二三人ぞおはしけれど、あるはまかり出で、あるはかくれなどして、紀のごとて、御乳の人と聞へしが男にて、かの少納言の子などあまたうみて、今は御乳母にて、八十島の使などせられければ、ならぶ人もをはせぬにこそ。

すべらぎの千代のみかげに隠れずは今日住吉の松を見ましや

など詠まれ侍けると聞え侍し。まことにいかひくしき人におはすべし。

かの少納言、唐の文をもひろく学び、大和心もかしこかりけるにや、天文などいふ事をさへならひて、才ある人になむ侍ける。かの少納言の大徳、齢などさまで古き人にも侍らざりしに、今の世にも、いかにめでたく侍らまし。御めのとほ代くなきにはあらぬを、近衛のすけなど、かりそめにもあらで、四位少将、中将なるに、さまぐの国のつかさなどかけて、あまりに侍けるにや、羽あるものは、前の足なく、角あるものは、かみの齒なき事に侍を、また道の人ならぬ天文などのおそりある事なるにや。よろづめでたく侍しに、をしくも侍かな。

二 まゑー和本「まゑ」。国本、蓬本に拠り改む。

## 一 事―国本「事は」

かくて八月十六日、位東宮に譲りたてまつらせ給。位にはします事三年なりき。をりゐの御門にて、御心のまゝにて、世をまつりごたむとおぼしめするべし。さきぐの御門位に即かせ給、院など申せども、我まゝにせさせ給事ありがたきに、ならぶ人もをはしまさぬ、この世のみにあらず、八巻の御法をうかべさせ給て、さまぐの御つとめ行はせ給なれば、昔の世の契りにおはしますなるべし。千体の千手観音の御堂造らせ給て、天王、八部衆など、生きてはたらくと申ばかりにぞ侍。鳥羽院の千体の観音だに、ありがたく聞え侍しに、千手の御堂こそ、おぼろけの事とも聞え侍らね。

## 二 観をむ―国本「観をむを」

熊野をさへうつして、宮に造らせ給つらむこそ、遠く参らぬ人のためも、いかにめづらしく侍らむ。日吉をも祝ひすゑたてまつらせ給らむ、神仏の御事、かたぐをこし立てさせ給へる、かしこき御心ざしなるべし。御熊野詣、年毎にせさせ給。比叡の山、高野など聞へ侍、しかるべき御契りなるべし。今は御髪をろして、法王と申なれば、いかばかりかたうとくをはしますらむ。御子たちも、をのく道にとりて、才をはしますと聞へさせ給へるこそ、誰も知らせ給へる事なれば、なにとかはさのみも申侍べきな。されど、事の続きを申侍ばかり也。

一 うるはしきをむなまひ―和本「うるしき  
をむなまひは。国本、蓬本に拠り改む。  
二 ならはされける―和本、国本「ならされ  
ける」。蓬本に拠り補ふ。

## をとめのすがた

二条の帝<sup>みかど</sup>、申は、<sup>(後白河)</sup>此院の一のみこにをはしましき。この幼<sup>をみな</sup>くをはします新院の御親<sup>みより</sup>にをはします。其御母左大臣有仁<sup>(藤子)</sup>のをとめの御女<sup>むすめ</sup>、まことの御親<sup>みより</sup>は、経実<sup>つねざね</sup>の大納言にをはす。この帝東宮<sup>みかど</sup>に立<sup>た</sup>せ給て、保元二年七月十一日、位に即<sup>つ</sup>かせ給ひき。御年十六とぞうけたまはりし。師走<sup>しはす</sup>の廿日御即位ありて、年<sup>とし</sup>もかへりにしかば、正月三日、朝覲<sup>あそび</sup>のみゆき、鳥羽殿<sup>とよはの</sup>へ行幸せさせ給。

廿一日、<sup>ことし</sup>今年も内宴あり、上達部<sup>かみちらめ</sup>七人、四位五位十一人、文作<sup>ふみづ</sup>りて参<sup>まゐ</sup>ると聞<sup>きこ</sup>え侍<sup>き</sup>き。序<sup>なごり</sup>は永範<sup>ながのり</sup>の式部大輔ぞ書<sup>か</sup>ゝるとうけ給はりし。題<sup>だい</sup>は、「花のもとに歌舞をもよをす」とかや。法性寺<sup>(法性寺)</sup>のをとめ奉<sup>たてまつ</sup>り給へるとぞ聞<sup>きこ</sup>え侍<sup>き</sup>りし。舞姫<sup>まいひめ</sup>は、今年<sup>ことし</sup>はうるはしき女舞<sup>をなまひ</sup>にて、日頃<sup>ごころ</sup>より習<sup>な</sup>はされけるとぞ聞<sup>きこ</sup>え侍<sup>き</sup>りし。通憲<sup>みちのり</sup>大徳<sup>とく</sup>、楽<sup>がく</sup>の道<sup>みち</sup>をさへ好<sup>あ</sup>み知りて、さもありぬべき女どもを習<sup>な</sup>はしつゝ、神<sup>かみ</sup>の社<sup>やしろ</sup>などにも参<sup>まゐ</sup>りつゝ、舞<sup>まい</sup>ひあへりけりと聞<sup>き</sup>侍<sup>き</sup>し。世<sup>よ</sup>にゆかしく見<sup>み</sup>ばやと思<sup>おも</sup>ふ給へしかども、老<sup>おい</sup>のくちをしき事は、心にもえまかせ侍<sup>き</sup>らで、さる所<sup>ところ</sup>どもに参<sup>まゐ</sup>りあはで、見<sup>み</sup>侍<sup>き</sup>らざりき。この御中<sup>みちう</sup>には、定<sup>さだ</sup>めて御覧<sup>らみ</sup>せさせ給けむかし。

一  
き—固本なし。

かの入道事(信西)にあはれ、あさましき事(こと)も出で来てぞ、内宴もたゞ二年(ふたとせ)ばかりにて、行はれぬことになりて侍るにこそ、その事(こと)のとがにや侍らむ。なをもあらまほしき事なれど、かつは仕立つる人もかたく、ひさしく絶えたる事行はれて、世の騒ぎも出で来にしかば、時にあはぬ事(こと)ゝ侍らぬにや。春のはじめに詩作りて、上達部より下(しも)ぎま奉る事、かしこき御時、もはらあるべき事なり。さる事侍らば、  
5  
なをいみじかるべし。

二月廿四日、后立ち給ひき。鳥羽院のひめ宮にて、高松の院の、東宮の御時より女御にをはしましし、中宮に立ち給て、もとの中宮は院の後、公能の右の大(みぎ)臣の御女(むすめ)、皇后宮にあがり給てをはします。今年ぞ大嘗会と聞え侍し。大内に、  
10  
この御時は、まだかたぐをはしまさぬ程なれば、おひろごろせ給へりしも、まかでさせ給て、上は清涼殿ばかりに、常のやうにをはしまして、藤壺には、中宮ぞをはしましける。殿(おの)御宿直所は、なを宣耀殿なりき。  
15

いづこもひろらかにて、いとめでたく聞え侍しに、その年の師走に、あさましき乱れの都のうちに出来にしかば、世もかはりたるやうにて、かの少納言もはかなくなり、めでたく聞えし上達部、近衛のすけなど聞えし子ども、あるは流され、法師になりなどして、いとあさましき頃なり。衛門督信頼といひしは、かの  
大徳と仲あしくして、かゝるあさましさをし出せるなりけり。御おぼえの人にて、  
15

— こそ— 国本「こそは」

いかなる官つかさどもならむと思ふに、入道諫いんどうむるをいぶせく思ひて、軍いくさを起したりけるを、大徳悟だいとくごりて、行く方知かたしらずなりにけるに、かの御垣守みかきもりも、その報むかひひに、思おもはぬかばねになむなりにける。いとあさましとも、言葉ことばもをよばぬ事なるべし。

## ひなのわかれ

かの少納言（通意）のゆかり、浦うらに流ながされける、みな召めしかへして、世よみなしづま

5

りて、内の御まつりごとのまゝなりしに、帝みかどの御母方ははかた、また御めのとなどいひて、

大納言（経宗）、別当（雅方）といふ人ふたり、世よをなびかせりし程に、院（後白河）の御ため御心にたがひ

て、あまりなる事こともやありけむ、ふたりながら内に侍きざらはれける夜、あさましく

聞きえしに、いかなる事かあらむずらむと聞きえけれど、法性寺（忠通）の太政大臣おほきをとぎの、切きりに

申まをはらげ給て、をのゝ流ながされて、この頃は召めしかへされて、大臣の大將まで

なり給へるとこそ聞きはべれ。さまであやまたずをはしけるにや。宰相（雅方）は、憂うれき

め見たりとて、頭かしらをろされにけり。それもかへりのぼりて、をはするとかや。

鳥羽院失うしなせさせ給し程、世よの乱れ出いて来てより、かたゝ流ながされ給ふ人、たび

く（頼長）にその数かずをはしき。はじめのたび、讃岐院の御ゆかりに、大臣殿（頼長）、方かたなど、

10

一  
八九人―国本「は九人」

廿四五人ばかりや聞え侍けむ。さて四年ばかりありて、衛門督とかや聞えし人の乱れに、少納言（信西）と聞えしゆかりに、その子八九人ばかり、浦くへと聞え侍き。事をりしかば、その人くは召しかへして、またの年の春頃、もろ中の源中納言とかや、衛門督に同じ心なりとて、東へをはすと聞え侍き。しかありし程に、その頃大納言（経世）、宰相（惟方）ふたり、院の御ため御心にたがひ給とて、阿波国、長門の方などにをはしき。

其年六月にやありけむ、出雲の守光保、その頃光宗などいひし源氏の武者なりし人、筑紫へつかはして、はてはいかになりけるとかや。その人の女とかや、いもうととかやなる人の、鳥羽院にときめく人にて、いとをしみのあまりに、東宮とてをはしまし、御めのとにて、位に即かせ給しかば、内侍のすけなど聞えき。10  
そのゆかりにて、時にあへりしに、内の御方人の、かく事にあひしかばにや、又源氏どもの失せぬる、しかるべきにやありけむ、またさばかりの少納言埋みたる、もとめ出しなどしたるにやよりけむ、かくぞなりにし。かやうにて、今は何事かはおほえしに、かくをはしますべかりけるを、その折もいかゞ疑はせ給けむ、皇子の御方人とをぼしき、つかさ退きなどして、また流させ給へりき。

おほかた六七年の程に、卅余人のちりぐにをはせし、あさましく侍しに、やうくよろしきにや従ひけむ、召しかへされしに、惟方いつとなくをはせしかば、



## 一 き伊一園本「記伊」

かしこより、都へ女房につけてと聞えし、

この瀬にも沈むと聞けば涙川流れしよりもぬるゝ袖かな

とぞ詠まれ侍ける。この兄、大納言光頼と聞え給し、四十にだにいくばくもあまり給はざりしに、頭をろして、桂の里に籠り給なれ。それはかやうの事にかゝり給事なく、何事にも、よき人と聞ゝたてまつりしに、いとあはれにありがたき御心なるべし。左兵衛督成範と聞え給も、紀伊の二位の腹にて、その折播磨の中將、をとと美濃、少將など聞えし、衛門督の乱れに、ちりぐにをはせし時、中將下野へをはして、かれにて詠み給ける、

わがためにありけるものを下野や室の八島に絶えぬ思ひは

とかや。

## 二 花園句一園本「花園句」

## 花 園 句

此御門の御母、うみをきたてまつりて、失せ給にしより、鳥羽の女院養ひたてまつり給ひて、幼くをはしましゝ程、仁和寺にをはしまして、五の宮の御弟子にて、俱舎の頌などよませ給て、軸くよみつくさせ給て、その心説きあらはせる

一 たてまつらむ—和本「まつらむ」。国本に  
掲り補ふ。

書どもをさへ、伝へうけさせ給て、智慧深くをはしましけり。院位に即かせ給しには、当今の一のみにてをはします上に、女院の御養子にて、近衛の帝の御かはりともおぼしめして、此宮に位をも及ぼしたてまつらむと、計らはせ給ければ、都へかへり出でさせ給て、みこの宮、宝の位など伝へ保たせ給き。末の世の賢王にをはしますところさうけ給はりしか。御心ばへも深くをはしまし、動かしがたくなむをはしましける。

廿三にをはしまし、年、御病ひ重りて、若宮に讓申させ給て、いくばくもをはしまさざりき。よき人は時世にもをはせ給はで、ひさしくもをはしまさざりけるにや。末の世いとくちをし、帝の御位は、限りある事なれど、あまり世を疾く受け取りておはしましけるにや。又大上天皇朝に臨ませ給、常の事なるに、御心にもかなはせ給はず、世の乱れのなごり、直させ給程、いひながら、あまりに侍けるにや。よくをはしまし、帝とて、世をしみてまつるとぞ聞え侍。二条院とぞ申なる。古き後の御名なれど、男女かはらせ給へば、まがはせ給まじきなるべし。されど同じ御名は古くも侍らぬにや。

この帝の御母、大納言経実の女、その母、東宮の大夫公実の女なり。その大納言の中の君は、花菡の左の大臣の北の方なれば、姉の姫君を御子にして、院の今宮とてをはしまし、に、奉られたりしなり。この帝うみ置きたてまつりて、失せ

一  
をくられ給て―國本―をくられて―

給にき。後の位くらゐ贈られ給て、贈太皇太后宮きう懿子いしと申なるべし。御親おやの按察あんさつ大納言も、太政大臣おほきをばきひとつのくらゐ贈られ給へるとなむうけ給はる。さる事やあらむとも知らで失うしせ給しかども、やむごとなき位くらゐ添そへられ給へり。御末すえの栄えなるべし。はかなくて消えさせ給にし露いづちの御命いのちも、后贈られ給へば、生きてなり給へるも、昔むかしがたりになりぬれば、残のこり給御名は、同じ事なるべし。

かの譲ゆづられてをはしまし、みこは、新院と申て、まだ幼おきなくて、太上天王とてをしますなり。六条院と申。二条院のみこふたりをしますなる中に、後に生れさせ給へれば、第二のみこにをしますなるべし。御母はははことゝに聞えさせ給き。この帝みかどの御母、得大寺とくだいじの左の大臣わだいなの御女みむすめと申めりしも、うるはしき女御などに参り給へるにはあらで、忍しのびてはつかに参り給へりけるなるべし。さればたしかにもえうけ給はらず。帝みかど尋ね出でたてまつりて後、中宮なかつうを養やしなひたてまつり給て、母后にをしますなる。

永万元年六月廿五日、位に即つかせ給。御年二つ。世を保たもたせ給事三年にやをしますすらむ。一院（後白河）おぼしめし置きつる事にて、東宮（高倉）に位譲りたてまつらせ給て、まだ幼おきなくをはしまして、太上天皇と申。いとやむごとなし。御年二にて位に即つかせ給ことは、これや始めてをしますすらむ。近衛みかどの帝は、三にてはじめて即つかせ給と申しも、はじめたる事とこそうけ給しか。多くは五などにてぞ即つかせ給。

一 とか「国本」<sup>と</sup>

二 育子<sup>一</sup>和本、国本「育」の部分空白。蓬本に廻り補ふ。

三 侍りき―国本「はべりき」

唐国<sup>からくに</sup>は一つなる例<sup>れい</sup>もをはしましけりとか聞えき。

この帝<sup>みかど</sup>の御母<sup>おはは</sup>、今<sup>いま</sup>の中宮育子<sup>ニ</sup>と申。故法性寺<sup>（思通）</sup>の入道前<sup>（思通）</sup>の太政大臣<sup>きせき</sup>の御女<sup>みすめ</sup>にをします。前<sup>さき</sup>の上野<sup>かむつげ</sup>の守源頭俊<sup>かみもととし</sup>の女<sup>むすめ</sup>の御腹<sup>はら</sup>となむ。帝<sup>みかど</sup>のまことの御母<sup>おはは</sup>の事は、前に申侍ぬ。此中宮<sup>みかど</sup>、二条<sup>ふたじょう</sup>の帝<sup>みかど</sup>をはしまさねども、今<sup>いま</sup>の国母<sup>こくぼ</sup>とて、なを内にをはしませば、昔<sup>むかし</sup>にかはる事<sup>こと</sup>なくなむ侍ける。臨時祭<sup>れんじ</sup>の四位<sup>べいじ</sup>の陪從<sup>はいじゆう</sup>に、清輔<sup>きよすけ</sup>と聞ゆる人<sup>ひと</sup>、こもよをし出されて、参<sup>まゐ</sup>られたりけるに、先帝<sup>せんてい</sup>の御時<sup>ごとき</sup>は、雲<sup>くも</sup>の上人<sup>うへう</sup>なりけれど、この御世<sup>ごよ</sup>にはまだ殿上<sup>てんじやう</sup>もせねば、たちやすらひて、北<sup>きた</sup>の陣<sup>ぢん</sup>の方<sup>かた</sup>にめぐりて、后<sup>きさき</sup>の宮<sup>みや</sup>のをはします、ごたちの局町<sup>つばなまち</sup>など見るも、また殿上<sup>てんじやう</sup>の方<sup>かた</sup>など、まづ参りて、はるかに見渡<sup>みわた</sup>しなどしけるにも、昔<sup>むかし</sup>にかはる事もなく、馴<sup>な</sup>れならひたりし人<sup>ひと</sup>どもの見えければ、后<sup>きさき</sup>の御方<sup>ごかた</sup>の人<sup>ひと</sup>に、物<sup>もの</sup>など申しけるあひだに、檜扇<sup>ひあふぎ</sup>の片<sup>かた</sup>つま引き折りて書きつけて、ごたちの中に申入れさせける、

昔見<sup>むかしみ</sup>し雲<sup>くも</sup>のかけはしかはらねどわが身ひとつのとだえなりけり

とぞ詠<sup>よ</sup>まれたりける。いとやさしく侍ける事と聞え侍りき。

一 さきのみかどの御時も、この御世にも、御さんの御いのりとのみきこえて、まことにはあらぬ事のみきこえ給しに、いとありがたくきこえさせ給へ和本、国本なし。遂本に擬り補ふ。

さて後一条の帝(みかど)より後、近きやうなれども、十代に御世(みよ)あまらせ給にけり。今は(高倉)当今の御事、申もはゞかり多く侍れど、続(つづ)きにをはしませば、こと新しく侍ど、申し侍になむ。当代は、(後白河)一院のみこ、御母皇太后宮滋子(し)と聞えさせ給。贈左大臣平時信のをとゞの女(むすめ)なり。帝(みかど)応保元年辛巳(かのとのみとし)の年生れさせ給て、仁安元年十月十日、東宮に立(た)せ給。御年五(いづ)。帝(みかど)よりも二年兄(あに)を(は)します。兄東宮は三条院の例なるべし。同じ三年二月十九日、位に即(つ)かせ給。御年八つに(は)します。同じ帝、申せども、世中隔(へだ)である事もなく、一院天の下(した)しろしめし、御母后(おは)さかりに(は)しませば、いとめでたき御栄(さか)へなるべし。しかあれば、二葉の松(まつ)の千代(ちよ)のはじめ、いとめでたく伝(つた)へうけ給侍。

御母后(おは)この帝(みかど)うみたてまつらせ給て、五年ばかりにや、女御と聞えさせ給て、仁安三年と申、弥生(やよひ)の頃、皇太后宮に立(た)せ給へり。今は女院と申とぞ。いとめでたき御栄(さか)へにおはします。多くの女御、后を(は)しますに、帝(みかど)うみたてまつり給へりける御宿世(すくせ)、申もをろかなり。さき(一)の帝(みかど)の御時も、この御世にも、御産(う)の御祈りとのみ聞え、まことにはあらぬ事のみ聞え給しに、いとありがたく聞えさせ給。

代々の帝(みかど)の御母、藤波(ふぢなみ)の御流れに(は)しますに、堀川(みかど)の帝(みかど)の御母后も、関白(関白)の御女(むすめ)になりて、女御に参り給へれど、まことには源氏に(は)しませば、ひきかえ

## 一 家—国本「家の」

たるやうに聞えさせ給しに、今又平の御姓の国母、かく榮へさせ給上に、同じ氏の上達部、殿上人、近衛つかさなど、多く聞え給。この氏の、しかるべき榮へ給時のいたれるなるべし。

平氏はじめは一つにをはしけれど、日記の家と、世の固めにをはする筋とは、ひさしうかはりて、かたぐ聞え給を、いづかたも同じ御世に、帝后同じ氏に榮えさせ給める。平野は、あまたの家の氏神にをはすなれど、御名もとりわきて、この神垣の榮へ給時なるべし。この後の御母は、顯頼の民部卿の女にをはするなるべし。醍醐の帝の御母方の家にてをはしますのみにあらず、君に仕へたてまつり給家、かたぐしかるべくかさなり給へるなるべし。今の世の事はゆかしく侍を、えうけ給はらで、おぼつかなきこと多く侍。

一 ふぢなみの上第四―和本、国本なし。目錄に拠り補ふ。

# ふぢなみの上第四

## ふ ぢ な み

世継は、入道太政大臣の御采えを申さむとて、その御事をこまかに申たれば、その後より申べけれど、水上あらはれぬは、流れのおほつかなければ、まづ入道をとゞの御有様、をろく申侍べき也。入道前太政大臣道長のをとゞは、大入道殿の五郎、九条の右の大臣の御孫なり。一条の院、三条院、後一条院、三代の関白にをはします。御年五十四にて御髪おろさせ給て、万寿四年十二月四日、六十にてかくれさせ給ふ。

男君、女君あまたおはしましき。女君第一のは、上東門院と申し、後一条の院、後朱雀院、二代の御門の御母なり。次に第二の御女は、三条院の中宮妍子と申し。陽明門院の御母なり。第四は、後一条院の中宮威子と申。二条の院、後三条院の皇后宮との御母なり。第六の君は、後冷泉院の御母、内侍の督嬪子と申し。これ

二 との―和本、国本「とのの」。蓬本、前本に拠り改む。

一 年一國本なし。

二 完仁一國本「寛仁」

三 その一國本「其」

みな鷹司殿の御腹の女なり。男君たちは、太郎は宇治の太政大臣、次は太二条殿、又同じ御はらからなり。堀河の右の大匠、閑院の東宮の大夫、無動寺の馬のかみ、三条の民部卿、この四所は、高松の御腹の君たちなり。この御腹に、女君ふたところおはしき。ひとりは一院とて、東宮より院にならせ給へりし、女御に参り給へりき。今ひとりとは、土御門の右の大臣の北の方なり。昔も今も、かゝる御栄えはいとありがたきことなるべし。

上東門の院は、一条の院の後、二代の御門の御母なり。御有様さきにこまかに申侍ぬ。次に妍子と申は、女院と同じ御はらからにをします。寛弘元年十一月に、内侍の督になり給て、やがて正四位下せさせ給ふ。十二月に三位にあがらせ給。七年正月に二位にのぼり給て、同じ年二月に、三条院東宮と申し、女御に参り給。位に即かせ給て、寛弘八年八月に、女御の宣旨かうぶり給。長和元年二月十四日、中宮に立ち給。御門位去らせ給て、完仁二年十月十六日、皇太后宮にあらり給。万寿四年九月十四日、三十四にて御髪をろして、やがてその日かくれさせ給ひにき。枇杷殿の皇太后宮と申。隆家の帥くだり給けるに、この宮より、扇たまはすとして、

すゞしさはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ

この宮の御腹に、三条の院の姫宮おはします。その宮禎子の内親王と申て、治



一 まかり出で―國本「まかりいで」

二 見―國本「み」

三 みの―國本なし。

四 きこゆる―國本「きこゆ」

曆三年一品の宮と申。万寿四年三月廿三日、後朱雀院の東宮と申し時、参らせ給ひき。御歳十五にぞおはしまし。御門位に即かせ給て、皇后宮に立させ給。後にあらためて中宮と申き。御門の御ついでにかつは申侍ぬ。後三条院の御母、陽明門院と申、この御事なり。この女院の腹に、女宮たちおはしましき。良子の内親王とて、長元九年十一月二十八日、伊勢のいつきと聞へさせ給えりし。一品にのぼらせ給へりき。

次の姫宮は娟子の内親王と申き。長元九年霜月の頃、賀茂のいつきと聞へし程に、まかり出で給ける後、天喜五年などにやありけむ、長月の頃、いづこともなく失せさせ給にければ、宮の内の人、いかにすべしといふこともなくして、明し暮しける程に、三条わたりなる所に住み給けり。はじめは、人の扇に、一文字を男の書き給へりけるを、女の書き添へさせ給へりければ、男又見て、一文字添へ給に、たがひに添へ給ける程に、歌一つに書きはて給にけるより、心通ひ給ひて、夢かうつゝかなる事とも出で来て、心や合せ給へりけむ、負ひ出したてまつりて、やがてさて住み給けり。男咎あるべしなど聞へけれど、人からの品も、身の才などもはして、世もゆるしきこゆるばかりなりけるにや、もろともに心を合せ給へればにやありけむ、さてこそ住みはて給けれ。男その程は、宰相の中將など申けるとかや。後には左の大臣までなり給へりき。

一 完仁一國本「寛仁」

入道をとゞの第四の御女、後一条院の中宮威子と申き。これも同じ御腹、鷹司殿、姫君なり。寛弘九年に内侍の督になり給て、後一条の院位の御時、女御に参り給。完仁二年十月后に立ち給。長元元年に御髪をろさせ給。同九月にかくれさせ給にき。御門は四月に失せさせ給。后は九月にかくれさせ給し。いと悲しかりし御事ぞかし。その御はてに、さはる事ありて、江侍従参らざりけるを、人の、「など参らざりしぞ」と申たりければ、

我身には悲しき事のつきせねば昨日をはてと思はざりけり

とぞ聞へける。

二 まいらせ給て一國本「いらせ給て」

この後のうみたてまつり給へる姫宮、章子の内親王と申。二条の院と申、この御事なり。後冷泉院東宮にをはしまし、時、参らせ給て、永承元年七月、中宮に立、せ給ふ。治暦四年四月に、皇太后宮にあがらせ給き。内にまいらせ給て、藤壺にをはしましけるに、故中宮のこれにおはしまし、事など思ひ出して、出羽の弁が、涙つゝみあえざりければ、大式三位、

しのびねの涙なかけそかくばかりせはしと思ころの袂に

と詠まれ侍ければ、出羽弁、

春の日にかへらざりせばいにしへの袂ながらゆくちはてなまし

とぞ返し侍ける。

馨子の内親王と申も、又同御腹におはします。長元四年に賀茂のいつきにて、同九年に出でさせ給て、永承六年十一月、後三条院東宮にをはしまし、女御に参らせ給き。御年廿三。承保元年六月廿二日、皇后宮に立ち給。延久五年四月廿一日、御髪をろさせ給き。院の御髪をろさせ給ひし同日、やがて同じやうにならせ給し。いとあはれに契申させ給へる御宿世なり。后の位は、もとにかはらせ給はず。

(道長) 入道殿の第六の君は、後冷泉院の御母にをはします。御門の御ついでに申侍ぬ。

## 梅のにほひ

関白前太政大臣頼通のをとゞは、法成寺入道太政大臣の太郎におはします。御母、宮たちに同。従一位源倫子と申。一条の左大臣雅信のおとゞの御女也。鷹司殿と申。この宇治の太政大臣、大臣の位にて五十一年までおはしましき。後一条院の御をぢにて、御歳廿六にて、寛仁元年三月十六日、摂政にならせ給。その十九日、牛車の宣旨かぶらせ給て、やがてその廿二日、大臣三人のかみにつかせ給宣旨かうぶり給。御門おとなにならせ給ぬれば、関白と申き。後朱雀院位に即か

## 一 給ふ—国本「給」

せ給にも、なを御をぢにて、長元九年四月廿九日に、さらに関白せさせ給ふ。その後、大政大臣にならせ給ふ。御年七十一とぞ聞えさせ給し。

治暦三年七月七日、宇治の平等院に行幸ありて、准三宮の宣旨かうぶり給。昔(貞明)の白河のをとゞのごとくに、内舍人など御隨身給はらせ給き。十二月に関白は譲

り給て、のかせ給へれど、内覧の職事参り、物申こと同じことなりき。後三条院位に即かせ給ひてぞ、年頃の心よからぬ事どもにて、宇治に籠りゐさせ給て、延久四年正月廿九日、御髪をろさせ給て、同六年二月二日、八十七にて失せさせ給にき。このをとゞ、哥などもよく詠ませ給しにこそ侍れ。その中に、堀河(堀河)の右の大臣に、梅の花折りて奉り給とて、

折られけりくれなる匂ふ梅の花今朝しろたえに雪は降れゝど  
と詠ませ給ひたる、いとやさしく、末の世までとゞまり侍れ。

このをとゞの御子、太郎にて右大將通房と申ゝ、十八にて失せさせ給にき。御母、右兵衛の督憲定の女也。まうけの関白、一の人の太郎君にて、あえなくなり給にしかば、世もくれふたがりたるけしきなりしぞかし。年もまだ廿にだにならせ給はぬに、和哥などをかしく詠ませ給けるさへ、いとあはれに思ひ出でられさせ給。「ひとよばかりをたなばたの」など詠ませ給へる、後拾遺に入りて侍り。

二 同六年二月二日—和本、国本なし。蓬本に廻り補ふ。

## ふしみの雪の朝

—  
ふし見—国本「ふし見」

大將殿(通房)のほかの君達は、大殿(前)へ一つ御腹(はら)にをはしましき。大殿の御末(すま)こそは、今に一人つがせ給めれ。その御報(ほう)に押(お)されて、大將殿もとくかくれ給にけるにこそ。女君は、後朱雀院の中宮(中子)に奉り給えりしは、まことの御子にはおはしまさで、式部卿(敦康)の宮の御子なりしに、まことの御女(ひすめ)は、四条の宮と申き。大殿の一つ御腹(はら)なり。

一 伏見(ふし見)の修理の大夫俊綱と聞えし人も、一つ腹(はら)におはしき。其の御母(はは)は、贈二位讃岐守俊遠と、あひ具し給へりければ、俊綱の君御子におはしけれど、けざやかならぬ程なりければにや、なを俊遠のぬしの子の定にて、橘俊綱とてぞをはせし。後になを殿の御子とて、藤原になり給へりき。直衣(なをし)など着られけるをも、橘直衣とぞ人は申ける。まめやかになりて後、大殿、宇治の大僧正、四条宮などは、同御腹(はら)なれど、修理の大夫は、下臈(げろう)にてやみ給にしぞかし。上達部(かむらめ)にだにえならざりける。なを世のあがりたるにや。からくやおぼしけむとぞおぼえ侍し。

されども近江守有佐(ありすけ)といひし人は、後三条の院のまことには御子と聞えしかど、

讃岐守頭綱の子にてこそやまれにしか。有佐といふ名も、御門(後三条)の御手にて、扇に書ゝせ給て、母の侍従の内侍に給へりけり。堀河(後房)の左の大き臣とらは、「中務の少輔有佐が、道にあひて、おりてゐたりつるこそ、いとをしくおぼえつれ。院にたがはず似たてまつりたる様などありけり」と聞へしかど、それはさてこそやまれにしか。この修理の大夫は、橘をかへられにしかば、なを関白の御子なるべし。

この修理の大夫の、昔尾張国に俊綱といひける聖ひじりにておはしけるを、熱田あつたの社のつかさのながしるなる事のありければ、生れかはりて、その国の守かみになりて、かの国にくだるまゝに、熱田にまうでゝ、その大宮司とかを、かなしくせためられなどしければ、「あやまちなき物をかくつかまつる」など神に申ければ、夢に昔俊綱といひてありし聖の、法施を年頃得させざりしかば、いかにもえ咎とがむまじきとぞ見たりける。しかならむために、国のつかさの品しなにも生れ給にけるにこそ、さすが昔の行こなひの力ちからに、関白の子にてもおはするなるべし。「我も昔、その物をさめたりき」などいひて、鏡取り出させなどせられけり。たゞ人にはおはせざるべし。

大殿おほの伏見ふし見へおはしましたりけるも、すぐろなる所へはおはしますまじきに、雪の降りたりけるつとめて、「俊綱がいたくふけらかすに、にはかに行きて見む」とて、播磨守師信といふ人ばかり御供にて、にはかにわたらせ給たりければ、思

## 三 職事—国本「職事」

一 ふし見侍—国本「ふしみ侍」

二 したる—和本「したるたる」。国本、蓬本、前本に拠り改む。

ひ寄らぬ事にて、修理の大夫騒ぎ出で、雪御覧じ、御物語などせさせ給程に、  
 師信、「かくわたらせ給ひたるに、とくしかるべきあるじなどつかうまつれ」な  
 ど催しければ、俊綱、「今賀殿参り侍なむ」と申ければ、「人にも知られてわた  
 らせ給たれば、賀殿参る事あるまじ。日もやうくたけて、いかでか御まうけな  
 くてあらむ」といひければ、殿笑はせ給て、「たゞせめよ」など仰せられける程  
 に、家の司なるあきまさといひて、光俊、有重などいふ学生の親なりし男、けし  
 き聞えければ、修理の大夫立ち出で、帰り参りて、「あるじしてきこしめすべ  
 きやう侍らざなり。御台などの新しきも、かく御覧する山のあなたに、倉に置き  
 こめて侍れば、便なく取り出づべきやう侍らず。あらはに侍は、みな人の用ゐた  
 る」よし申ければ、「何のはざかりかあらむ。たゞ取り出せ」と仰せられければ、  
 「さは」とて、立ち出で、取り出させけるに、色々の狩装束したる伏見侍十人、  
 色々の相に、いひ知らぬ染めませしたる帷子、くゝり、かけとぢなどしたる雑仕  
 十人引き連れて、倉の鍵持ちたる男、先に立ちてわたる程、雪にはえて、わざと  
 かねてしたるやうなりけり。先に跡踏みつけたるを、しりに続きたる男女、同じ  
 跡を踏みて行きけり。かへさには、御台、高坏、白金の鉋子など、一つづ、捧げ  
 て、鍵持ちたるは、この度はしりに立ちて帰りぬ。

かゝる程に、上達部、殿上人、蔵人所の家司、職事、御隨身など、さまざまに

一 目一國本「め」

二 いかで一國本「いかでか」

三 ふし見一國本「ふしみ」  
ふし見一國本「ふしみ」

五 かやう一和本、國本「かや」。蓬本、前本  
に拠り補ふ。

六 ふし見一國本「ふしみ」

七 いづこ一國本「いづこか」

八 しなさせ一和本「しなせ」。國本、蓬本に  
拠り補ふ。

九 ふし見一國本「ふしみ」

参りこみたりけるに、このさかのさ、所々にいひ知らぬ供へども、目もあやなり  
けり。師信、「いかにかくは、にはかにせられ侍ぞ」と、「かねて夢など見侍け  
るか」とたはぶれ申ければ、俊綱の君は、「いかにかゝる山里に、かやうの事侍  
らむ。用意なくては侍べき」などぞ申されける。

伏見にては、時の哥詠みども日を經て、和哥会たゆるよなかりけり。伏見の会  
とて、いくらとなくつもりてなむあなる。「音羽の山の今朝はかすめる」など詠  
まれたる、いと優に侍かし。かやうにもて興ぜられ、あまりに常にはふけらかし  
参らせられけるにこそ。四条の宮の女房あまた遊びて、暮れぬ先にと、帰り給に  
ければ、修理の大夫、

都人暮るれば帰る今よりは伏見の里の名をもたのまじ

などなむ詠み給ける。

白河の院、「一のをもしろき所はいづこある」と問はせ給ひければ、「一には  
石田こそ侍」。「次には」と仰せられければ、「高陽院ぞ侍ふらむ」と申に、「第  
三には鳥羽ありなむや」と仰せられければ、「鳥羽殿は、君のかくしなさせ給た  
ればこそ侍。地形眺望などいとなき所なり。第三には俊綱が伏見などや侍ふらむ」  
とぞ申されける。異人ならば、いと申にくき事なりかし。高陽院にはあらで、平  
等院と申人もあり。伏見には、山道を造りて、しかるべき折節には、旅人をした



一 さたし—国本「さたして」

二 世—国本「よ」  
三 ことゝも—国本「ことゝも」

四 ふし見—国本「ふしみ」

て、通されければ、さるをもしろき事なかりけり。

大僧正(位)のまだ若くをはしける時、御母贈二位(位)、宇治殿(通)に、「僧都御房の、まだわが房持たせ給はで、あひ住みにてをはしますなるに、房を沙汰したてまつらせ給へかし」と申されければ、泰憲の民部卿、近江守なりけるに、参りたりける日、「こゝなる小僧の、房をいまだ持たざるに、草庵一つむすびて、取らせられなむや」と仰せられければ、「作り侍、いとやすき事に侍。泰憲が館につかうまつる石田と申家こそ、寺も近くて、おはしまさむにも、つれなく慰みぬべき所は侍へ。堂なども侍て便よき所なり」と申ければ、殿は「ゆゝしき法ありける小僧かな。それはこよなき事にこそあらめ」とて、据ゑたてまつり給へりけるとぞ。

泰憲の民部卿は、大殿の中將など申て、まだいはけなくおはしましけるに、大將殿などまだ世にをはしましける程は、殿も人も、重りかに思たてまつらるゝ事ゝもなかりける折、名簿を取り出して、手うつしに奉りて、「泰憲が名簿得させ給へらむは、さりともしあるべき事なり。思やうありて、奉るなり」と申ければ、宇治に参らせ給て、「かくこそつかうまつりたれ」と申させ給けるにこそ、おぼえはつかせ給けれとぞ聞ゝ侍し。まことにや侍けむ。

雪の朝、伏見にわたらせ給たりけるに、門を叩きけれど、ひさしく開けざりければ、人々いかにと思けり。かばかりの雪の朝に、さらぬ人の家ならむにてだに、

一 わたらせ—和本「わたらせ」。国本に拠り改む。

かやうの折節などは、その用意あるべきに、殿わたらせ給へるに、かたぐ思はずに思程に、開けたる物におそく開くるよし、尋ねられければ、「雪を踏み侍らじと、山をめぐり侍とて」と申ければ、もとより開けまうけ、またとりあえず開けたらむよりも、ねむに興あるよし人といひけるとぞ。

# くものかえし

内の太政大臣の御女は、大<sup>〔節〕</sup>殿、一つ御腹にて、四<sup>〔宮子〕</sup>条の宮なむおはしましける。そのさきに、式部卿の御子の女君を子にしたてまつりて、後朱雀院の御時奉らせ給へりしは、弘徽殿の中宮姫子と申き。その御事はさきに申侍ぬ。いつしか、宮くうみたてまつりて、あえなくかくれさせ給にし、いと悲しく侍りし事ぞかし。まことの御女ならねども、いかにくちをしとおぼしめしけむ。秋のあはれ、いかばかりかは悲しく侍りし。

この中宮のうみたてまつり給ける姫宮は、祐子内親王と申き。長暦二年四月廿一日生れ給。長元三年裳着し給き。延久四年御髪をろし給。後に二品宮と申き。この宮の歌合に、内の太政大臣の御哥、

有明の月だにあれやほととぎすたゞ一声のゆく方も見む

と詠み給えるなり。大貳の三位は、

秋霧のはれせぬみねに立つ鹿は声ばかりこそ人に知らるれ

とぞ詠めりける。

また祿子の内親王と申こそ、この中宮うみ置きたてまつる宮におはしませ。寛  
徳三年三月、賀茂のいつきと申き。天喜六年御なやみによりて出で給。美作のこ  
が、「ありし昔の同じ声か」と詠めるは、この宮のいつきの頃侍りて、思ひ出し  
て侍りけるになむ、此宮いつきと聞えてける頃、本院の朝顔を見給て、

神垣にかゝるとならば朝顔のゆふかくるまで匂はざらめや

と侍いとやさしく。

宇治殿まことの御女は、四条の宮にをはします。後冷泉院の中宮寛子と申。

永承元年内へ参り給て、同六年皇后宮に立ち給ふ。御年十六、治暦四年四月に中  
宮と申。同十二月、御髪をろさせ給。御年卅二。天喜四年、皇后宮にて哥合せさ  
せ給ふに、堀河の右の大蔵、「雲のかへしの嵐もぞ吹く」など詠み給ふ、この度  
なり。また御身にも得させ給へりける道にこそ侍るめれ。女房の参らむと申ける  
程に、みまかりにけるを聞かせ給ひて、

くやしくぞ聞ゝならしけるなべて世のあはれとばかりいはましものを

一 あさがほー和本、国本「あがほ」。遠本、  
前本に拠り補ふ。

二 いはましー和本、国本「いはし」。遠本、  
前本に拠り補ふ。

一 ける―和本、国本「け」。蓬本、前本に廻り補ふ。

と詠ませ給ける。いと情多くなむ。(頼通)宇治殿、かぎりにはしましけるに、大殿、(師夷)「おぼしめさむ事、仰せられ置かせ給へ」と申させ給ければ、「宇治と宮と」、ぞ仰せられける。宇治とは平等院の御堂の事、宮とは四条の宮の御事也。「かくて侍はむずれば、御堂の事、宮の御事は、おぼつかなくおぼしめす事、露侍まじきなり」とぞ、よく申させ給けるとなむ。

しらかはのわたり

二 教通―国本「教道」  
三 と―和本、国本なし。蓬本、前本に廻り補ふ。

四 なく―和本「なく」。国本、蓬本、前本に廻り改む。

五 に―和本、国本なし。蓬本、前本に廻り補ふ。

應司殿、御腹の第二の御子にては、大二条殿とてをはしまし、関白大政大臣(なかつかきどの)教通のをとと申き。御堂の君達の御中には、第五郎にやおはしけむかし。さはあれども、宇治殿の次に関白もさせ給ひ、第二の御子にてぞおはしまし。大臣位にて五十五年おはしましき。治暦四年四月十七日、後冷泉院の御時、兄の宇治殿、御譲によりて、関白にならせ給ひき。七十三の御年にやありけむ。帝程な(みかどほど)くかはりあさせ給て、後三条院の代のはじめの関白、やがて同じ月の十九日に、さらにならせ給き。延久二年三月に、大政大臣にのぼり給ひ、永保二年九月廿九日にぞ失せさせ給にし。御年八十。

一 御日記に「和本、国本「御日記にきに」。  
蓬本、前本に拠り削る。

二 うちどの「和本、国本「たちとの」。蓬本、  
前本に拠り改む。

三 おほせられける「和本「おほせける」。国  
本、蓬本、前本に拠り補ふ。

兄の宇治殿は申すべきならず、このをとゞも、世おほえなど、とりぐになむ  
をはしまし。女御、后などたび／＼奉らせ給ひ、家の賞蒙り給ふ事たび／＼に  
て、御引出物、御馬など奉り給ひ、君達など加階させ給て、もとより一の人に  
も劣らずなむをはしまし。御後見にて、但馬の守能通といふが、はかくしき  
ものにて、後見たてまつりければ、御家の内も、いと心にくき事多かりけり。い  
つの事にはべりけるとかや、をほみ遊に、冬の束帯に半臂を着させ給へりけるを、  
肩脱がせ給へりける時、宇治殿よりはじめて、下襲のみ白く見えけるに、このを  
とゞひとり半臂を着給へりければ、御日記に侍るなるは、「予ひとり半臂の衣を  
着たり。衆人恥ぢたる色あり」とぞ侍るなる。かやうなる事どもぞ多く侍りける。  
能通のぬし、宇治殿に参りて、御前に召されて参るとて、尺持ちて参らむとて、  
蔵人所の御厨子さぐりて、「尺も置かれぬ御厨子かな。衣冠にて御前に参るもの  
は、把りてこそ参る事にてあるに」とつぶやきければ、殿聞かせ給ひて、「かく  
常に恥ぢしめらるゝ」などぞ仰せられける。尺は束帯にぞ常は持つ事にて侍を、  
宿直装束にも、事に従ひ、人によるべきにや。検非違使などは、常に持ち侍るな  
り。又高光とか聞えし人は、誰にあひたてまつりたりけるとかや、車よりをりて、  
懷紙を高くたゞみなして、尺にしなしてなむ把れりけるとぞ聞き侍し。束帯にも、  
上達部はなちては、殿上にはもてのほり給はぬとかや。大宮の右の大臣、経輔の

- 一 給へりける―和本「給へける」。国本、前本に拠り補ふ。  
 二 たりける―和本、国本「たりる」。蓬本、前本に拠り補ふ。  
 三 ござ―和本、国本「ごさい」。蓬本、前本に拠り改む。

大納言と、蔵人の頭にていさかひ給へりける時、尺して打ち給たりけるより、とゞめられ侍るとぞ聞ゝ侍りし。

- 三 御座のおほひ掛くなる棹は、とりはなちにはべりけるを、鳥羽院の位の御時にや、殿上人のいさかひ給て、その棹ゝ抜きて、打たむとし給けるより、打ちつけられたるとぞなむ聞え侍。もとなき事も、かゝるためしにはじまれるなるべし。その御座と申は御椅子とて、殿上の奥の座のかみに立てられ侍るなるべし。紫檀にて作られて侍なるを、昔宇多の帝、まだ殿上人にははしまして、業平の中將と相撲とらせ給て、高欄うち折らせ給へるを、代々さてのみ折れながらこそ侍るなるに、近き御世に、筑紫の肥後守なれりけるながしとかやいふ人の、蔵人になれりける時、紫檀のきれ、殿に申て、その高欄の折れたる、繕はむなどせられけるこそ、をこの事にははべりけれ。

- 五 肥後守―和本、国本「備後守」。蓬本、前本に拠り改む。  
 六 こうらむ―国本「からん」  
 七 左衛門の守―和本「右衛門の守」。国本、蓬本、前本に拠り改む。

かの能通のぬしの、しかありける末なればにや、通憲といひし少納言の尺徳も、近くはいみじくこそ世中したゝむめりしか。このをとゞ左衛門の守など申ける程にや、白河に花見にわたり給とて、小式部の内侍にかくと仰せられたりければ、春の来ぬ所はなきを白河のわたりにのみや花は咲くらむ

- 八 みへ―国本「見へ」  
 も侍るは、母の詠みてはべりけるにや。

はちすのつゆ

一 居一國本「る」

二 おほととの、一和本、國本「おほととの、大殿の」。蓬本、前本に拠り改む。

三 次の一和本、國本「つ次」。蓬本、前本に拠り改む。

四 をはす一和本、國本「をす」。蓬本、前本に拠り補ふ。

五 >一和本、の。國本、蓬本、前本に拠り改む。

(公任)  
 四条の大納言女の御腹に、御子ども多くをはしましき。太郎にて、山の井の大納言信家の君おはしき。いとよき人になむをはせし。(頼通)  
 宇治殿は、「山の井ばかり子をえ持たぬ」とぞ仰せられる。いかばかりをはしましけるにか。何事にか侍りけむ、宇治殿、御ともにをはしけるに、わざと据ゑ申さむとおぼして、見かへりてひさしくものし給けるにも、遂に居たてまつり給はざりけるとかやぞ聞えはべりし。いと末をはせぬに、土御門の右の大臣の姫君をぞ養ひ子にて、大殿、北の政所と申し。

5

(教通) 三  
 二条殿、次の御子は、三位の侍従信基とてをはしき。三郎にては、九条の太上の大臣信長とておはせし。それもはかくしき末もおはせぬなるべし。木幡の僧正、長谷の法印などいふ僧君達おはしき。僧正は小式部の内侍の腹なればにや、歌詠みにこそをはすめりしか。「粟津野、すぐろの薄つのごめば」などいふ哥、撰集にも見えはべるめり。失せ給ひて後も、上東門院の御夢に御覧じける、僧正の御哥、

10

あだにして消えぬる身とや思ふらむはちすの上の露ぞわが身は  
と侍ける。浄土に往生し給にや、いとたうとき御歌なるべし。法印は兄たちの同  
じ腹にをはするなるべし。

をのゝみゆき

(歌通) 大二条殿の女君は、後朱雀院の女御におはせし。院失せさせ給て、七八年ばか

りやありけむ、御髪をろし給ひて、十余年ばかり過ぎて失せ給き。長久二年に歌  
合させ給へりしに、良暹法師の人にかはりて、

みがくれてすだく蛙のまろ声に騒ぎぞわたる井手のうき草

と詠める、この哥合の歌なり。兼長の君は、「をのが影をや友に見るらむ」と詠  
み、永成法師は、「命は事の数ならず」と詠めり。かやうのよき歌ども多く侍り。  
10

二 ともに「和本、国本「と、もに」。「」  
は附と見て改む。蓬本、前本は「ともと」

三 をろし「和本、国本「をろ」。蓬本、前本  
に拠り補ふ。

四 冷泉院「国本「故冷泉院」

天喜元年御髪をろし給て、治暦四年にぞ失せ給にし。弘徽殿の女御と申き。  
同じ御時、内侍の督眞子と申しも、世にひさしくをはしき。第二の御女にやを  
はしけむ。三君は、後冷泉院の女御に参りて、后に立ち給て、皇后宮と申き。後  
に皇太后宮にあがりて、永保元年の秋、御髪をろし給ひてき。なを後の位にて、



比叡ひへいの山の麓ふもと、小野おのといふ山里ざんりに籠こもりゐさせ給ひて、都みやこのほかに行なひすまして、ゐさせ給へりき。

雪ゆきをもしろく積つもりたるあしたに、白川院はくせんゐんにみゆきなどもやあらむと思おもひて、ある殿上人むねうじんの馬うまひかせて参まゐり給へりけるに、院ゐん、「いとをもしろきかな」と仰おほせられて、御覽みづゐぜむとおもほしめしたりけるに、馬具うまぐして参まゐりたる、いみじく感かぜさせ給ひて、御隨身みずいじんの参まゐりたりける、ひとり御供ごともにて、にはかに御幸ごきやうありけるに、北山きたさんの方かたざまにわたらせ給ひければ、その隨身みずいじんふと思おもひよりて、もし小野おのゝ后きさきの山住やまぢみし給ふなどへや、わたらせ給はむずらむと思おもひて、かの宮みやにまうでつかまつるものにやさぶらひけむ、「にはかに忍しのびてみゆきの侍さむらいる。そなたざまにわたらせ給。もしその御わたりなどへ侍さむらいらむずらむ」と告つげきこえければ、かの入道にゅうだうの宮みや、その御用意ごよういありて、法花堂ほふくどうに三昧僧さんまいそう、経きやうしつやかに読よませさせ給ひて、庭にわの上うへいさゝか人の跡踏あとふみみなどもせず。うちいで十具じゅうぐばかりありける。中なより切きりて、袖そで出でさむ用意よういありけるを、「もし入りて御覽みづゐする事も侍さむらいらむ。いと見苦みくるしくや」と女房にようばう申まうけれど、切きりて出でし給けるに、すでにわたらせ給ひて、階はし隠かくの間に御車ごくるまた立てさせ給て、かくとや侍さむらいりけむ。

さやうに侍さむらいりける程ほどに、汗衫あせみ着きたる童わらわふたり、ひとり白しろ金の銚さうし子しに、御酒みさけ入いれてもて参まゐり、いま一人は白しろ金の折敷せしきに、黄こがね金の御ごさかつき据すゑて、大柑子だいかうじ御ごさ

一 かへらせ給ひて―和本、国本「かへら給ひて」。蓬本、前本に拠り補ふ。

かなにて出し給へりければ、御供の殿上人とりて参りて、いとめづらしき御用意に侍りけり。かへらせ給ひて後、「かしこう内を御覧ぜで、かへらせ給ひぬる」などごたち申ければ、「雪見にわたり給ひて、入り給ふ人やはある」とぞ給はせける。月とも雪とも聞えはべり。

さて院より御使ありて、「いと心苦しく思ひやりたてまつるに、うちいでなどこそ、用意してあまた持たせ給へりけれ」とて、美濃の国とかや、御荘の券奉らせ給へりければ、参りつかまつる男女、これかれ望みけれど、みゆき告げきこゑける隨身に、預け賜びけるとぞ聞はべりし。その舍人の名は、信定とかや。殿上人は、なにがしの弁とかや。たしかにも聞侍らざりき。その小野寺などは、なを残りて、三昧行ふ僧も、まだかすかに侍るなり。

后まだをはしましける折、夕立の空もの恐ろしく、鳴る神をどろ／＼しかりけるに、御経読みてゐさせ給へりけるを、神落ちて、御経なども紙の所ばかりは焼けて、文字は残り、御身には露の事もおはしまさゞりける、いと尊く、あさましき事ども聞侍りし。失せ給ける時も、いと尊くて、浄土に参り給へるとぞ申めりし。  
(教通) 大二条殿の君達かくなり。

二 紙―和本「神」。国本に拠り改む。蓬本、前本「かみ」

うすはなざくら

一 御みめ―国本「御みめも」

二 たまひ―国本「たまひて」  
三 太政大臣―国本「太政大臣」

昔は世もあがりて、うち続きすぐれ給へるは申べきならず。またとりわき御能などは別の事にて、近き世の関白には、大殿とて、をぢの大<sup>(教通)</sup>二条殿の次に、一人にをはしましゝこそ、御みめ、心ばへも、末栄へさせ給ふ事も、すぐれてをはしましゝか。その御名は、師実とぞ聞えさせ給ひし。宇治の大政大臣の第二の御子にをはしましき。御母贈従二位藤原の祇子と申しき。四<sup>(皇子)</sup>条の宮と一つ御腹也。大臣の位にて四十二年をはしましき。

承保二年九月、内覧の宣旨かうぶらせ給ひて、十月三日、氏の長者にならせ給。十五日に関白にならせ給き。御年卅四。白河の院の御時也。大將はのかせ給ひて、御隨身猶賜らせ給ひ、牛車の宣旨かうぶらせ給ひ、承暦四年十月に、太政大臣の上につらなり給ふべき宣旨ありき。堀川の院位に即かせ給ひし日、摂政にならせ給ひ、同じき四年、内舍人の隨身給はり給ふ。寛治二年十二月に、大政大臣に也給ふ。同じき四年、摂政の御名はかはりて、関白と申ゝかども、猶司召などの事は、同じ事也き。嘉保元年三月、関白のかせ給ひても、御隨身はもとのやうに使

一 なかのへー和本「なかののへ」。国本「なか野のへ」。蓬本、前本に拠り改む。

二 又京極殿ともー和本、国本なし。蓬本、前本に拠り補ふ。

はせ給ひき。同三年正月、中の重の手車の宣旨ありき。康和三年正月廿九日、御髪をろさせ給。二月十三日、宇治にて失せさせ給ふ。御年六十にをはしましき。

大殿と申、又後の宇治の入道殿とも、又京極殿とも申なるべし。

寛治八年、高陽院にて哥合せさせ給ひしに、時の哥詠みども、昔にも恥ぢぬおほみ遊なるべし。筑前のこの「うすはなざくら」の哥の、匡房の中納言の「白雲」と見ゆるにしろし」という哥に負け侍りしを、殿より、

白雲は立ち隠せどもくれなゐのうすはなざくら心にぞしむ

と仰せられつかはしたりしかば、筑前のご、御返し奉る。

白雲はさも立ゝば立てくれなひのいまひとしほゝ君しそむれば

と申したりしなど、いとやさしくこそ侍しか。御心ばへなどの、なつかしくをはしましけるにこそ。

御鞠御覽せさせ給ひけるに、守長淡路守といひしを、ことのほかにほめさせ給ひける程に、信濃守行綱も、心には劣らず思ひて、うらやましくねたく思ひけるに、をほみ足すまさせ給ひけるに、抓みたてまつるやうに度くしければ、「いかにかくは」と仰せられければ、「鞠も見知らぬはぎの」といひつゝ洗ひまいらするを、「行綱もよし」とかや仰せられける。御返事にと、こそ〴〵撫でたてまつりける、さるもとの猿楽なれども、ものこちなき衆には、さもえ申さじかしと

をばえて。

また守長のぬし、花盛りに、鞠持たせてかゝりへまかりけるに、行綱誘ひにやりたりければ、御物忌に籠りて、人もなければ、「系参らじ」と返事しけるを聞ゝつけさせ給て、「たゞ行け」とて、薄色の指貫はりたる、香の染布など、納殿より取り出させ給ひて、にはかに縫はせて、御鞠花の枝につけて、御厩の御馬に、うつし置きて、出したてゝつかはしければ、今日こそこのついでに、女に見えめと思て、日頃はあはぬ女の家いよの棧敷に馬うち寄せて、語らふ程に、御馬にはかに跳ねをとして、前の堀にうち入れてけり。頭くだし残る所なく、土がたに浴み也たりける、女家に入れて、洗ひ上げて、いとをしさにこそあひにけれ。御馬は走りて、御厩に立ちにけり。あやしきこしめしける程に、居飼追いつきて、かくと申ければ、いかにあさましくをかしくおぼしめしけむ。さてしばしは、えさし出でもせざりけるとぞ、聞え侍し。

なみのうへのさかづき

この大殿（御寮）の御末広くをはしますさまは、男君達世に知らず多くおはしまして、

## 一 御子―国本「御こ」

男僧もあまたをはしますに、御女みづめぞおはしますまぬ。(順通)六条の右の大臣の御女みづめをぞ、殿との、御子みことて、白河院の東宮と申まを、時ときより、宮みやす所に奉たもつり給たまへりし。賢子の中宮とて、堀河の院の御母はは、宮みやく多くうみたてまつり給たまへりき。その御事は、御かどの御ついでに申侍ぬ。

## 二 にて―国本「に」

さて一の人ひとつがせ給たまへる、太郎たろう二にておはしまし、後二条関白をとのの御流ながれこそは、今いまも今いまもつがせ給たまふめれ。その御名なは、関白内大臣師通もろみちと申まをき。御母はは土御門の右の大臣師房もろふさと申まを、御女みづめを山の井の大納言信家のぶけと申まを、が子こにしたてまつり給たまへりし御腹はら也。永保三年正月廿六日、内大臣になり給。御年廿一。嘉保元年三月九日、関白にならせ給。御年卅三。その三年正月、従一位にのぼらせ給。左大臣の上につらなるべき宣旨かうぶらせ給。承德三年六月廿八日、御年卅八、失うせさせ給たまひにき。大臣の位にて十七年をはしましき。

このおと、御心みこころばへたけく、姿すがたも御能のりも、すぐれてなむをはしましける。御即位などにや侍まをけむ、匡房の中納言(師通)、この殿の御有様ありさまをほめたてまつりて、「あはれ、これを唐土もうこしの人に見みせてばや。一ノ人としてさし出だしたてまつりたらむに、いかにほめきこゑむ」などぞ、目のあたり申ける。玄上げんじやうといふ琵琶びわを弾ひき給たまひければ、大きな琵琶びわの塵ちやうばかりぞ見え侍ける。手てなむどもよく書か、せ給たまひけり。

「孫むすこの殿とのなどばかりは、おはしますさずやあらむ手書てがきにをはしましき」とぞ、定信さだのぶ

## 三 元年―国本「元季」

の君は人に語られける。三月三日、曲水の宴といふ事、六条殿にてこのをとゞせさせ給と聞え侍き。唐人のみぎはに並みゐて、鸚鵡のさかづき浮べて、桃花の宴とてする事を、東三条にて御堂のをとゞせさせ給ひき。その古き跡を尋ねさせ給ふなるべし。この度の詩の序は、孝言といひしぞ書きけると聞え侍し。四十にだに足らせ給はぬ、おしかるべき御よはひ也。限りある御命と申ながら、御にき身のほど、人の申侍しは、常の事ゝ申ながら、山の大衆の、をどろくしく申けるもむつかしく、世中心よからぬつもりにもやありけむと申侍き。

### 字ちのかはせ

後の二条殿ゝ御つぎには、近く富家殿とてをはしましゝ、入道おとゞ祖父の大殿、御子にし申させ給と聞え給き。御母大宮の右の大官の御女なり。このをとゞの御名は、忠実とぞ聞え給し。康和元年閏九月廿八日、内覧の宣旨かぶらせ給き。御年廿二。同二年七月十七日、右大臣にならせ給き。大將もなをかけさせ給へりき。天承三年十二月、大政大臣になり給き。

はじめは宇治の川瀬波しづかにて、白河の水へだてなくをはしましゝかば、富

一 二十日―国本〔十二日〕

家殿造り給て、院(白河)わたらせ給けるに、宇治川にあそびの船、歌うたはせて、波に浮びなどして、いとをもしろく遊ばせ給ひけり。盛定といひし男、歌うたひ、その時句ときこうなどいひし、船に乗り具して、歌つかまつりけるとかや。その度、ひとくくに歌詠うたよませさせ給はざりけるをぞ、くちをしくなど申人もありける。かやうの所にわたらせ給て、何となきをゝみ遊も、古き跡にも似ぬ心なるべし。

かやうにて過ぎさせ給ひしに、保安元年十一月二十日(一)にやありけむ、夜をこめて院よりとて、堀川(後房)のおとこにはかに参り給へ」と御使ありて、をと内覧とむべき由、仰せくだし給けり、白河院失せさせ給ひて、鳥羽の院世しらせ給し時にぞ、富家より出でさせ給ひし。待賢門院をきま幼くをはしましゝを、白河の院養ひたてまつり給ひて、鳥羽の院位にをはしましゝ、女御に奉り給程に、入道太政大臣(孝安)の御女、女御に奉らむとせさせ給と聞ゆるによりて、関白うちこめ申させ給ふとぞ聞え侍し。

白河の院の御世に、后、宮す所などかくれ給て、さるかたぐもをはせざりしに、白河殿と聞え給人をはしき。その人の、待賢門院を養ひたてまつり給て、院も御女とて、もてなしきこゑさせ給ひしなり。その白河殿、あさましき御宿世すくせをはしける人なるべし。宣旨などは下らざりけれども、世の人は、祇御の女御とぞ申めりし。もとよりかの院の、内の御局つばねわたりにおはしける、はつかに御覧じつ



けさせ給て、三千の寵愛ひとりのみなりけり。たゞの人にはをはせざるべし。賀茂の女御と世にはいひて、うれしき、いはひをとて、姉をとうと後に続きて聞えしかども、それはかの社のつかさ、重助が女どもにて、女房に参りたりしかば、御目近よりしを、これははつかに御覧じつけられ給て、それらがやうにはなくて、これはことのほかに重きさまに聞え給き。

かの御沙汰にて、その女院もならびなくおはしましき。代々の国母にをはしま

しければ、ことはりとは申ながら、いかばかりかは榮へさせ給ひし。幼くては、

白河の院の御ふところに御足さし入れて、昼も御殿籠りたれば、殿など参らせ給たるも、「ここにすちなき事の侍て、え水から申さず」などいらへてぞおはしもしける。をとなになり給ても、類なく聞え侍き。

白河の院かくれさせ給ひてこそ、本意のごとく、殿の姫君奉り給ひて、女御の宣旨かうぶり給ふ。皇后宮に立ち給後は、院号聞えさせ給ひて、高陽院と申き。

院の後参り給へるが、女御の宣旨、これやはじめて侍けむ。后の宮のはじめつかたも、宇治の御幸ありて、皇后宮ひき続きて入らせ給し、うるはしき行啓のやうには侍らで、みな狩衣に風流などして、女房の車いろくに、紅葉のにほひ出しなどして、雑仕などもみな車に乗りてなむ侍し。さきく白河の院の御時などは、雑仕はみな馬に乗りて、透笠、たゞの笠などきて、いくらともなくこそ続きて侍

一 これは車にて、和本、国本なし。蓬本、前本に廻り桶ふ。

しか。これは車にて、これぞはじめて侍し。後の宮には、冠にてこそ、常はひとく侍ふを、これは布衣になされてなむ侍し。

この富家のをとゞは御みめもふとり、きよらに、御声いとうつくしうて、年老いさせ給まで、細きよらにおはしましき。朗詠などゑならずさせ給。また箏の琴は、すべてならびなくをはしましき。歌はさまでも聞ゑさせ給はざりしに、宇治に籠りゑさせ給えりし時ぞ、

佐保川の流れたえせぬ身なれどもうき瀬にあひて沈みぬるかな  
と詠ませ給ひけるとかや。

書の沙汰などは、常にせさせ給とも聞ゑざりしかども、天台の止観とかいふ書を、皇覺といひて、杉生の法橋といひしに、本書ばかりは伝へさせ給ひてけり。日毎に参りて候ければ、まぎらはしき日も、夜ふけてなど思出させ給ひつゝ、年をわたりてぞ、読み果てさせ給ひける。真言をも好み沙汰せさせ給と聞えき。年寄らせ給ひて、御足のかなはせ給はざりしかば、わら座に乘らせ給ひ、御輿などにてぞ、院にも参り給ける。御髪おろさせ給ひて、奈良にても、山にても、御受戒せさせ給ひき。御名は円理とぞ聞ゑさせ給ひし。いづれの度も、院の御供にぞ、御受戒はせさせ給ひける。

御子の左の大臣の事をはせしゆかりに、奈良におはしましゝが、宇治殿へはえ

入らせ給はでをはしましゝを、法性寺殿に御消息ありければ、「とく京の方へ入らせ給へ」と、御返に申させ給えりければ、よろこび給ひて、年頃御中もなをらせ給ひて、播磨とて、ときめかし給ひし人の、宮この北に、雲林院か、知足院かに侍なる堂にぞをはしまして、失せさせ給ひし。その播磨とか聞えし人は、世に類なきさいわい人になむをはすめる。白河殿の、たゞ同じさまなる事のはじめにやをはしけむ。後には女院のはした物などいふことになり、次に女房になりなどしてをはすとぞ聞えられし、今にかしこき人にて、法性寺殿、三井寺の僧都の君養ひたてまつりて、昔にかはらぬ有様にてなむ、聞え侍なる。

かの白河殿とて、祇園にをはせしは、ゆかりまでさがたく、院にをほしめされてをはせしに、はじめつきた、平氏の正盛といひし、参りつかうまつれりければ、隠岐守などいひける、後にはしかるべき国々のつかさなどなりたりけれど、猶下北面の人にて、その子よりぞ、院の殿上人にて、四位五位の舞人なむどしけれども、内の殿上はえせざりけるに、五節奉りける年、受領いまひとり、為盛、為業などいひしが父なりしが、殿上許さりたりしかば、忠盛、

思きや雲井の月をよそに見て心の闇にまよふべしとはとぞ聞えし。

その殿上許さりたりしは、院の御乳母子の知綱といひしが孫なれば、いとをし

一 いかゞー和本、国本なし。蓬本、前本に  
廻り補ふ。

二 ながすけー国本「なりすけ」

三 たてまつれー和本「たてまれ」。国本、蓬  
本、前本に廻り補ふ。

四 をぼゆー国本「をぼゆる」  
五 たわぶれられー和本「たわぶられ」。国本、  
蓬本、前本に廻り補ふ。

みあるべき上に、近くつかはせ給ふ女房の心ばへも、ありがたくおぼしめされて  
ありしが、子などあまたうみたりければ、殿上させむと思ほしめしながら、弁  
近衛のすけなどにもあらで、たちまちに殿上せむもいかゞとおぼしめして、宇佐  
の使につかはしけるを、鳥羽の院の新院と申てをはしましゝ程に、はじめは長輔  
と聞えし、「兵衛のすけをつかはさむ」と申させ給ければ、かの御方に申させ給  
ふ事さりがたくて、「さらば為志は、今年の五節を奉れ」とぞ、殿上許させ給  
ける。

あまりふとられたりしかばにや、口かはく病して、十年ばかり籠りみながら、  
四位の正下までのぼれりしも、三条烏丸の造られたりし度は、「男ゝそ籠りたれ  
ども、女の宮仕えをすれば、加階は許したふ」と仰せらるとて、頭頼の中納言は  
「大原とゝをぼゆ」とぞ、よろこびいふとて、たわぶれられける。左京のかみ頭  
輔のいはれけるは、「大夫の大工なるべし。二条の大宮造りても、又その御堂造  
りても、又院の御所造りても、加階する」と聞えしにあはせて、木工の権頭をぞ、  
兼官にはせられたりし。貫之がつかさなればとて、なれりけるとかや。

その人まだ幼き程なりけるに、白河の法皇の、六位の殿上したりけるに、「そ  
れがし」と召しけるを、人の召しつぎければ、「藤原のこと正になるは、あしき  
事なり」とて、もとの姓になるべきよし、仰せられけるも、猶昔の御いとをしみ

- 一 ども―国本「どん」  
 二 むねあきう―国本「むね」に「もり」と  
 傍書。

- 三 て―国本なし。  
 四 なる―国本「な」

- 五 はうきのかみ―国本「は、きのかみ」

残りけるとぞ聞えし。親の入道の、六条の院にをくれまいらせて、まだ若くて、廿一とかにて、頭をろさすとて、心ざし深よりければ、人の子になしたるかいありて、太郎に立ちたるなど聞えしぞかし。為章といひし人も、もとは、ためのりといひけるを、白河の院の、「ためあきら」と召したりけるより、かはりたるとかや。祖父の高大式は、成章といひしかども、このごろその末は、宗章などいゑるは、召しけるよりあらたまりたるとかや。「かの大式も、あきらとやいひけむ」と申人あれど、いかでか村上の御門ノ御名をつぐやうはあらむ。「さらが成章ともやいひけむ」と申も、今の世に、いかでか先祖の名をつぐ物侍らむな。やすき事なれども、論義めかしくぞ侍。

白河の院は、はかなき事も、仰せらるゝ事のかくぞとまりける。また御心のさとくをはしまして、時の程におぼしきためけるは、信濃、惟明といひしが、式部丞の藏人なりし時、女房の局の前にて物など申けるに、殿参らせ給ふとて、庭にをりてゐければ、女房参りて、「関白の参り候なる」と申ければ、「関白ならば、さきこそ追はめ。をこの物は。兄の知綱が参るをいふにこそあらめ」と仰せられけるに、伯耆守の参られたりつとぞ、女房語られける。

かの雲井の月詠めりし忠盛は、中々に院にかくれさせ給ひて後にぞ、いつしか殿上許されたりし。その時、殿上の硯のはこに、書きつけられたる歌ありけりと

一 くだられし―國本「くだられたりし」

二 くちをしきて―和本「くちをして」。國本、蓬本、前本に拠り楠ふ。

三 うたひて―和本「うたてひ」。國本、蓬本、前本に拠り改む。

聞えしは、「源なる雲の上はなにさへのぼるなりけり」とかや。忘れておぼえ侍らず。山城と伊勢と、源平氏とを対したるやうにぞ聞えし。同じ折に、殿上したりける人のことなるべし。その平氏の子ども、ふたりならびて、藏人になりなせしも、白河の院の御時は、清盛非藏人などいひて、院の六位の殿上して、うるはしくはなさせ給はで、かうぶり給はで、兵衛のすけになりたりしも、藏人はなをかたき事、聞え侍き。

かの宇佐の使にくだられし兵衛（長瀬）のすけは、有賢と聞えし人の婿に也しが、心ざしやなかりけむ、離れにしかば、いとくちをしきて、猶御氣色にて、二度までとりよせたりしかども、ゑ住み果てざりしかば、世に歌にさえうたひてありしを。院の御乳母子の帥の子なれども、二度まで床さりたるあやまりにや、国のつかさなりしをもとらせ給て、ふるさとのせうとに、天の橋立もわたりにしは、かの有賢平氏の婿になれりし、いとをしみの残れるなるべし。そのふるさに住みわたる人聞えしも、世中に詠める歌など聞え侍き。歌は忘れておぼえ侍らず。

一 ふぢなみの中第五―和、日本なし。目録に拠り補ふ。

# ふぢなみの中第五

## みかさの松

二 御むすめ―国本「御むすめ」

近くをはしまし、<sup>(忠通)</sup>法性寺のをとゞは、<sup>(忠実)</sup>冨家の入道をとゞの御子にをはします。  
御母六条の右の大臣の御女に、<sup>(前房)</sup>仁和寺の御室と申、一つはらからにをはしまし、  
かば、その北の政所、昔は白川院にも参り給けるにこそ、仁和寺の法親王をば、  
師子王の宮とぞ世には申。御母の童名にやははしましけむ、また宮の童名にや  
をはすらむ。さてこのをとゞ、<sup>(忠通)</sup>仁和寺の宮とは親しく申かはさせ給き。

冨家のおとゞの北の方にては、<sup>(後房)</sup>堀川の左の大臣の御女をはせしかど、それは御  
子をはしまさで、くちをしき事もありけるにやよりけむ、<sup>(白西)</sup>後ほうとくなり給て、  
その六条の大臣の御女の、京極の北の政所に侍ひ給けるお、はじめは院に召して、  
宮生みたてまつり給へりける程に、<sup>(忠通)</sup>冨家のをとゞ若くをはしけるに、はつかにの  
ぞきて見給へる事ありけるより、御病になりて、なやみ給けるを、「命も絶へぬ

三 たてまつり―和「たてまり」。国本、蓬本、前本に拠り補ふ。

べくおぼゆる事の侍れども、心になふべきならねば、世にながらへ侍らむ事も  
 え侍るまじ。また心のまゝに侍ば、いかなる重き罪も、かうぶる身になり侍りぬ  
 べし。いづれにてかよく侍らむ」など、京極(宇通相母)の北の方に申給けるにや、いかにも  
 御命(いのち)をはしまさむ事に勝る事はあるまじければとて、院に申させ給たりければ、  
 許し給はらせ給ひたりけるとかや。ひがごとにや侍らむ、人の伝へ語り侍しなり。  
 さて住み給ける程に、まづは姫君生み給、又このをとゝをも生みたてまつり給て、  
 後までうるはしく住み給けるとぞうけ給し。

このおとゝ、保安二年の年、関白にならせ給し。御年廿五にぞをはしまし。  
 同じ四年正月に、讃岐(讃岐)の御門位に即かせ給しかば、摂政と申き。帝大人にならせ  
 給て、関白と申ゝ程に、近衛の御門位に即かせ給しかば、又摂政にならせ給き。

久寿二年七月、近衛の帝(みかど)かくれさせ給て、此一院位に即かせ給しにも、又関白に  
 ならせ給しかば、四代の帝の関白にて、ふたゝび摂政と申しき。昔もいと類なき  
 事にこそ侍けめ。太政大臣にもふたたびなり給へりし、いとありがたく侍き。藤  
 氏の長者さまたげられさせ給へりしも、左の大臣の事にあひ給にしかば、保元  
 年七月に、さらにかへりならせ給にき。同じ三年八月十六日に、二条の帝位に即

一に「関白なし」。

二「をしましゝに「和太」をしましゝに」。

本、蓬本、前本に拠り補ふ。

国

かせ給ひし時、今の殿(いま)御兄(みせ)をはしましゝ、右の大いまうちぎみに、関白讓き  
 こえさせ給て、大殿とてをはしましゝに、応保二年に御髪(みかみ)おろさせ給てき。御年



六十六とぞうけ給はりし。長寛二年二月十九日、六十八と聞えさせ給し年かくれさせ給にき。

昔まだ幼くをはしまし、時、春日の祭の使させ給へりしに、内侍周防のご参りて、行事の弁為隆に申をくりける、

いかばかり神もうれしとみかさ山二葉の松の千代のけしきを

と。その返しは劣りたりけるにや、聞え侍らざりき。祈りたてまつりたるしありて、めでたく久しくせさせ給てき。法性寺の御堂御所などつくりて、貞信公の御堂のかたはらに住ませ給しかば、法性寺殿とぞ申める。

昔より摂政関白統きてをはしませど、身の御才は類なくをはしましき。才学も高くをはしましける上に、詩など作らせ給ことは、いにしへの宮、帥殿などにも

一 て、さうのことをむねと御遊などにもひかせ給―和本、国本なし。運本に拠り補ふ。前本は「事のことをむねとは御遊なんともひかせ給」

劣らせ給はずやはしましけむ。歌詠ませ給事も、心高く昔のあとをねがひ給たるさまなりけり。管絃のかた、心にしめさせ給て、箏の琴をむねと御遊などにも弾かせ給とぞ聞へ侍し。父をとどばかりはをはしまさずやありけむ。また手書、せ給事は、昔の上手にも恥ぢずをはしましけり、真名も仮名も、このもしく今めかしき方さへそひて、すぐれてをはしましき。内裏の額ども、古きをばうつし、失せたるをば、さらに書、せ給とぞうけ給りし。院、宮の御堂、御所などの色紙形、いかばかりかは多く書、せ給し。御願よりはじめて、寺々の額など、数知ら

ず書ゝせ給き。横川の花台院などいふ古き所の額も、迎へ講すゝめける聖の申たるとて、書ゝせ給へりとぞ、山の僧は申ゝ。

又人の仁和寺とかより、額申給はりたりければ、書ゝせ給へりける程に、奥のえびすの基衡とかいふが寺なりけりと聞かせ給て、陸奥へ取り返しにつかはしたりけるを、返したてまつらじとしけれども、妻の心かしこくやありけむ、「奉らざらむは、しれごとなり」と諫めければ、返したてまつりけるに、御厩舎人とか、つかはしたる御使の心やたけかりけむ、三にうち割りてぞもてのぼりける。柱をにらみけむにも、劣らぬ御使なるべし。えびすまでも靡きたてまつりけるにこそ。またいづれの御願とかの絵に、飯室の僧正たうとくをはする事かくとて、冷泉院の御太刀拔かせ給へるに、僧正逃げ給へるあとに、とゞまれる三衣宮のもとにて、帝物ゝ怪うたせ給たるところの色紙形、「これはえかゝじ」とて、文字も書ゝれで、まだに侍なり。御手ならびなく書ゝせ給ども、さやうの御用意ありがたき事ぞかし。

又幼くをはしましゝ時より、歌合など朝夕のおほみ遊にて、基俊、俊頼などいふ、時の歌詠みどもに、人の名隠して判ぜさせなどせさせ給事絶へざりけり。御歌多く聞ゝ侍し中に、

わたのはら漕ぎ出でゝ見ればひさかたの雲井にまよふ沖つ白浪

など詠ませ給へる御歌は、人丸が、「島がくれゆく舟をしぞ思ふ」など詠めるにも、恥ぢずやあらむとぞ人は申侍し。

吉野山みねの桜や咲きぬらむ麗の里に匂ふ春風

など詠ませ給へるも、心も言葉も妙にして、金玉集などに撰びのせられたる歌のつらになむ聞え侍る。

- 一 こゝろばへー和本、国本「こゝろばへ」。蓬本、前本に廻り補ふ。
- 二 しー国本「侍」
- 三 てー国本なし。

唐の文作らせ給事もかくぞありける。されば文の心ばへ知らせ給事、深くなむをはしましける。白河院にも三巻の詩撰びて奉り給ひ、基俊の君にも、唐、大和のをかしき言の葉ども、撰び番はせさせ給けり。かやうの事ども多くなむ侍る。また作らせ給へる唐の言の葉ども、御集とて、唐の白氏の文集などのごとくに、好む人もてあそぶとぞうけ給はる。

かく才などもをはしまして、日記なども、鏡をかけてをはしませば、左大弁為隆といひし宰相は、「日本はゆゝしく、てづなる国かな。前の関白を一人の人に(忠実)て、このをとゞ、花(有仁)齒のをとゞ二人、若き大臣のよく仕へぬべきをうちかへつゝ、公事もつとめさせて、此殿一人の人なれば、いたづらに足引き入れてゐ給へるこそをしけれ」とぞ、言はれけるとなむ聞え侍し。

## きく の つゆ

一 こころ一本、国本こころ。蓬本、前本に廻り補ふ。

法門の方は、また底をきはめさせ給て、山、三井寺、東大寺、山階寺などの智慧ある僧綱、大徳ども、内裏に御読経など勤むる折も、御簾のうちにて、深き心たづねさせ給、わが殿にて、八講など行はせ給折節の事につけつゝ、経論の深き事、ひろき心、汲みつくさせ給はぬ事なくなむをはしける。御仏供養せさせ給ける御道師に、菊の枝にさして賜はせける、

二 ころ一本、国本なし。蓬本、前本に廻り補ふ。

たぐひなき御法をきくの花なればつもれる罪は露も残らじ  
などぞ聞え侍し。

御心ばへも、すぎぐしくのみをはししながら、わづらはしくとりがたき御心にて、ひがくしき事はをしまさで、何事も驚ろかぬやうにぞおはしませ給。されば、世にも似させ給はで、いづかたにも、うときやうに聞えさせ給て、君達なども、心もとなく聞えさせ給しかども、世中みだれ出で来て後、もとのやうに氏の長者にもかへりならせ給。男君たちも位高くならせ給て、法師におはしますも、僧正どもになり給、ところぐの長吏もせさせ給へり。女御、后、かた

くをはしまして、よろづあるべき事みなをはしましき。昔時にあはせ給たる一人に劣らせ給事なかりき。馬を失ひて、なげかざりけむ翁、どのやうにてをはしまし、けにや、苦しき世を過させ給て後、かく栄えさせ給へり。作らせ給たる御詩とて、人の申は、

官禄身にあまりて世を照すといへども、素閑性にうけて権をあらそはずとかや作らせ給へるも、其心なるべし。

さやうの御心にや、近衛の帝の悲しみのあまりにや、関白にこの度ならせ給はじめに、かの帝、船岡にをさめたてまつりし御供せさせ給へりし、かちよりをはしますさまにて、御興の綱を長くなされたりしにや、ひきにしなしてかゝれど、末ざまはをはしましける、いとあはれに悲しくなむ侍りける。

二条院位に即かせ給し時、関白おば御子に譲り申させ給て、大殿とてをはしまし、程に、御髪をろさせ給て、御名は円観とぞつかせ給ける。このをとゞ失せさせ給程近くなりて、法性寺殿、桂殿など、御覧じめぐらせ給て、処のありさまを、さまぐの文ども作らせ給て、盛光、惟俊などいふ学生どもに賜ひて、和して奉り、判ぜさせなどせさせ給へり。

後の世にも、仏道ならせ給へるにや、九品の蓮の上にをはしますなど、夢にも人の見たてまつりたるとかや。式部大輔永範、夢に見たてまつりたるとて、詩三

一 わし國本「和し」

二 し國本「侍」

一 一と和本なし。国本、蓬本、前本に拠り補ふ。

二 都率一と和本、国本なし。蓬本、前本に拠り補ふ。

三 一と和本なし。国本、蓬本、前本に拠り補ふ。

つ作りて賜はせたる中に、

漢月天にうるはしくして事となりといへども、忘るゝ事なかれ昔の日文をも

てあそびしことを

と作らせ給へりけると見て、和して奉らむとしける程に、驚きにけり。夢のうちには、都率の内院にをしますとおぼしかりきとぞ、和して奉れる文には書れ侍る。

# ふぢのはつはな

摂政前（基実）の左大臣とて、近くをはしましゝは、法性寺（忠通）のをとゝの太郎にぞをはし

ましゝ。御母從二位源の信子と申とぞ。国信と申ゝ中納言の御女にぞをはずなる。

このをとゝ御名は基実とぞ申とうけ給りし。いづれの御時の例とか、左衛門督など聞えさせ給しに、其後、大納言、右大臣などにならせ給へりき。折節あき侍らざりけるにや、大將にはならせ給はざりしかとよ。二条の帝位に即かせ給しに、父をとゝの譲りにて、保元三年八月十六日、関白になり給。御年十五とぞ聞えさせ給し。昔よりかくきびわにてなり給える一の人、これをはじめにておはします

一  
こぞ―国本なし。

らむ。唐国（からくに）、甘羅といひける人は、十二にてぞ大臣になり給ける。世の人幼し（おきな）とも申さゞりけり。人によるべきにこそはべめれ。永暦元年八月十一日、左大臣にのぼり給。永万年六月（二冬）、帝（みかど）位（みくら）みこに譲りたてまつらせ給し日、摂政にならせ給。同二年七月廿六日、御年廿四にてかくれさせ給ひにき。大臣の位にて十年をはしましき。

このおとゞ御みめも肥（こ）へ、きよらにをはしまし、また手なども昔（むかし）のあとつぎ申させ給へりけり。いとめでたく聞（き）ゝたてまつりし程に、夢（ゆめ）のやうにてかくれさせ給にし、いと悲（かな）しく。去年（こぞ）は二条の帝（みかど）、今年（ことし）はこの殿（みや）、御事、折節心あらむ人は思（おも）ひ知りぬべき世なるべし。贈太政大臣正一位など、後に添（そ）えたてまつられ侍とぞ聞（き）え給き。昨日（けふ）今日のち（け）こにおはしますを、昔物語（むかしものがたり）うけ給はるやうにおぼえて、いとあはれに悲（かな）しく侍り。六条の摂政と申なるべし、また中の摂政殿と申人も侍り。大郎におはせしかど、中の関白と申しやうなるべし。

この次（つぎ）の一の人には、今の摂政おとゞをはします。御母、これも国信の中納言の三の君にぞおはすなる。御名は国子と聞（き）え給。三位し給えりとぞ。一人藤氏の御母の多くは源氏におはします。しかるべき事にぞはべめれ。宇治殿（宇治）、二条殿（教通）の御母は、一条（雅臣）の左大臣（倫子）の御女（みむすめ）、後の二条関白殿（前通）は、土御門（前通）の右の大臣（藤子）の御女（みむすめ）、法性寺殿（忠通）は、六条（頼房）の右大臣（基実）、この殿ふたところ、源中納言（国信）の姫君（ひめぎみ）ふたところ（国子）にを

はしませば、藤氏は一の人にて、源氏は御母方<sup>はつかた</sup>やむごとなし。御流れ、かたぐ  
あらまほしくも侍かな。今の世<sup>よ</sup>の事、あたらしく申さでも侍べけれども、事<sup>こと</sup>のつ  
ゞきなれば、申はべるになむ。

(基所)  
このをとゞ、永暦元年八月十一日、内大臣にならせ給て、同月、左大将かけさ

せ給き。同じ二年九月十三日、大臣にのぼらせ給て、永万二年七月廿七日、摂政  
にならせ給。御年廿二にをはしましき。やがて藤氏の長者にならせ給き。仁安三

年二月、当今<sup>(両倉)</sup>位に即かせ給しに、また摂政にならせ給。いとやむごとなくをはし

ましける御榮<sup>きか</sup>へなり、御兄<sup>あに</sup>の摂政殿も、宇治<sup>(頼長)</sup>の左の大臣も、その子<sup>(兼長)</sup>の大将殿も、

長者<sup>ちやう</sup>つぎ給て久しくをはしまさば、一の人の御子<sup>ごこ</sup>なりとも、大臣にこそならせ給

とも、必ずしも家<sup>いへ</sup>のあとつがせ給事かたきを、この御報<sup>ごほう</sup>にや押<sup>お</sup>されさせ給けむ、

みな夢<sup>ゆめ</sup>になりて、かくたちまちに摂政にならせ給、藤氏の長者にてをはします。

三笠<sup>みかさ</sup>の山の朝日<sup>あさひ</sup>は、かねて照<sup>くら</sup>させ給けむ。

御身の才<sup>さい</sup>も、幼<sup>おきな</sup>くよりすぐれてをはしますとて、内宴<sup>うちえん</sup>の詩なども、兄<sup>あに</sup>をさしを

きたてまつりて、その筵<sup>むしろ</sup>にまじはらせ給き。御心ばへもあるべかし、まだ若<sup>わか</sup>く

をはしますに、公事<sup>きこと</sup>をもよく行<sup>い</sup>はせ給、をとなくをはしますなり。閑院<sup>かんいん</sup>ほどな

く造<sup>つく</sup>り出<sup>いだ</sup>させ給て、上達部<sup>じやうたつ</sup>、殿上人<sup>でんじん</sup>など、詩作<sup>しそく</sup>り、歌奉<sup>うたほう</sup>りなどして、昔<sup>むかし</sup>の一の人

の御ありさまに、いつしかをはします。心ある人、いかばかりかはほめ夕てまつ

一  
補ふ。せー和本、国本なし。蓬本、前本に拠り



一  
は―和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。

らるらむ。帝に貸したてまつらせ給て、内裏になりなどし侍らむも、世のために  
いとほえ／＼しき事にこそはべなれ、行末思ひやられさせ給て、しかるべきこと  
ゝ、世のため頼もしくこそうけ給はれ。この二人の摂政殿たち、みな御子をは  
しますなれば、藤波のあとタへず、佐保川の流れ久しかるべき御ありさまなるべ  
し。

# は ま ち ど り

この近くをはしましゝ入道太政大臣、御心の色めきてをはしましゝかば、とき  
めき給かた／＼多くて、北の方は、きびしくものし給ひしかども、腹／＼に君達  
多くをはしましき。奈良の僧正、三井寺の大僧正、此二人、男にをはしまさば、  
今は老い給へる上達部にてをはすべきを、北の方の御腹に、男君たちもをはしま  
さで、女院ばかり持ちたてまつり給へるにつけても、おほかたもそねましき御心  
の深くをはしましけるにや、御房たちの幼くをはしましゝより、をとなまで、近  
くも寄せ申させ給はず。いなごなどいふ虫の心を、すこし持たせ給はゞ、よく侍  
らまし。后などはかの虫のやうに、ねたむ心なければ、御子も、孫も、多く出で

一、しー和本、国本「し」。板本に拠り補ふ。

来給とこそ申なれ。関白摂政の北の方（かた）も、同じ事にぞをはすべかなめる。されど年（とし）寄りては、思（おも）ほし直（な）したりしにや。

君達外腹なれど、殿のうちに多くをはしましき。源中納言（げんちゅうなごん）の姫君たち二人に、

一人のは故摂政殿、いま一人のは当時の殿（きよとき）、また山の法印（はふしん）の御房（ごぼう）とてをはしまし

き。また奈良に、僧都（そうどう）とてをはしますなり。また女房（にようぼう）の御腹（ごはら）に、右の大臣殿（だいじん）、三

二 三位中将殿—国本「三位の中將殿」

井寺のあや僧都（そうどう）の君（きみ）、また三位（さん）中将殿（ちゅうじょう）など申ておはしますなり。また山（やま）の法眼（はふがん）な

ど聞え給。また末（すゑ）つ方（かた）にときめかせ給ひし腹（はら）にをはする、山（やま）の法眼（はふがん）など申て聞え

給。

女君（むすめ）たちは、女院（によう）、中宮（ちゅうぐう）などをはします。讃岐（さぬき）の御時（ごとき）の中宮聖子（ちゅうぐうせいし）と申は、北（きた）の

政所の生（う）みたてまつり給へるぞかし。その御母（ごはは）、宗通（むねとお）の大納言（だいなごん）の御女（みづめ）、頭季（あきすえ）の修

理大夫（りだうふ）の女の腹（はら）の御女（みづめ）を、法性寺殿（はうしやうじだん）に奉り給へりき。此女院（このによう）、讃岐（さぬき）の御門位（ごもんゐ）にを

はしまし、父（ちち）のをとゞも、時の関白（かんぱく）にをはし、かば、宮（みや）の御方（ごかた）、おほみ遊（あそび）つねに

せさせ給ひ、折（を）くにつけつゝ、昔（むかし）おぼしめし出づる事（こと）も、いかに多く侍らむ。

卯月（うづき）のころ、帝（みかど）、宮（みや）の御方（ごかた）に、小弓（こゆみ）のおほみ遊（あそび）に、殿上人（だんなり）方（かた）ちて、賭物（かひもの）など

出され侍けるに、扇紙（あふぎ）を草子（くさうし）の形（かたち）に作り、歌書（うたがき）きつけられたりける。その歌は、

これを見て思（おも）ひも出（い）でよ浜千鳥（はまぢどり）あとなきあとをたづねけりとは

と侍ける。返し、公行（こうぎやう）の宰相（さいしやう）の左中弁（さちゅうべん）とてをはせしぞ、し給へりける。

四 つくり—国本「つくりて」

浜千鳥はまちどりあとなきあを思おもひ出で、たづねけりとも今日けふこそは知れ

とぞうけ給し。歌は殿うき、詠（定通）ませ給たるにや侍さむらひけむ。拾遺抄に侍小野（実朝）宮のをとゞ  
のふる事思出いでられて、いとやさしくこそ聞きえ侍し。

### つかひあはせ

かの帝（崇徳）みかど、位をりさせ給しかば、皇太后宮（聖子）にあがらせ給へりき。近衛の御門の御

時も、母后にて、内になををはしましき。中宮と申まを時、近衛（このま）の帝（みかど）の春宮にをは  
しましゝに、二宮の女房たち、つねに聞きこえかはして、をかしき事ども侍けるに、  
文（よみ）の使つかひ、いかなるものに侍りけるにか、わろしとて、はじめは藏人を東宮よりや  
られたりければ、返事（かへり）、また少将（せうしやう）為通して送りたりけり。其返事、東宮より公通  
の少将持もちてをはしたりけり。

- 一  
の—和本、国本なし。蓬本、前本に擬り  
袖ふ。
- 二  
の—和本なし。国本、蓬本、前本に擬り  
袖ふ。

かやうにする程ほどに、左の大ひだり）臣（みこと）、中宮の女房の文持（よも）ちてわたり給ひたるに、春宮  
の女房なげきになりて、宮司（みやつかさ）などゝ、「いかゞせむずる」と、さまぐものなげ  
きにしあへるに、「傳（つた）の殿のをはしましたるは、この宮人（みやび）にをはしませば、こと  
づけにてこそあれ」などいへども、からくしまけてわぶる程ほどに、関白殿（関白）、「われ

## 一 のち—国本「後」

使<sup>ふり</sup>せむ」とて、文書<sup>ふみか</sup>かせ、中宮<sup>なかつう</sup>の御方<sup>みかた</sup>にわたらせ給へるに、女房<sup>にようぼう</sup>みなかくれて、心得<sup>こころえ</sup>てさし出<sup>い</sup>でねば、とかくして、うちかけて帰<sup>かへ</sup>らせ給ぬ。中宮<sup>なかつう</sup>には、また「これに勝<sup>まさ</sup>る使<sup>つかひ</sup>は、院<sup>いん</sup>こそはをしまさめ」とて、「かゝる事<sup>こと</sup>こそ侍<sup>さむらひ</sup>へ」とて、内<sup>うち</sup>の御使<sup>みつかひ</sup>にやありけむ、頭<sup>かしら</sup>の中將<sup>ちゆうしやう</sup>とて教長<sup>けうちやう</sup>の君<sup>きみ</sup>、鳥羽<sup>とりば</sup>の院<sup>いん</sup>の六条<sup>りくじやう</sup>にをしましゝに申されければ、「いかにも侍<sup>はべ</sup>るべきに、女房<sup>にようぼう</sup>のとりつぎて、せため侍<sup>さむらひ</sup>れば、えなむし侍<sup>さむらひ</sup>るまじき」と申させ給などしてあり、と聞<sup>き</sup>侍<sup>さむらひ</sup>し。後<sup>のち</sup>にはいかゞなりはべりにけむ。

(皇孫) この女院<sup>によういん</sup>、はじめつ方は、上つね<sup>かみ</sup>にをはし、夜昼遊<sup>よるひるあそ</sup>ばせ給へるに、末<sup>すえ</sup>つ方<sup>かた</sup>には、

兵衛<sup>へいゑ</sup>の佐<sup>すけ</sup>などいふ人出<sup>い</sup>で来て、めづらしき折<sup>おり</sup>も、多くをはしましけるに、上<sup>うへ</sup>ふとわたらせ給へりけるに、しばし短<sup>みじ</sup>き御屏風<sup>ぎよふう</sup>の上<sup>うへ</sup>より御覧<sup>ごらん</sup>じければ、后<sup>きさき</sup>、十五<sup>ご</sup>かさなりたる、白<sup>しろ</sup>き御衣<sup>ぎよえ</sup>奉<sup>たてまつ</sup>りたる御袖口<sup>ぎそぐち</sup>の、白浪<sup>しろなみ</sup>立ちたるやうに、匂<sup>にお</sup>ひたりけるを、「浪<sup>なみ</sup>の寄<sup>よ</sup>りたるを見るやうなる御袖<sup>ぎそ</sup>かな」と仰<sup>おほ</sup>せられければ、「うらみぬ袖<sup>そで</sup>にもや」と、いらへ申させ給けると聞<sup>き</sup>え侍<sup>さむらひ</sup>し。「うらみぬ袖<sup>そで</sup>も浪<sup>なみ</sup>は立<sup>た</sup>ちけり」といふゝる事<sup>こと</sup>、何<sup>なん</sup>侍<sup>はべ</sup>るとかや。「折節<sup>せうせつ</sup>いとやさしく侍<sup>さむらひ</sup>けることかな」とこそ、伝<sup>つた</sup>へうけ給<sup>たま</sup>りしか。ひがごとくにや侍<sup>さむらひ</sup>けむ。人の伝<sup>つた</sup>へ語<sup>かた</sup>り侍<sup>さむらひ</sup>し事は、知<sup>し</sup>りがたくぞ侍<sup>さむらひ</sup>。

二 つたへかたり侍<sup>さむらひ</sup>—和本「つたえかたり侍<sup>さむらひ</sup>」。国本、前本に拠<sup>よ</sup>り改<sup>か</sup>む。蓬本<sup>ほうほん</sup>つたへはへる」

三 おはしまし—国本「をはしまし」

(皇孫) 新院<sup>しんいん</sup>遠<sup>とほ</sup>くおはしまして後<sup>のち</sup>、この女院<sup>によういん</sup>は御髪<sup>ぎんぱみ</sup>をろさせ給てけりとなむ、聞<sup>き</sup>えさせ給<sup>たま</sup>ふ。同<sup>どう</sup>じ事<sup>こと</sup>ゝ申<sup>まを</sup>ながらも、いとあはれにかなしく。

一  
に―和<sup>わ</sup>本<sup>ほん</sup>、国<sup>こく</sup>本<sup>ほん</sup>なし。蓬<sup>もも</sup>本<sup>ほん</sup>、前<sup>まへ</sup>本<sup>ほん</sup>に拠<sup>よ</sup>り  
補<sup>おぎな</sup>ふ。

近衛<sup>みかど</sup>の帝<sup>みかど</sup>の御時<sup>ごとき</sup>の中宮<sup>なみやう</sup>皇子<sup>みぎ</sup>と申<sup>まを</sup>も、太政大臣<sup>たいていだいじん</sup>伊通<sup>いどう</sup>のをとゞの御女<sup>みすめ</sup>、この法性<sup>（忠通）</sup>  
寺殿<sup>てらどの</sup>、御子<sup>ごこ</sup>にてぞ奉<sup>たてまつ</sup>り給<sup>たま</sup>へる。このごろ九条院<sup>くじょういん</sup>と申<sup>まを</sup>なるべし。まことの御子<sup>ごこ</sup>なら  
ねど、院号<sup>いんごう</sup>も、関白<sup>かんぱく</sup>の子<sup>こ</sup>とて侍<sup>さむらひ</sup>とかや。この法性寺殿<sup>（忠通）</sup>は、二条<sup>ふたじょう</sup>帝<sup>みかど</sup>の御時<sup>ごとき</sup>も、女御<sup>（百子）</sup>  
奉<sup>たてまつ</sup>らせ給<sup>たま</sup>て、中宮<sup>なみやう</sup>に立<sup>た</sup>ち給<sup>たま</sup>き。帝<sup>みかど</sup>かくれさせ給<sup>たま</sup>ても、今<sup>いま</sup>の新院<sup>（六条）</sup>位<sup>くらゐ</sup>の御時<sup>ごとき</sup>、国母<sup>くくも</sup>と  
て、なを内<sup>うち</sup>にをはしませ給<sup>たま</sup>き。帝<sup>みかど</sup>、位去<sup>くらゐ</sup>らせ給<sup>たま</sup>にしかば、里<sup>さと</sup>にをはしませども、な  
を中宮<sup>なみやう</sup>と申<sup>まを</sup>するべし。御髪<sup>ごみ</sup>をろさせ給<sup>たま</sup>へるとかや。まだ御年<sup>ごとし</sup>廿三四などにやを  
はしますらむ。

このごろばかり、上臈<sup>みづう</sup>の入道<sup>みちのち</sup>の宮<sup>みや</sup>、院<sup>いん</sup>たち、多<sup>おほ</sup>くをはします折<sup>せう</sup>は、ありがたく  
や侍<sup>さむらひ</sup>らむ。女院<sup>にょいん</sup>いつところをはします。大宮<sup>（多子）</sup>、中宮<sup>（百子）</sup>、二人<sup>ふたり</sup>の后<sup>きさき</sup>の宮<sup>みや</sup>、齋宮<sup>さいみやう</sup>、齋院<sup>さいいん</sup>  
など、かたぐ聞<sup>きこ</sup>えさせ給<sup>たま</sup>。かつは世<sup>よ</sup>のはかなさによらせ給<sup>たま</sup>。仏<sup>ほとけ</sup>の道<sup>みち</sup>のひろまり  
給<sup>たま</sup>ふなるべし。

## かざりたち

富家<sup>（忠実）</sup>の入道<sup>（忠実）</sup>をとゞの御子<sup>ごこ</sup>は、法性寺<sup>（忠通）</sup>の太政大臣<sup>おほききとら</sup>、次<sup>つぎ</sup>には宇治<sup>うぢ</sup>の左<sup>ひだり</sup>の大<sup>おほ</sup>臣<sup>とみ</sup>頼長<sup>よりなが</sup>と  
聞<sup>きこ</sup>え給<sup>たま</sup>し。女君<sup>ぎみ</sup>は高陽院<sup>こうやういん</sup>と申<sup>まを</sup>し、泰子<sup>たいし</sup>の皇后宮<sup>こうごうみやう</sup>と聞<sup>きこ</sup>え給<sup>たま</sup>き。法性寺殿<sup>（忠通）</sup>、一つ御腹<sup>ごはら</sup>

一 きさき―和本、国本「きさらき」。蓬本、前本に拠り改む。  
 二 土さ守―国本「土左守」

の姉にをはしましき。長承三年三月の比、<sup>一</sup>后に立ち給。御年四十と聞えき。保延五年院号えさせ給き。左の大臣、御母は、土佐守盛実といひしが女にやをはしけむ。其左の大臣は、御みめもよくをはし、身の御才もひろき人になむ聞え給し。堀川大納言に、前書とか聞ゆる書、うけ伝へさせ給へりけり。その書は、匡房の中納言より伝はりて、読み伝へたる人かたく侍なるを、この殿ぞ、伝へさせ給へりける。今は師の伝へも、絶えにたるにこそ侍なれ。かやうにしてさまぐ書ども読ませ給。僧の読む書も、因明などいふ書、奈良の僧どもに、たづねさせ給とかや聞えき。

笙の笛をぞ、おほみ遊には吹かせ給と聞え給し、御手書へせ給事をぞ、わざと書きやつさせ給けるにや、兄の殿に、いかにも劣らむずればなど、思ほしたりけるを、法性寺殿は、「われは詩も作るやうにおほゆるものを。さては詩をぞ作るまじきな」とぞ仰せられけるとかや聞え侍し。法性寺修理せさせ給。塔の焼けたる、造らせ給て、すがやかにいとめでたく侍き。日記などひろくたづねさせ給。事行はせ給事も、古き事ををこし、上達部の著座とかし給はぬをも、みな催しつけなどして、おほやけわたくしにつけて、何事もいみじくきびしき人にぞをはせし。道にあふ人、きびしく恥ぢがましき事多く聞えき。

公事行ひ給ふにつけて、をそく参る人、障り申などをば、家焼きこぼちなどせ

一 かへし やぶられてたちしのぶべきかたぞなききをぞたのむかくれみのかせし和本、国本なし。蓬本に廻り補ふ。前本もほぼ同文。

二 かし和本、国本なし。蓬本、前本に廻り補ふ。

られけり。奈良に濟円僧都と聞えし名僧の、出請に障り申ければ、京の宿房こぼちけるに、山の仲胤僧都と聞えしと、たはぶれがたきにて、みめ論じて、もろともに我こそ鬼などいひつゝ、歌詠みかはしけるに、仲胤これを聞て、濟円がいひつかはしける、

まことにや君がつかやをこぼつる世にはまされるこゝめありけり返し、

破られて立ちしのぶべき方ぞなき君をぞ頼む隠れ簀貸せとぞ聞え侍ける。

また女怨せさせ給ことも、あらしくぞ聞え侍りける。いはいをなどいふ、古色好みとかや思はせ給けむ、夜にはかにをはしたりければ、隠れて思ひかけぬものゝ後などにありけるを、もりのり、つねのりなどいふ人どもして、求めなどして、隠れのあやしの方まで見けれど、え求めえて帰り給て、又昼あらぬさまにて、かくわたらせ給へると侍りければ、この度は、出であひたてまつりて、対面しけるにも、昔今の物語などして、ことうるはしく帰り出でさせ給にけり。「ふたゝびながら、よづかざりし」などぞいひけると、人は語り侍し。

この御童名は、あや君と申けるに、富家殿、法性寺殿、親子の御仲、後にこそたがはせ給へりしか、はじめは左の大臣、御子にせさせたまつり給ひけるころ、

飾太刀持たせて奉らせ給けるに、

代々をへて伝えて持たる飾太刀のいしづきもせずあやおぼしめせ

と詠ませ給へりける程に、末には御心どもたがひて、この弟の左の大臣を、院と

ゝもにひき給ひて、藤氏の長者をもとりて、これになしたてまつり給。

賀茂詣などは、一人こそ多くし給を、兄の殿をきて、この左の大臣殿へ賀

茂詣とて、世のいとなみなるに、東三条などをもとりかへして、鎌などのなかり

けるにや、御倉の戸割りなどぞ聞え侍し。二人ならびて、内覧の宣旨など蒙給、

隨身賜はりなどし給。かゝる程に、鳥羽院失せさせ給て、讃岐院と、左の大臣と

御心あはせて、この院の位にをはしまし、時、白河の大炊御門殿にて、いくさし

給しに、帝の御まもり強くて、左の大臣も、馬に乗りて出で給ける程に、誰が射

たてまつりたりけるにか、矢に当り給へりけるが、奈良に逃げてをはして、ほど

なく失せ給にき。

その君達、右大将兼長と聞え給し、御母師俊の中納言の御女なり。その大将殿

は、御みめこそいときよらに、あまりにふとり給てやははしましけむ、御心ばへ

もいとうつくしくをはしけり。次に中納言の中將師長と申へは、陸奥の守信雅と

聞えし御孫にやははすらむ。その御弟は、中將隆長と申ける。それも入道中納言

の御腹なるべし。みな流され給て、浦くにはせしに、中納言中將殿は帰りの



一 も一國本なし。

二 嵇叔夜一國本「嵇叔夜」

三 やさしく一國本「やさしく」

ぼり給て、大納言になり、大將などにをはすめり。身の御才なども、幼くよりよき人にてをはしますと聞え給き。

琵琶すべて上手にをはすとぞ申、と聞え給。宮に別れて、土佐の国へをはしけるに、これもりとかいふ陪従、御送りに参りける道にて、琴のえならぬ調べ伝え給とて、その文の奥に、歌詠み給へりけるこそ、あはれにかなしくうけ給しか。

教へ置かたみを深くしのばなむ身は青海の波に流れぬ

とかやぞ聞へ侍し。青海は、かの調べの心なるべし。いとかなくやさしくも侍りける事かな。

唐土に、昔嵇叔夜といひける人の、琴のすぐれたる調べを、この世ならぬ人に伝へ習ひて、ひとり知れりけるを、袁孝尼とかいひける琴弾きの、あながちに習はむといひけれども、ないがしろに思ひて、許さざりける程に、罪を蒙ける時は、この調べのながく絶へぬる事をこそ悲しびけれ。この琴の調べを伝へ給けむこそ、かしこくたのもしくもうけ給はりしか。琵琶こそすぐれ給へりと聞え給しか、箏の琴をも、かくきはめさせ給て、御祖父のあとつがせ給、いとやさしくうけ給侍れ。

かくて年へて後、帰りのぼり給へるに、二条の帝、琵琶を好ませ給て召しければ、参り給て、賀王といふ楽を弾き給けると伝へうけ給。さて元の員の外に、大

納言に加へり給て、うちつゞき大将かけ給へるなるべし。その外の君達は、みな浦くにてかくれ給にける。いと悲しく、いかにあはれに、主も人も思ほしけむ。この奈良にをせし禪師の君も、帰りのぼり給て後、失せ給にける。たゞの事とおぼえ給はぬ御ありさまなり。

この左の大臣は、近衛の帝の御時、女御奉り給へりき。大炊御門の右大臣公能のをとゞの三君を、御子にし給ひて、奉り給て、皇后宮多子と申。その左の大臣の北の方は、大炊御門の大臣の御妹なれば、そのゆかりに、御子にし給へるなるべし。このごろは、大宮とぞ聞えさせ給なる。

### こけのころも

後の二条殿の御子には、富家の入道太政大臣、その御弟には、宰相中将家政、少納言家隆とてをはしき。但馬守良綱といひしが女の腹にをはす。その宰相、御心ばへのきわだかにをはしけるにや、三条のあし宰相とぞ、人は申侍し。その御子には、顕隆の中納言の女の腹にをはせし、雅教の中納言と申、身の御才ひろくをはしける。つかさをも返したてまつり給て、頭をろして、高野にをはすと聞

侍し。その御子にて、小將一人をはすなる。前の美作守頭能と聞えしが女の腹にやおはすらむ。弟の少将公房と聞え給ふ、二条の帝かくれさせ給て、世はななく思ほしとりて、高野の山にのぼりて、頭をろして住み給なれば、御親の中納言もそれに引かれて、深き山に住み給へるなるべし。

昔こそ若き近衛のすけなど、世をのがれて山に住み給とは、古き物語にも聞え侍るに、これこそあはれにかなしく。花山の僧正の深草の御時、蔵人の頭にをはしけるが、夜昼なれつかうまつりて、諒闇になりなければ、悲しみにたへずして、御髪をろし給て、苔の衣かはきがたく、入道中納言の、後一条院の御忌に、帝を恋ひたてまつりて、世をそむきて、深き山に住み給けむにも、をくれぬあはれさにこそ聞え給めれ。昔はいかばかりかは、かやうの人聞え給し。

九条殿、御子高光の少将、はじめは横川に住み給て、「たゞかばかりぞ枝に残れる」などいふ御哥聞え侍き。後には多武の峯にをはしき。また少将時紋と聞え給し源氏の、一条のをとどの御子、大原の御室など聞えて、やむごとなき真言師にをはしき。また村上の兵部卿致平の御子の成信の中将、また堀川の関白の孫にやはしけむ、重家の少将とて、右大臣のひとり子にをはせし、もろともに仏の道に一つ御心に契り申給て、三井寺の慶祚阿闍梨の室にをはして、「世をそむきなむ」との給ければ、「名高くをはする君達にをはするに、便なく侍なむ」と、

いなぎ申けれど、かねて御髪を切りておはしければ、慶祚阿闍梨許しきこえてけり。

照中將、光少將(成徳)と申けるとかや。中將は廿三、いまひとり廿五におはしける

とかや。行成の大納言の御夢に、重家の消息とて、「世をそむきなむ」といふことをの給えりけるを、御堂のおとの御もとにおはしましあひて、「かゝる夢こそ見侍りつれ」と、語りきこえ給ければ、少將うち笑ひて、「まさしき御夢にはべり。しか思」などのたまはせける。次の夜、寺の大阿闍梨の房へをはしたりけるとなむ。年ごろの御心ざしの上に、時の一人の人のわづらひ給だに、人もたゆむ事多く、世の頼みなきやうにおぼえ給ことの、心細くおぼえ給て、さばかりのをしかるべき君達の、その御としの程に、思ほしとり、行ひすまし給へりし。あはれなどいふも、よろしかりし事ぞかし。

この事を、また人の申し侍しは、斉信、公任、俊賢、行成など聞え給し大納言たち、陣の座にて、世の定めなどし給けるを、立ち聞ゝ給て、位高くのぼらむと思ふは、身の恥を知らぬにこそありけれ、かやうに世の定めなどせむ事も、え及ぶべくもおぼえず、後の世をぞ思ひとるべかりける、と思ひて、出で給ける夜半、  
重家の少將、御親の大臣殿にいとま申給ける。おほかた止めらるべきけしきもなかりければ、え止め給はざりけるとも聞え侍き。行成の大納言の御日記には、前

一  
はなやま―国本なし。

に申つるやうにぞ侍るなる。これはこと人の語りはべりしなり。四条大納言の御哥など侍しかとよ。御集などには見え侍らむ。

また飯室(飯徳)の入道中納言の御子、成房の中將の君も、親の中納言の同じ深き谷、五の室ならべて、行ひ給しぞかし。其義懷の中納言、また維成の弁、この二人は、花山院の折、頭をろし給へりき。四条の大納言御哥、弁の大徳のもとに、

さゝなみや志賀の浦風いかばかり心のすゞしかるらむ

とぞ聞え侍し。昔こそ、盛りなる人のかやうなるは聞え給しか、近き世には、かゝる人も聞え給はぬを、この公房(きむらふ)の少將こそ、あはれにかなしく聞え給ふめれ。

はなやま

大殿(師老)、男君たちは、後二条殿(師通)、次に花山院の左の大臣家忠とて、大臣の大將にて、久しく一の上にてをはしき。その母、美濃守頼国と聞えし源氏の女の腹にをはす。

このをとゞ、関白にもなり給べき人にをはすれど、御兄の二条殿の御子、富家の入道をとゞ、大殿(悪夷)、孫にをはする上に、御子にしたてまつり給て、関白つぎ給

—  
ける—国本「けれ」

へれば、大殿をはしまし、世より、「富家殿を頼み申して、あはれ」と仰せられ、をきてさせ給へりければ、何事も申あはせつゝ過ぎ給けるに、富家殿関白になり給て、大将のき給へりけるを、白川院御おぼえにて、「宗通の大納言なるべし」と聞えければ、このをとゞ、富家殿に、「いかゞし侍べき」と、申あはせ給けるに、「いかにも力及ばぬ事にこそあめれ。さるにても、もし少しのつまともやなると、中宮にこゝろざしを見え申給へ。この家にいとなき事なれど」など侍ければ、「まことにしか侍こと」ゝて、申入れ給へりければ、「思ひかけぬ御こゝろざしなり」など聞え給ける程に、白川院、宗忠のをとゞ頭弁にをはしける時、「きと参れ」と侍ければ、遅くやをほしめすらむと、恐れおぼしけれど、いと心よき御けしきにて、堀川の帝の位にをはし、時、内へ参りて申せとて、「大将あきてはべるに、宗通なしはべらむと思ひ給なり。幼くよりおほし立て侍て、さがたく思ふあまりになむ、など奏せよ」と侍りければ、わづらはしき事にかゝりぬと思ひながら、参り給へりけるに、内には御笛吹かせ給て、きこしめしも入れざりけるを、暇うかゝひて、かくと奏し給ければ、御返事もなくて、なを笛吹かせ給て、入らせ給にけるを、急ぎて御返事申せと侍つるものと思ひて、をどろかし申されければ、出でさせ給て、「いかさまにも御はからひにこそはべらめ。かく仰せつかはすべしとも思ひ給へはべらず。かゝる仰侍れば、をそりながら申

一 よの人―和本「よの人の」。国本、蓬本、前本に廻り改む。

侍になむ。昔うけ給はべりし仰に、『世のまつりごとは、司召にあるべきなり。しかあれば、大臣、大将などよりはじめて、鞍負のまつり事人まで、人の耳をどろくばかりのつかさをば、よくためらひて、世の人はむ事を聞くべきなり』とうけ侍しより、いとかしこき仰なりと、心の底に思ふ給てなむ、まかり過ぎ侍。この大将の事は、しか侍べきにとりて、家忠こそ関白の子にて侍うへに、位も上藤に侍を越え侍らむや。いかゞと思給に、下藤なりとも、身の才などすぐれ侍ば、その方とおぼえ侍べきに、それも勝りたる事も侍らず。いかにも御はからひに侍べしと申せ』とのたまはせければ、返参られ侍けるに、急ぎ問はせ給けるに、かく申ければ、院聞かせ給て、『しばし侍へ』とて、かかねて召して、『えもいはずのたまはするものかな。まことにことはりなり』とて、家忠仰くだすべきよし侍りてぞ、このをとゞ大将にはなり給ける。

このをとゞの御子は、中納言忠宗と申しき。其中納言は、播磨守定綱と聞えし女の腹にをはしき。中納言いとよき人にぞをはせし。雅兼の中納言とならび給て、五位藏人十年ばかり、藏人の頭にて十年などやをはしけむ。廿年の職事にて、二人ながら同じやうに仕へ給し。昔にも恥ぢず、末の世には、ありがたき職事とて、をしまれ給程に、なか／＼遅くのほり給とぞ、いたみ給ひける。宰相中納言まで、同じやうにならびてのほり給き。忠宗の中納言は、中宮の権大夫と聞え給

き。

その中納言の御子<sup>こ</sup>は、修理<sup>すり</sup>の大夫<sup>だふ</sup>家安<sup>けあ</sup>と聞<sup>き</sup>えし腹<sup>はら</sup>にをはする君達<sup>きみたち</sup>、花山院<sup>はなやま</sup>の太政大臣<sup>たいていだいじん</sup>忠雅<sup>ちゅうが</sup>、又中納言<sup>ちゅうなごん</sup>忠親<sup>ちゅうしん</sup>など申<sup>まう</sup>て、親<sup>おや</sup>の御子<sup>ごこ</sup>なれば、よき上達部<sup>じやうたつぶ</sup>たちにぞおはすと聞<sup>き</sup>え給<sup>たま</sup>ふ。忠親<sup>ちゅうしん</sup>の中納言<sup>ちゅうなごん</sup>、是も親<sup>おや</sup>たちのをせしやうに、雅兼<sup>まさかね</sup>の子<sup>こ</sup>の雅頼<sup>まさより</sup>の中納言<sup>ちゅうなごん</sup>と、藏人<sup>ざうじん</sup>の頭<sup>かぶ</sup>にならび給<sup>たま</sup>て、宰相<sup>さいしやう</sup>中納言<sup>ちゅうなごん</sup>にも、同じやうにうちつゞきのほり給<sup>たま</sup>なるも、いとかひくしく。忠雅<sup>ちゅうが</sup>のをとゞは、三位<sup>さんゐ</sup>の中將<sup>ちゅうしやう</sup>、大臣<sup>だいじん</sup>の大將<sup>だいしやう</sup>などへ給<sup>たま</sup>て、太政大臣<sup>たいていだいじん</sup>までいたり給<sup>たま</sup>へり。

一 一に「和本、国本」は。蓬本、前本に拠り改む。

二 播磨のすけ「国本」播磨のすけ「

三 や「和本」なし。国本、蓬本、前本に拠り補ふ。

その子<sup>こ</sup>にをはする、兼雅<sup>かねまさ</sup>の中納言<sup>ちゅうなごん</sup>は、家成<sup>けななり</sup>の中納言<sup>ちゅうなごん</sup>の女<sup>むすめ</sup>の腹<sup>はら</sup>にやはするむ。それも三位<sup>さんゐ</sup>の中將<sup>ちゅうしやう</sup>など聞<sup>き</sup>え給<sup>たま</sup>ふ。中宮<sup>ちゅうぐう</sup>の権大夫<sup>ごんだふ</sup>の兄<sup>あに</sup>とて、播磨<sup>はりま</sup>介<sup>け</sup>忠兼<sup>ちゅうかね</sup>といふ人もはしけり。弟<sup>おとうと</sup>の中納言<sup>ちゅうなごん</sup>の、上達部<sup>じやうたつぶ</sup>になり給<sup>たま</sup>て後<sup>あと</sup>、親<sup>おや</sup>の大臣<sup>だいじん</sup>殿<sup>どの</sup>、大將<sup>だいしやう</sup>を奉<sup>たてまつ</sup>りて、小將<sup>せうしやう</sup>にはじめてなし申し給<sup>たま</sup>ひけるとかや。其小將<sup>せうしやう</sup>の子<sup>こ</sup>に光家<sup>みつけ</sup>とか聞<sup>き</sup>え給<sup>たま</sup>けるを、大殿<sup>おほいどの</sup>御子<sup>ごこ</sup>にし給<sup>たま</sup>て、殿上<sup>どのじやう</sup>せさせ給<sup>たま</sup>へりける。侍從<sup>しじやう</sup>にをはしけるをば、かの侍從<sup>しじやう</sup>とぞ人は申<sup>まう</sup>ける。親<sup>おや</sup>はかくれて、子<sup>こ</sup>のあらはれたるとりなるべし。その親<sup>おや</sup>の小將<sup>せうしやう</sup>は、子<sup>こ</sup>より後<sup>あと</sup>に殿上<sup>どのじやう</sup>もし給<sup>たま</sup>けるとかや。

前表  
大殿<sup>だいだん</sup>、三郎<sup>さんらう</sup>にては、按察<sup>あんさつ</sup>の大納言<sup>だいなごん</sup>経実<sup>けいじつ</sup>と申<sup>まう</sup>してをはしき。二位<sup>にゐ</sup>の大納言<sup>だいなごん</sup>とぞ申し。二位<sup>にゐ</sup>の宰相<sup>さいしやう</sup>など申しつたりけるとぞ。の御母<sup>ごはは</sup>、美濃守<sup>みののかみ</sup>基貞<sup>きさだ</sup>の女<sup>むすめ</sup>なり。其大納言<sup>だいなごん</sup>の女<sup>むすめ</sup>は、公実<sup>こうじつ</sup>の春宮<sup>はるぐう</sup>の大夫<sup>だふ</sup>の大君<sup>だいきみ</sup>の腹<sup>はら</sup>にをはせしを、院<sup>ゐん</sup>の宮<sup>みや</sup>とてをはし



## 一 中納言―国本「中納言殿」

ましゝに参り給て、二条の御門生みたてまつりて、かくれ給にき。后贈られ給て、父の大納言殿は、太政大臣贈られ給へると。その贈后の一つ御腹にをはすなる、このごろ経宗の左の大臣と聞え給。二条の院のをぢにてをはせし上に、我からもはかしくをはするにや、よき上達部とぞ聞え給める。親の大納言殿も、兄の中納言も、ゝのなど書き給こともをはずと聞えしに、これは書にもたづさはり給へるとぞ聞え給。

5

## 二 春わかか君―国本「春わかか君」

## 三 の―国本「に」

御子に中将の君をはすなる。清隆の中納言の女の腹にやはすらむ。この大殿ゝ兄ども、多くおはするなるべし。経定の中納言は、治部卿通俊の女の腹にをはしけるとぞ聞えし。その次に、光忠の中納言と聞え給も、左の大臣の兄ゝをはするなるべし。二条の太后の宮の女房の子にをはせしを、かの宮養はせ給て、春わかかの君と聞えし。このごろは、前の中納言民部卿になり給へるとかや。按察の大納言の御子は、多くをはしけるとぞ聞え侍し。大侍従などいひてもをはしき。仁和寺の静経僧都と聞え給しは、よき真言師にて、しるしある人とぞ聞え給し。

大殿ゝ四郎にや当り給けむ、按察の一つ腹に良実の大納言と申しゝ、小野宮とぞ聞え給し。兄の殿よりも、文字など書き給しにや、検非違使の別当などし給き。

15

大殿ゝ五郎にやはしけむ、忠教の大納言、四条の民部卿とぞ聞え給し。其御母、遠江守永信が子に、藏人をりてつかさもなかりしにや、永業とかいひける人

10

の腹にをはす。其民部卿の御子どもあまたをはしき。忠基の中納言と申、筑紫の輔になり給へりしかとよ。神楽の笛ぞ、よく吹き給けるとうけ給し。その御子に、六角の宰相家通と申なるは、重通の按察の大納言の、養ひ申給けるとぞ聞え給。

## みづぐき

四條の民部卿の御子は、また俊明の大納言の御女の腹に、宰相の中將教長と聞え給し。後には左京のかみになりて、讃岐院ことどもおはしましに、頭をろし給ひて、常陸の浮島とかに流され給へりし。返のぼり給て、高野に住み給と聞え給。和歌の道にすぐれてをはするなるべし。手書にもをはすとぞ。処くの額なども書き給なり。又御堂の色紙形なども書き給とぞ聞ゆる。佐理の兵部卿の真のやうをぞ、好みて書き給とぞ聞ゆる。かつは法性寺のをととの御筋なるべし。花齒のをととも、さやうの筋に書とせ給とぞ聞えさせ給し。

宇治の左の大臣の、「朝隆、教長、いづれか勝りたる」と、きた大夫と聞えし人に、問ひ給はせければ、定め聞かむもよしなくて、「とりどりによく書きはべ

一  
を―和本なし。国本、前本に拠り補ふ。

り」とぞ、こたへ申てしと、定信の君、人に語られけるを、度／＼問はせ給けるにや、申しられにけるとも聞え侍り。はだえと骨とにたとへたるとかやぞ、入道は人に語られ侍ける。

朝隆の中納言は、行成の大納言の消息を、ゆゝしく写しにせられたるとぞ聞え侍める。その消息持たぬ人なく、世に多く侍なり。教長の御手も、さま／＼京田舎伝はりはべなり。宮内の大輔も、聖のすゝむる文、なにかと過ぎず書きひろめむと侍けり。いかに手本多く侍らむ。道風の主の、いますがりける世にこそ、一行持たぬ人は、恥に思ひ侍りけれ。

宮内の大輔は、大納言の末なれば、よく似らるべきにてはべれど、一つのやうを伝えられたるにや、つねに見ゆなるやうには、かはりてぞ侍なる。祖父の朱雀の治部卿の御手にぞ、よく似て侍なる。その定信の君は、一切経を一筆に書き給へる。たゞ人ともおぼえ給はず、世になき事にこそはべめれ。五部の大乘、大般若などだにありがたく侍るに、いとたふとき契り結び給へる人なるべし。

教長の御童名は、文殊君と聞えき。殿上人にをはせしにも、道心をはして、男ながら聖にをはすと聞え給しかば、いかばかりたふとくをはすらむ。その御弟にて、賀茂腹の君達、あまたをはすと聞え給。その御母こそ、歌詠みにをはせしか。祖父の名高き歌詠みなりしかばなるべし。いとやさしくこそ、「月や昔のかたみ

一 給へー国本「侍へ」

なるらむ」など詠み給へるぞかし。撰集には、有教が母とて入り給へり。奈良、仁和寺、山などに、僧君達も多くおはすとぞ聞え給。民部卿の次に、宮内卿と聞え給し。上達部にもならでやみ給にき。

### ふるさとの花の色

大殿(師次)の僧君達(仁座)は、山には理智房の座主と申て、男君たちよりも、兄、おはしけるなるべし。奈良には覚信大僧正、三井寺には白河(前四)の僧正とて、讃岐の御門の護持僧をはしき。忠教の大納言の一つ腹とぞ聞え給ふ。得大寺の法眼と申は、花山院の左の大臣(二)の一つ腹(一)にをはす。心のき、給へるにや、法金剛院の石立(一)てなどに召されて、参り給けるとかや。梵字などもよく書き給とぞ聞え給し。

奈良に玄覚僧正と申しもをはしき。失せ給し程に、仁和寺に寛運とかいひし人の、御修法の賞に僧都になりし。いかなりし事にか、誰が御使とかやにて、日毎にみてぐら奉らるゝ事ありと、きこしめしたりけるとかや。二条殿(師通)の御時にも、範俊とかや聞えし鳥羽の僧正、林の中にしのびて建てられたる丈六の明王の御堂にて、御修法行はるなど聞え侍し。これらよしなき事にはべり。

## 一 尊勝陀羅尼―国本「尊勝陀羅尼」

山の座主行玄僧正と聞え給しは、やむごとなき真言師にて、鳥羽院、仏のごとくにおぼし給ふと申せ給き。三昧の阿闍梨良祐といひし、やむごとなき真言師によく伝へならひ給て、心ばへふるまひありがたく、僧のあらまほしきさまにて、さる人また出で来がたくなむをはしける。尊勝陀羅尼の御導師にをはしけるに、ひぐらしある事なれば、僧前などいふ事もあり、またをのづから立ち給事などありけるに、御扇の上に五拈置きて、我御かはりとゞめ給へりけるなどをも、いと心にくゝよしありて、目もあやにぞ思ひあへりける。

## 二 なく―和本 国本なし。前本に擬り補ふ。

鳥羽院御髪をろさせ給へりし年にやはべりけむ、七月ばかりより、御わらはやみ大事にをはしまして、月来わづらはせ給しに、さまぐ御祈りせさせ給はぬ事なく、かたぐより御祈りしつゝ奉り給驗者として、三井寺の覚宗などいふ僧たち、うちかはりつゝ参りて、をこらせ給て、あさましく聞え侍し。驗者などし給ふさまにはをさせねど、この座主の参り給て、いのりたてまつり給けるにこそ、かひぐしくをこらせ給はざりけれ。また後にも、程へてをこらせ給けるにも、たびくやめたてまつり給へりけるとぞ聞え侍し。かやうの驗者には、山伏をのみたのもしきものに、この世は思ひあへるに、まことしき事は、この度ぞ見え侍ける。山階寺の尋範僧正と申ぞ、ひとり残り給て、このごろをはする。それは諸方の弁の女の御腹にや。奈良にはきよき僧もかたきを、いとたうとき人にぞをはすめ

一 なき―和本、国本「き」。蓬本、前本、古今和歌集に拠り補ふ。

る。和哥こそよく詠み給なめれ、と聞えはべりし。

宿もやと花も昔に匂へども主なき色はさびしかりけり

と詠み給へる、言葉もいひなれ、姿も詠みすまされ侍。近院(能行)の大臣の河原(かはら)の院に詠みて入れ給へる哥、

うちつけにさびしくもあるか紅葉葉(もみぢは)の主なき宿は色(いろ)なかりけり

といふ御哥(ごこ)の心なるものから、詠みかへられて、いとやさしく聞え侍。また範永が、「月の光(ひかり)もさびしかりけり」といふ哥の心なれども、又それにもかはりて侍。同じ御腹(ごはら)の兄(あに)て、寺に仁証法印とてもをはしき。なを僧君達(そうきんだら)は、あし法眼(ほっがん)など申もをはしき。また寺に法印(ほっしん)など申も。おほかた男君(おとぎみ)、十五六人ばかりやはしけむ。